

ニハ死亡拾人怪我貳拾人有之右乗取之臺場へ者陸卒之者爲致上陸置候旨七日之無事八日外國方致發炮攻寄候處長州方白旗を振り候付和睦之合圖ニ茂可有之と心得炮發見合候處無程家老兩人罷越船將へ面會之儀申聞候付船將面會之處長州ニ而各國へ對右様之致處置候筋ハ無之候得とも 勅命并幕府之命を奉し敵對いたし候へ共此末ハ致和睦度旨申聞候付同十四日英佛船將六百人程之人數召連上陸之上右之談判可致旨申來候趣申立候由御座候
右之趣ハ極々御秘事ニ而外々ハ御洩無之管之處甲斐守様御申繼之趣も有之旁御別段を以御内話被成候趣被仰聞候段申出候以上

八月廿日

澤村脩藏

〔探索書、尊攘錄對州工魯夷亂妨薩長夷艦砲戰附生麥伏水一件〕

元治元年より
一千八百六十四年九月十二日我元治元八月十二日

下關海峡の報告

今月四日諸國乃船々戰列を立て姫島を進發し下關の海口ニ碇を下せり茲ニ於て砲臺并ニ大炮備へ土手等を望見し猶寂寥として一個乃日本人を見す
五日各國の軍船タルタル。ヂンフレイ。メタリス。コロイス。潮ヲ溯りて徐々ニ砲臺方ニ近きたり此時晝後二時我八時の頃より各船隊の距離四鎊索鎊索の名は海上の遠近を測るに用ふ英制詳なとして進み行きしニ諸臺未タ一の彈丸をも打出す事無く自由ニ乗り入る事を得たり又佛蘭西の水師提督は端舟ニ乗りてイウイヤリユス船ヲ移りかくて十分時を過ぎる間ニコーベルは既ニ最も堅固なる砲臺ニ破裂彈を打懸け一秒時の内ニ諸方の砲臺へ同時ニ砲を打込しるば陸方も烈しく打出して終ニ長門領内大凡一里の地方英の一里はニ於て劇しき戰爭起り合衆國乃蒸氣軍艦ターキヤンは佛船セシラミと英船イウリヤリユスとの間ニ乗り入り碇を下し其位置を得たる時三十斤乃ハルロウト旋條砲を打出して

諸船兵士乃目を驚らす程乃働をふせり

七日ターキヤン、ヘルシウス、タンクレードの諸船が臺場乃近傍ニ猛勇ふる兵士を上陸せし難ふ臺場を乗取り大炮を奪ひ各其本船へ運送せんとする衆中ニ日本人より小銃を打懸けて支まり敵之勢より味方之水田ニ阻まれたる故ニ英佛の兵頗る創傷を蒙り然共敵兵も悉く打倒されて遂ニ一個乃人影を見す其後猶一ツの勢を抜きて凱旋ニ向ひし時又日本人を逐ひ退けんるをめぐり再び隊伍を整へり此時既ニ晝後六時夕六時比に至れり

又海軍兵隊四百人之彌々競ひ闘ひて前敵ニ備へし日本乃兵を打拂ひ益々進て終ニ敵を柵門まで逐ひ詰たり其時日本乃兵之其所ニ踏止り野戦砲四挺を以烈しく防戦せしより甲必丹アレキサンドル之足計打を其外兵卒死亡十人創傷廿人あり然と雖も勢ひ届せず猶激烈の戦を成して遂に野戦砲を奪ひ其火門ニ釘を打ちたり

佛蘭西人乃話ニ今度用ひし敵乃大炮多くハ昨年の勝軍ニ吾等釘を打し者なりと云ふ

此度奪取たる大炮七拾挺之内にて十一寸乃舊砲和蘭のサ或は重さ六頓半凡我千七百貫乃巨砲も亦またこれあり其外分捕乃諸品を悉く軍船へ輸送せり

阿蘭人一員乗りある阿蘭乃端舟一艘續解けて急潮の爲ニ七ノウトの速力を以押流されしニノウトと云ふ詞は潮水の進退に依て船の速速を測る名目にして七ノウトと云へは一忽然として日本人快艇を以て逐ひ來り此蘭人を捕へて立所ニ切殺せり此時味方にては日本人を時に七里走る早さを云ふ

一人も捕へ得ず

五日早朝 案ニ記事順序に據れば八日に長州乃士二人應接の爲メイウリヤリユス船中ニ來りて曰若し貴國乃船々ニ於て理ニ皆々事無らん之此海峡を外國人乃爲ニ開くへしと提督答て曰予之人民を愛憐する事切ふり且此所ニ滯船し冬を送らんとす

八日晝後二時我八時英國方歸りたる日本人二人イウリヤリユス船ニ來れり依て先ツ休戰旗乃章を引揚げ發炮を歇えしむ然共分捕せし大炮を運送する事ハ休まず扱二人の使者の云へるニ我君侯は和議を冀ふニ決せし依之第一等の家老を

して明後十日乃正午に船中より來らしめ諸事其談判に及ぶへしなま十日の十二時正より廿分前より家老船中より甚
 狹篤町噂の意を顯して専ら大君政府の事を誹謗し且合衆國全權に贈る所之書翰一封を差出せり此書翰之後譯出す
 此地の人民ハ其友愛として聊も殺伐の氣ヲ顯す者ハ其豐前の太守之甚謙愼ふる人として長州太守の意と大に齟齬す
 るに似り其教は長州にて此の如きの大戦争ヲ起し豊前領の人民をして戦を避けて生れ保せしむ可き程乃事を仕出し不
 らら豊前の太守に其戒心す可き程をも報告せざるを以て察すへし
 メヂユサ船之鎖を以蒸氣鑪を保護し能く戦をふせり最後に乗取たる砲臺は廿斤乃至四十斤の大砲十七挺を備へたり
 佛國船タンクレード之十一日午時長崎に向て出帆す十一日午後六時六分頃モラント船支那の上海を來りて碇を下
 せり時候ハ至極宜しくして書前七十度書後七十四度許より不日當港を開きて日本人商賣を成すに至らんとし此海峡
 之大坂を來る三百艘程乃廻船日ニ船懸りして最繁榮なる市街あり
 ベルシウス船之此始末を在横濱のミンストルに注進せんとて歸帆せり君等長州太守の 大君に畏服するや否を知る哉
 又京都に於て諸大名の評議ハ如何吾等 大君乃吾等と對して處置すへき事並言出す可き事を知れり只方今大名の見込
 は如何吾等是を知らん事を希望す
 總軍艦乃内數艘此港に滞留して冬日を送らんとす應援の日 大君が中國海通行の外國船を悉く打拂ふ可き命令之書翰
 長州に出示せしよしの説話あり若し實に其書翰あらば 大君乃外國人を欺く事明白なまと言へし 此一節七十二
 號より抄出す

〔尊攘錄對州エ魯夷亂妨薩長夷艦砲戰附生麥伏水一件〕

別段新聞

西曆一千八百六十四年九月十八日

我元治元年八月十八日神奈川開板

中國海戰爭始末

英國船々號ヘルシウス中國海を歸帆せしに依て聞得たる諸報を取あへず筆録して布告する事左之如し
 英國女王殿下之蒸氣軍艦イウリヤリウスに乗組タル水師提督ハ今月朔日 西ノ九月朔日我八月朔日ニ之夕方ニ佛朗西國之
 船隊と共に豊後海峡之入口に達せり然るに上海を石炭を積て來れる船ベルシウスも此所ニ來着せしハ此に乗組たる
 船將も一同ニ海峡へ乗込て兼而集會を約せし姫島に到りて碇を下せり翌二日の書前ニ又一組之軍船來着せり此一組者
 阿蘭船メタリス、ユロイス、ヂヤンビ及び亞墨利加の蒸氣船ターキヤン是なり
 諸國の軍船此一晝夜ニ此所ニ集り三日者石炭分配ニ一日を費せり四日惣軍船を分て三隊とふし英國の水師提督其中隊
 ニ在て諸船を導き當朝姫島を進發して下ノ關海峡入口に臨みて碇を下せり然る英國一艘船号コケツテ長崎に到着し
 て亦其船隊に加入れり水師提督及ニコモトルハ船乃甲板上ニ出て臺場之強弱を測る爲メニ海岸沿ふて徐々ニ船を進
 めて一二時を費せり是レ明日戰地之攻口を商議する爲也○五日諸船各戰爭の用意をなす爲ニ端舟を卸し或ハ綱具
 を捌き扨して兵卒勇氣常ニ倍し進て必勝を期せんと欲す○晝後二時我八碇を上ケよと号令をふし船々兼ての議定の如
 ク速ニ進發せり○重隊の一組ハ甲必丹ハイユスの指揮ニ依ル船号左之如し
 タルタル、チユフレイ、パロツサ、ヂヤンビ、レオバルト

輕船隊の一組者甲必丹キングダストンの命令ニ隨ふ其船号左之如し

ベルシウス、メヂユサ、タンクレート、コケツテ、ブンセル

重船隊ハ前田村及びサホ原文サホヌシヤホ或ハジヨホト書セリ今砲臺の前面を離る、事千六百九十余の處ニおろて南岸ニ
 其多キニ隨てサホと書す追て參考すへし沿ふて排列せり輕船隊ハ長府岬を攻取らん爲ニ北岸ニ近づき前田村及びサホの方を側面ニふして碇を卸し○晝
 後四時我七諸國此の如く備を立て日本乃陸地ハ未タ炮を發せざるニ提督の旗を立てたる船が掛んと号令を下すや否哉

元 治 元 年

同時ニ其船の軸乃方々四千三百ヤルト丁計り隔ちたる前田村ニ向て炮を打出せしむハ陸地方も速ニ炮を打返し是方双方五ニ烈しく打合ひたり茲ニ於て重船隊ハ斷へず猛烈なる炮發を成し輕船隊者海岸ニ沿ひて乘廻り重船隊の應援をふさんる爲ニ側面を最も劇しく炮發放す遂ニ長府岬乃炮臺を襲ひて復一彈丸をも打出す事能ハさるニ至らしむたりかくて暫時の間に味方の炮火ニ依て諸所の炮臺悉く打すくめられて音もせず成ニけり是ニ於てベルシウス船者先ニ立ちメヂユサ船も跡ニ續き濱邊ニ沿て前田村乃砲場迄十分打破りて程なく勝開聲を揚ふり甲必丹キングストン流底南ビツト同フロウド大炮方ユクライン等同勢廿人を卒めて上陸し其近傍乃森乃内方炮手乃發炮セさらんが爲ニ大炮十四挺乃火門ニ釘を手て是を廢物となせり此働ニ於てメヂユサ船乃助をふしたり○六日書前六時三十分時過六サホ乃炮臺方タルタル船ヂユフレイ船ニ向て炮を打出せしが是も程よく打止ミたり○輕船隊方ハ端舟を却し是にイウリヤリユス及ヒコシケール二船の内ニ乗組ある格羅拿シコサルラエスエクイル并ニ少しの軍卒ヲ載セ甲必丹アレキサンドルの指揮を受け端舟を進めて上陸シユナイオンジャツク英ノ國旗にして白とトリコロール 佛國旗の旗を飄して前田村乃砲臺乃方に青白紅と押し行きたり○翌午前十時の比我四バルシウス船將ニ漕ぎ返らんとするニ返りて退潮急ニして此船圖らす汀ニ打寄ら岸を距れる事僅ニ五十ヤルド間計廿五乃處ニ止まりて動るざりしるバ上陸セし兵卒乃保護をふし且怪我人を請取か爲ニ却て都合よりりしハ全く一時乃僥倖也○午後海軍乃兵士前田村砲臺乃方々サホ乃方へ進ミ行きて頗る戰功をあらハせり此時前田村乃内なる狹隘の路ニ柵を結びて備へる大炮七挺を奪ひ取り然るニ是を指揮セし甲必丹アレキサンドル不運ニして小銃乃玉ニ足を打抜れて倒れしるも戰争ハ味方乃勝利ニて奪ひし大炮をも運出せり○此午後ニ分捕セし大炮乃數あまた有之何をも彼ノ七挺の炮ニ同じく唐金筒ニして日本人鑄造の者也扱此諸炮ハ悉く端舟ニ積ミ載セ各其元船ニ運ひ行きぬり又ベルシウス船を引出さんとして力を盡しぬれとも潮合悪くして功を成さす○七日ニはタルタル、ヂユブレイ、メタリス、ココイス、ヂヤンセハ四艘此海峡乃上ニ溯り暫時乃間引島乃キブ子と名くる所ニ在る炮臺を打潰し大炮ヲ奪ひ取れり此夜ベルシウス船はバロツサアル、アルギユス二艘乃助ケニよりて淺洲を離る

て海面ニ浮ひ出ぬり○八日者海岸ニ降旗を建しニ依て諸船悉く發炮を休め一同無事なり長門方ハ説話を望むの趣を申し出たり○九日輕船隊を上ケ海岸ニ近寄り甲必丹キングストン及ヒケセムプロット乃指圖ニて少許乃兵士及上陸セし長府及ひ前田村乃狹路等ニて分捕したる大炮を其舟々ニ運送セり奪ひたる大炮之數

長府岬乃炮臺ニテ 四挺 前田村ニテ 廿八挺
 狹路ニテ 壹挺 サホニテ 十五挺
 引島乃キブ子岬ニテ 十五挺 柵を結びたる所ニテ 七挺
 通計 七拾挺

死傷人數
 英國死者 八人 傷者 四十八人 通計 五十六人
 蘭佛二國死者 四人 傷者 六人 通計 拾人
 士官以上之怪我人

流底南エドワルツ イウリヤリユス船 乗組 淺手
 士官キンクヒールド タルタル船 乗組 深手
 士官エトキンソン イウリヤリユス船 乗組 深手
 右ニ擧ぐる死傷人數之内廿六人はイウリヤリユス船乗組の者十人はタルタル船乗組の者なりイウリヤリユス船ハ此度乃戰爭ニ拔群乃働きをなせりタルタル船ハ炮廿四發を敵ニ打ち掛たるのみ其他記すへき程乃事ふし
 英國軍士官の怪我人

甲必丹テークンリー 深手 流底南イングリス 深手
 格羅拿キエマイル 淺手
 元 治 元 年

〔文久二年三月以來 探 索 書〕

死人 英 八人 英ノ負傷 合五十六人

佛 四人 佛 同 十人

蘭 同 六人

ユライレス

船將 アレキサンドル 深手

タルタル ロイテナントフロニー 九死一生

ユライレス エイワルト 薄手

タルタル ウキンタノイトルト 深手

ユライレス アトキンソン 深手

日本

長門死亡の人

大凡貳千四百人

負傷貳千人余リト云

〔佐田文書〕

亞米利加軍艦ターキアン乗組ウエリー日記

七月廿八日軍艦横濱出帆伊勢沖ニ而日没 廿九日土州沖ニ而日没 晦日晝八時伊豫國沖ニ至リ夕七時同國須毛浦

ニ碇ヲ下シ暗礁ヲ探索シ測量ス 八月朔夕七時豊后ノ屬島姫島エ碇泊 二日朝四時ヨリ夜四時迄七月廿七日出艦

ノ分共二十六艘ノ軍艦折々着 三日各國軍艦ヨリ「バツテーラ」ヲ卸シ島中ノ様子見分ノ事 四日朝五時フランス

軍艦先陣ニテ各列ヲ正シ出艦下ノ關入口臺場ヲ去ル凡一里程手前ニ而碇泊又英軍艦一隻蒸氣ヲ盛ニシ矢ヲ發スル如

ニ而來ル同所エ碇泊各軍艦ヨリ遠鏡ニ而臺場ノ様子其外隣國ノ形勢ヲ見ルノミニ而日ヲ終

五日 下ノ關入口エ向ヒ佛蘭西^{デユブレカ}ノ艦先陣續テ各出艦内四隻「フランス」英吉利兩國艦ハ下ノ臺場ヨリ向ヒ合

書九ツ時何レモ碇ヲ下シ長州ノ炮發ヲ待テ半時計先方更ニ炮發無之故先陣ノ佛艦ヨリ英ユラリス艦上役ノ軍事總督方

エ使者來ル其内晝八ツ時比右艦ヨリ炮發スル「ツツ」夫ヲ相圖ニ「先陣」佛艦英艦ヨリ炮發各艦ヨリモ炮發長州ノ方一

二三ノ臺場ヨリ恰モ霧靈ノ如クニ而炮烟天ニ漲リ其形勢難畫紙臺場ノ炮發ハ艦迄不來水中ニ落ル「大半」異艦ノ暴

母便破裂^ハ臺場ヲ崩シ又ハ火藥藏エ火移リ大火ニナリ晝八ツ半時比ニハ臺場ニハ一人モ長州勢無之只一面ニ火勢盛ニ

ナル凡夜四ツ時比迄燒ル末四ノ臺場ハ火藥藏一ツ燒ルノミニ有之炮發ハ幕六ツ時比ニ止ミ候事

六日 朝六時長州ヨリ炮發ソレヨリ異艦ヨリモ炮發長州一二三ノ臺場ヨリ炮發無之四ノ臺場計炮發凡十發計晝四ツ時

英佛蘭共一ノ臺場ヨリ上陸凡千五百人程一二三四ノ臺場へ人數ヲ分ケ何レモ異人旗ヲ建石四ヶ所ノ陣所不殘ボンベン

ニ而燒失最寄ノ民屋多分燒ケル幕六ツ時迄所々山ノ蔭ニ而長州方ノ伏兵ト戰爭有之其度々艦中ヨリ敵ノ屯所ヲ測リボ

ンベンヲ發シ陸戰ハ小銃ノ音而已長州勢一人モ不見臺場ハ一ヨリ四迄不殘異人ノ旗ヲ建ル且大炮へハ悉ク火門へ釘ヲ

打幕六時ニ至リ上陸ノ人數不殘歸艦晝夜諸方陣屋并民屋燒失ノ烟不絕事

七日 朝六ツ時異艦士卒千五百人上陸戰爭無之長勢敗走折々艦中ヨリ炮發アメリカターキアン艦ノ醫師ウエテル六日

ノ上陸ニ同行^ハ四ノ臺場へ先陣ニ行ク大將休ノモノ脱捨タル具是一領持來ル矢并暴母便ノ玉等持來ル者多分有之同日

戰爭手負人英艦へ舉ル夕七時遙三里程ノ遠山ニ長州勢異艦眺望ノ者四五人有之其餘今日ニ至リ一人モ不見手負七人夕

七時カンクヲ英艦ヨリ揚ル右ハ何レモ小銃ノ手負ニ而六日戰爭ノ長勢凡四五千程ノ伏兵時々有之幕六時比上陸ノ士卒

共歸艦夜九時比迄諸方燒失ノ烟不絕事

八日 朝六時艦中ノ士卒千五百人上陸追々向へ進行同刻英艦ヨリ手負一人同晝四ツ半時外英艦ヨリ二人當艦へ舉ル晝

九時長州方ノ重役一人小船ニ而白旗ヲ建英艦^{ユラカマ}コヲリス總督アムラル方へ來リ和ヲ乞應接有之書九ツ時諸艦中櫓工各白旗ヲ揚^{是ハ節降}炮發相止明後十日晝九時約定取結ニ參候心得ニ付キ戰爭見合候様前條使者申聞候事

六日ノ分書八ツ半時佛艦上陸ノ士卒十人戰死ノ者死骸豐前國小倉ヨリ出張之浦詰役人エ參談ノ上埋葬五番ノ臺場佛艦十發計炮發ニ而長州勢悉敗走大炮三十五不殘上陸士卒火門エ釘ヲ打事

九日 朝六ツ時出艦書四ツ時姫島碇泊各手負人乘組ニ付大氣流動ノ爲メ且ハ吞水相調ニ參タル事

十日 朝五半時姫島出艦書九時長府着艦碇泊英國^{ユラカマ}コウリス艦エ晝八時艦將ト同斷長州藩中十五六人大膳大夫殿書翰持參應接中ニ有之歸艦ノ碇右書翰持參^{書翰別}

十一日 無記事 右ハ七月廿八日横濱出艦ヨリ八月十一日迄ノ日記ニ而明日一隻横濱エ歸艦ニ付此儘ニ而差贈長州方臺場ニ備へ有之大炮ハ一番ヨリ五番迄ノ分大炮不殘ニ而八十挺英佛ノ軍艦ニ學ル車臺ハ悉ク燒拂ヒ^{我カ}異艦ニ而ハ怪我

人無之上陸ノ戰爭ノ砌死人手負ノ者二十人はハ追々ターキアン亞米利加軍艦エ舉養生致ス長州方ヨリ昨日十日鷄其外品々多分ニ手負ノ者へ見舞ト贈ル先方手負人數不知去ル七日豐前小倉領浦ニ上陸諸人エ役人面會様子承候處長州ノ暴戾悉ク惡^{異國人カマ}異人入用ノ品ハ何ニ而モ夫々可用立旨申聞是ハ實心ト申事ニ候艦中倉卒ニ記タル故遺漏ノ處モ不少候希ニ察見ニ也

〔風説帳〕

文久三年
一子八月十九日付長州新聞

去月廿六日廿七日追々各國軍艦都合十六艘當湊發帆長州ニ罷越候模様之處其後更ニ様子不相分於本月初旬右軍艦爲引戻外國奉行田村肥後守江戶表方帆前船ニ而出張之由ニ茂承候處是以如何相成候哉更ニ沙汰無之處一昨十七日夜右軍艦之内壹艘歸帆ニ付昨朝不取敢支配向役々御小人目付等爲尋聞罷越船將に而會始末相糺候處拾六艘之軍艦一同去ル三日

長海に着大小船組合せ船隊列を正し翌四日早天下關方長府之處に掛並候折柄地方所々之臺場方大炮嚴敷打懸候付各國

船方發炮双方打合數刻ニおよひ長州方之炮臺悉く被打崩終ニ難叶軍勢引退候付外國兵卒陸軍隊多人數小船ニ而上

陸尙陸地ニおゐて戰爭翌五日茂同様交戦長州方敗走と相決候處長州方ニ而和議之印白旗押立候付戰爭相止外國軍隊備

を設ケ扣居候之處大膳太夫家老何某なるもの出張外國軍中に罷越大將に而會之上昨年來各國之通船打拂候儀之素方私

意を以仕來候事ニ無之 勅命及臺命を奉し攘夷御決定との御趣意を相守居候處其後 朝廷并政府も別段御變革之御

沙汰無之今日迄前條之御法令ニ基キ所置有之候處京師幕府之御模様追々相替終ニ大膳太夫父子朝敵之名を蒙り候次第

ニ成行報國盡忠之素意も無之ニ付此後各國軍艦被指尙候得之右之通長州之罪ニ無之譯杯申通是迄之儀を説得致し度既

ニ此度各國軍艦渡來ニ付四日朝兼而先般英船ニ而送越候家來兩人を以^{此家來兩人は四年已前英船に乘組罷在居候五人之}内ニ而先頃同國軍艦ニ乘組衣服其外夷人之味相ニ相成

國其儘元 事情申述之たま差出候^{一應長州に聯合ニ相越本折柄海岸臺場に之未號令茂不行届ニ付粗忽ニ及發炮今日之形}に止候もの 事情申述之たま差出候^{船に立戻り其後上陸之由}

勢ニ相成候段就而之大膳大夫茂各國之船將ニ而會右等之始末尙巨細ニ申入改而和親條約取結せ互ニ迷惑無之様致し度

心得候間右之趣承知有之度旨申述候付各國評論之上和睦之儀之承知當月十四日於陸地船將等大膳大夫と面會以後之條

約取極候積相決し其段當地ニ罷在候各國ミニストル、コンシユル等に報告之たま内壹艘去ル十二日朝下ノ關出帆當湊

に立戻り候由申立候事

子八月十九日

先達而長州海に出帆之各國軍艦之内英國軍艦壹艘一昨十七日長州之戰爭及ひ始末注進之たま横濱港に入津致し右ニ付

同國通弁官ブレッキマンより其趣左之通申立候

一各國軍艦本月三日長海に着船之處五日ニ至り長州方方炮發致し候付英國軍艦より茂炮發戰爭ニ及ひ六日同斷長方大敗

走ニ付英之陸軍隊千人上陸致し炮臺之大炮八十門奪取長州方ニ即死六百人怪我人數不知英ニ而即死十人怪我貳拾人有

之同七日戰爭無之同八日各國軍艦と又々炮戰ニ及ひ候處長州方ニ而白旗を引揚候付降參と察し暫ク炮戰相扣候處家老

兩人英艦に相越是迄度々異國船に對し炮發致し候儀大膳大夫所存ニ無之全 勅命を奉し候上ニ候處兵力難敵ニ付和議取結度ニ付フトシラー口ニ上陸有之度趣相認候書翰差出候付同十四日上陸致し候積之由申越尤右之去十二日之報告ニ付其後之動靜ハ不相分趣ニ有之候

各國衆評之由左之通り

一前文之通長州方書翰を以申立候付大膳大夫誘引ニ而京師に罷出 勅命台命之廉對決致し其上ニ而諸事所置致候趣有之由

右之外相替儀不承候

八月十九日

〔尊攘錄對州エ魯夷亂妨薩長夷船砲戰附生麥伏水一件〕

元治元

子八月六日同十一日迄赤間關邊見聞書阿部野

平

合州之異船長州へ渡來之始末四日五日迄之事者飛脚を以奉申上候通ニ御座候猶六日之次第荒方奉言上候

一六日朝六時比方双方炮發前田ノ臺場者絶而炮發無御座候ダンノ浦者四五發位見請申候此日田ノ浦渡手に異船十艘並炮發仕候事

一同朝五時比方ダンノ浦陣屋燒申候少程過テバツテイラ八艘程卸前田臺場之方へ行無程上陸跡同船をダンノ浦に炮數發追々同臺場へ寄彼之方に茂上陸仕候事

但兩臺場共上陸之上炮器等ニ手を懸申候由ニ見且火藥其外所々人家等ニも火を懸申候バツテイラ數四拾余見請申候

一同時比方兩臺場之上山手へ陸炮戰大小之筒音烈敷内火藥貳度燒申候

一九時比方赤間關内ニても炮戰同所方長府之方ニ懸山中之炮聲且連發等無絶間大炮者船より不絶發申候赤間關八軒屋敷と申所に放火無程異人共同所をダンノ浦へ列行ニ立押行申候

但人數ハ赤間關をダンノ浦へ下ニ付札、赤間關をダンノ浦臺場へ八丁と申所ニ無尺地程ニ相見申候貳行六百餘人餘見積申候是迄之凡人數四百五十程見積申候此時迄之人數ハ船三艘申ノ下刻方者猶船五艘方上陸仕候由此砌者私山を下り候跡ニ而御座候間跡船上陸之事者薩藩園田彦左衛門に聞合申候都而船數八艘人數千程同人見積申候由是方園田彦左衛門嘶聞取申候次第

一赤間關に放火後猶多數人同所に向押行申候由無間同所引申候由夜ニ入五時比迄炮聲不止長州之人數多少且手負死亡等今ニ承不申候且上陸之異人共同夜本船へ引申候由

一七日五時比猶異人上陸臺場居付之太炮等取申手際造作もふき事ニ御座候由

但臺場々々之異人方取申候炮數七拾或四拾共申候トニ付札、臺場大砲卸申候薩長州人手傳加勢杯いたし申候由上條八兵衛新

一同時比方異船貳艘瀬戸口ニかけ赤間關見當ニ炮發仕候由

但炮聲五拾貳

一八日ヒク島之臺場へ無程異船方炮發同臺場方ハ一發切外炮聲無御座候由

一同所備之人數三百五拾人之内帆拾貳三反位之船ニ乗組引拂申候由異船方右之船を見當炮發四ツ然共船ニ者當不申候由

一同臺場に上陸炮器を取候上百姓家杯放火いたし火藥共燒拂其内異人共同所ニ而毛利家之紋所有ル白旗押立下ニ者文字も御座候へ共相分不申候由

一同日長州方異船に之使宍戸刑部杉本徳助罷越申候由ニ御座候

但長州方和を乞申候由然處一昨年來之炮發を異方責申候由之處全朝幕之指揮を以是迄之通ニいたし候と長方答申候處異方は幾重ニも疑を懸決而左様之事無之許りと異方責申候處 輪旨且幕府之書付も有之事ニ付入一覽申との事ニ

而使山口へ行 御輪旨幕府之御書附共持參候間九日晝比迄待吳候様申向長之使罷歸申候由然處今度横濱出帆之砌池田備中守様之應接御坐候而今度長州に襲來ハ是非思留候様金銀十萬ドル幕府之差出ニ相成可申段應接御坐候由夫も拒是非征伐を仕候と申罷越候付此節十萬ドル長之差出候ハ、聞濟いたし取揚候炮器ハ返可申と長へ申向候由ニ御坐候如何成行申候哉存候九日今日迄も炮聲無御坐候

此後上條八兵衛嘯ニ御坐候

一 フランスへ死亡六人手負も御坐候由數相分不申候

一 イギリスへ死亡十人程手負十人ヨ餘船不分明ニ御坐候よし

一 長州登京之節吉川四國路方へ乗附京變を聞直ニ引取其後山口之使立候得共病氣之由ニ而斷申候由ニ相唱申候

本行出帆之節備前侯之人數船共長州へ差出ニ相成候處出帆行先相分不申候由船貳拾艘人數不分明

一 益田福原國司等之事ハ事實相分不申候事

一 三田尻上ノ關邊京師替之後手負且同所ニ而死亡等多所之者甚困窮仕居候由御坐候

筑前様方新ニ黑崎に人數出張往來ニ柵門を切申候

但夜計と相見申候御同方様方若松黑崎邊へ者長州人ト見受候ハ、通行差留候様御觸御坐候御同方様人數千程ト申候

事ニ御坐候

右之通見聞仕候其外隱微之事件ニ至候而ハ聞取屆兼申候猶追々可奉言上奉存候且乍每草稿之儘奉候儀重疊奉恐入

候恐惶謹言

子八月十一日

井上嘉左衛門様

阿部 野 權 中 判

〔佐田文書〕

八月十三日朝歩御小姓河田敬次郎と申者外聞ニ被差越置候處小倉方罷歸咄之趣

一 長州ト外國船と炮戰之去ル五日六日兩日計ニテ其後無事之由

一 下關邊ハ長人一人も居不申不殘奥ニ立除八軒屋と申町燒失其餘者燒失無之由

一 外國軍艦之一艘引不申下關港ニ乗寄せ上陸致居候得共長方之登人も手向ひニ參申者無之由

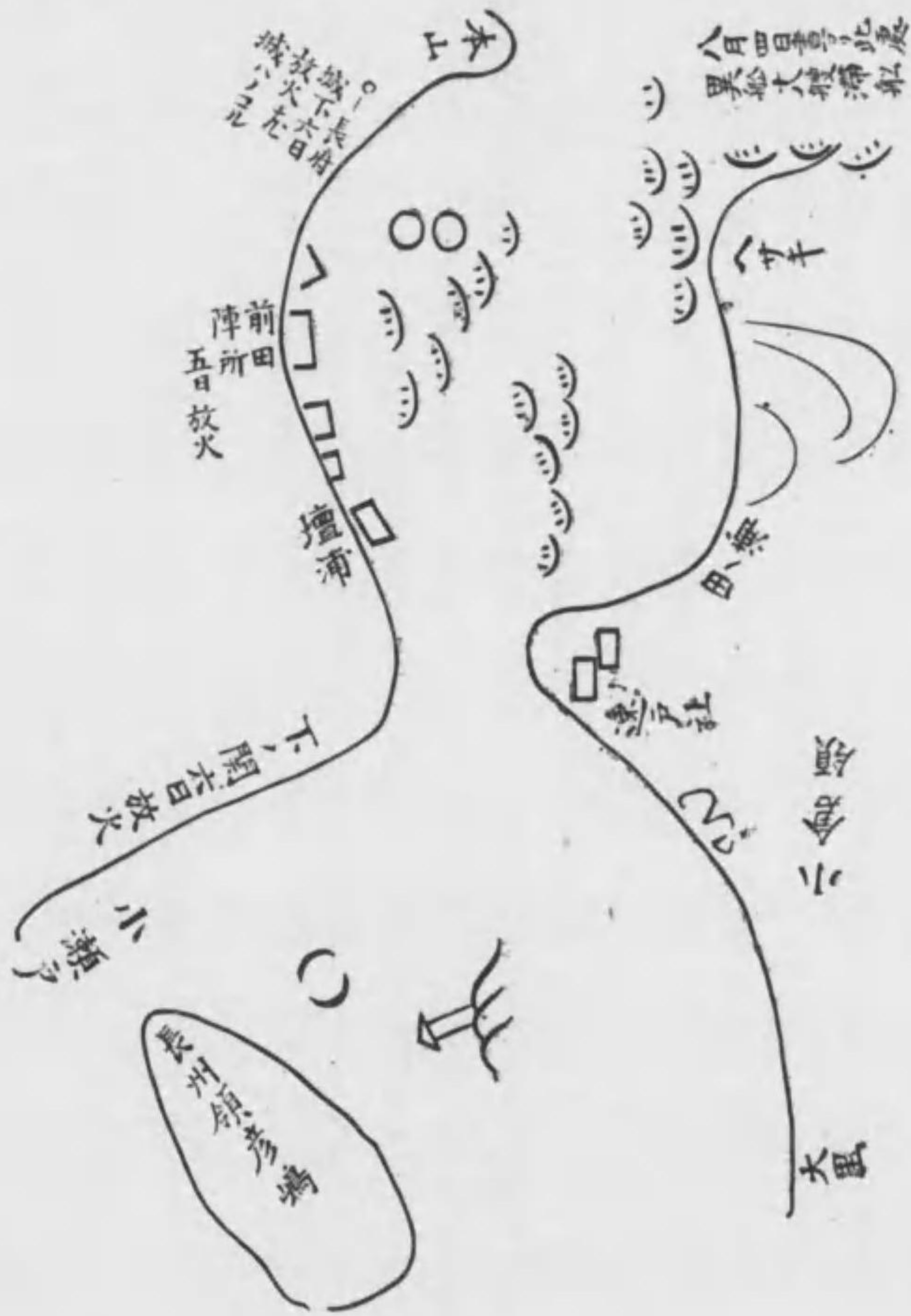
一 去ル九日ニハ長ノ高山ノ上ニ白旗を立候ニ付外國船之方ニ茂直様同斷白旗相立候由是ハ全世界中乞和之節如此いふし

候由

〔鎌田文書〕

〔八月十九日附京詰奉行方長岡護美隨行之奉行用人へ宛てたる書翰の別紙小倉方手ニ入申候書付寫とあるもの〕

北方浦船頭由兵衛と申者七月廿三日同所出帆商事ニ付豐前國小倉へ罷下商事片付當月四日退帆可仕所前三日暮比同國田ノ浦に異船八艘渡來類艦待合軍始候風聞有之候處軍艦拾七艘相捕既ニ爭戰之形勢世上騒敷相見候得共歸國差急候付五日朝無何心小倉河口出帆之折柄風落沖合下潮ニ漂居候處に遙ニ大炮一聲下ノ關之權ノ浦に軍艦來襲之舩炮發頻ニ響き渡り海中ニ彈丸潮迄一面之火炎と相成又前田權ノ浦近邊人家山中等所々燃上り兩軍之彈丸空中ニ飛違震動凄敷人心も無之一途ニ擲手相働跡に漕戻し度と立働候得共沙惡敷漸流島に流レ寄見渡候處十七艘之異船入替り無透炮發彼是晚景ニおよび下ノ關細井に漕付候比炮聲漸相鎖異船ハ沖合に引取申候同六日早天方爭戰炮聲烈敷地方方打出し候彈丸異船に的當ハし候而も更ニ破壞彼より打出ボンヘンと申大砲ハ臺場之眞中ニ落此毒丸ニ防禦之人數難持支何重陸軍ニ勝負可決覺悟ニ而歟前田權ノ浦共守兵臺場を捨去候處を見請急ニ艦を進め候内一艘誤而礮砲に乘上ケ其外皆々岸に乘附臺場に亂入炮臺之車陣屋等燒拂直ニカト石と中山へ引籠候付同七日長州勢此所に押寄手詰之勝敗追ツ返ツ暫相戰異人五六十人討候味方甲冑之士十五六人討死終ニ惣敗軍ニ相成申候由此砌船頭由兵衛問屋岸屋兵衛方ニ而物語承候處前段權ノ浦ニ而敵味方入亂を専ら戰爭之由ニ付同家手下男由兵衛李次龜藏等五人連を具足得物を携細井山蔭



を傳ひ檀ノ浦後口山に登り松蔭ニ踞り伺ひ候處軍相果異人共ハ山上に屯之躰然處彈丸一發眼前を遮り是ニ驚キ皆々足早ニ逃歸り猶様子承候處ヒク島ノ大將萩野某古流之師家ニ而取沙汰宜一統頼母敷申居候處同八日ニ至り異船關沖に乗込彼ヒク島に及發炮候得共臺場物音無之上陸いたし相まらへ候處前七日前田檀ノ浦落去を見受守兵皆々逃去陣中空虛ニ付異人共是又陣營を燒捨前田を始デシ松等所々臺場之炮器を不殘奪取然ニ百斤以上之大礮之等閑ニ居込も難出來器如何いたし候哉夜分船中に取込申候山依之所々臺場ニ炮器一圓見受不申由又馬關警衛之惣勢凡千六百人と聞候へとも皆々退散此内一ノ宮近邊勝山と申所ニ長府侯之陣營に人數落行候處臺場炮器を捨空敷逃去歸り候段侯御憤り御自分馬上ニ而旌旗を建進伐被成候處異人共大將軍と見受候哉手を振相支候ニ付子細相尋候處諸國一統交易相整長州一ヶ國引受無之不得止軍船差向既兵器奪取候得とも戦争ハ人命生死ニ拘り不相好儀ニ付交易御承引不被成候哉との儀申出候處國主御納得ふらてハ返答不相成旨被仰出依之様子相待候趣ニ而海岸に十七艘共碇泊ニ付先戦争相止候付無差支通船相成候旨九日之夕ニ至り問屋ノ一々觸廻候故同十日四ツ時下之關出帆今十一日八ツ半比歸帆仕候得とも此節異人共馬關表を縱横ニ徘徊仕候段餘も無慙之次第ニ而中々難盡言語趣申出候此段聞取書を以御注進奉申上候以上

八月十一日

和田吉左衛門

八月六日日本藩用人木村男吏は長岡護美來十八日發途上京すべき旨を右筆頭に達す

〔元治元年五月二日以後慶應元年十二月迄 御記 録〕

一左之書付御用人木村男吏御供調よま被相渡

ツマニ 御 右 筆 頭

良之助様來ル十八日爰許御發途御内定豊後路御船中播磨路牧方路被成御通行管候事

元 治 元 年

八月六日

八月六日本藩備頭沼田勘解由を先鋒隊長に任す

〔小笠原美濃日録〕

八月六日

沼田、任先鋒隊長、

八月六日本藩京都留守居中山平左衛門は松平春嶽をして征長總督の命を拜せしめんとの會薩越三藩士周旋の模様を報告す

〔京都返達御用狀扣、長防御追討一件〕

先月廿七日夜半ニ會津依田源次罷越頼談之趣左之通

此節長州追討ニ付而者御總轄大藏大輔様御勤無之候而者一統奮發茂不仕候付昨日戸川絆三郎様越前に御出ニ茂相成申候弊藩より茂參居申候位之事ニ御坐候然處弊藩杯より頻りに御せり付申候而も御勤之程何程ニ御坐候哉と相考申候間何卒尊藩杯より茂爰許ニ而御周旋被下候儀者相叶申間敷哉之事

右之次第夫々御間ニ而御咄合之通翌晦日越前に罷越類役島津十太夫に逢申候而大藏大輔様御上京急ニ被爲在候哉之段先問合申候處御總轄御受ニ相成候哉否之處者分兼申候得共先兩三日内迄ニは御出立ニ相成候心得ニ而爰許ニ茂手配致し居候事ニ而御上京は相違無之との返答致候事

右之通ニ御坐候處寸斗御出京之御模様も無之候付猶手寄を以承繕申候處先月廿四日家老稻葉采女差添平瀬儀昨廿六日山形三郎兵衛差添堤五一郎薩藩より海江田武次大隅何某參り御勤申候由薩會之兩人には御逢無之由采女列より追々御勤申上候處大藏大輔様被仰ニ者第一短才不徳去年守護職被仰付候而茂不服位之事第二國力第三兵卒不足右之次第ニ而

何分御總轄之處難被成御請との思召之由右ニ付而者被爲出來候丈ケと申上候處強而御勤メ茂申上候由仍而岡崎邸ハ舉而御總轄被成御勤候事を祈居候付猶今一應押返御勤ニ歸國之管之由右之段中山には宜敷申吳候様青山小三郎より返答之事

但實者去年來茂一橋卿と寸斗御説喰合兼候由ニ而不怪御意之由ニ而何分御出京之御様子ニ無之候間稻葉列より此節ハ彌以一橋様も御追討之御はまりニ候間御懸念も被爲有間敷と強而御出京を。申上候由大藏大輔様ハ決而御出京無之御心中ニ茂不被爲在御模様ニ候得共御側之面々者御引留申たかり之由承り候事

八月六日

中山平左衛門

八月六日横井平四郎書を勝安房守に贈り長岡護美上京長谷川仁右衛門扨從の事を報じ且つ薩藩に關する所見をのぶ

〔勝海舟友帖〕

一書奉呈仕候殘暑之砌愈増御安泰ニ被成御座奉恐賀候取京師變動一旦相治り此末如何と想像仕候長ハ存之外手弱ク眞ニ兒戯とも可申一笑仕候御許航海此節好機會歟と奉存定而御乗り出し之御趣向可被在候薩大隅公も不遠上京且良之助も近日此地出發罷登り申候薩肥此節ハ一致可仕大ニ都合宜敷御座候此二藩主と成り御許航海之御助力も申上候様ニ御座候ハ八列藩も隨而參り候様ニ可相成薩人高崎猪太郎先日大早ニ而罷上候節拙宅ニ立寄申候間い才咄し合置申候將又拙藩長谷川仁右衛門と申者此節良之助供頭ニ而罷上申候此者拙藩ニ而之人才ニ而小拙格別懇信ニ候間是又い才申談置候乍憚左様御聞置可被下候

事情朝暮之變態ニ而今日之好キ歟明日ハ惡敷相成候間行先何ヤも計られ不申候へ共先今日ニ付先條之次第申上置候薩ハ決し而疑惑ハ無之是ハ小拙分明ニ見取申候間乍憚左様御聞置可被下候此段迄拜呈申上候餘ハ大略仕候頓首拜

元治元年

一六五

八月六日

安房守様

横井平四郎

尙々残暑甚敷御座可被成候豚兒共不相替下劣ニ而罷在可申萬々奉願候已上

八月七日幕府は征長總督並に副將の任命及び將軍進發等に關する令達を發す

〔文久四年慶應二年迄御同席觸寫並大目付様御廻狀寫〕

牧野備前守殿御渡候御書寫五通相達候間被得其意云々

八月七日

大目付

細川越中守殿

(外九名)

右留守居

大目付に

松平大膳大夫家來共兵器を以奉劫 朝廷不届至極ニ付速ニ御征伐被成候付而諸家に追討被仰付置候處此度總督之儀紀伊中納言殿に被仰付副將之儀者松平越前守に被仰付格別盡忠勤候様被仰出候 右之通被仰出候間爲心得萬石以上以下之面々に可被達候

八月

大目付に

松平大膳大夫家來共兵器を以奉劫 朝廷不届至極ニ付御征伐之儀諸家に被仰付候得共猶引繼御進發茂可被遊旨被仰出候依而者銘々彌忠勤を勵ミ御主意之趣相心得候様可致旨被仰出候此段向々に不洩様可被達候

八月

大目付に

松平大膳大夫家來共奉劫 朝廷不届至極ニ付速ニ御征伐被成候依而者今般萬石以上之面々に追討被仰付總督之儀者紀伊中納言殿副將之儀者松平越前守に被仰付追而出張可被在之候就而者御進發も可被可被遊旨被仰出候間御旗本之面々ニ者兼而致覺悟銘々限用意可罷在旨御沙汰ニ候間厚相心得可被申候 右之趣武役之面々且武役ニ無之候而も御陣立。ニ拘り候向々に可被相達候

八月

(他ノ二通ハ略之)

八月七日幕府紀伊茂承の征長總督を罷め尾張慶勝を以て之に代ふ

〔長防御追討一件〕

八月十三日

村上方 (江戸返達)

一去七日夜御用番代水野和泉守様方御呼出ニ付留守居代速水市之允參上仕候處長州御征伐ニ付總督紀伊中納言様被仰付候處思召之御旨茂被爲在尾張大納言様ニ被仰付候段御書付一通御用人を以被成御渡候付差上申候恐々謹言

細川越中守に

細川越中守

今度松平大膳大夫御征伐ニ付惣督之儀紀伊中納言殿被仰付候處 思召之御旨茂被爲在候付尾張前大納言殿に被仰付候間惣而最前相達候通相心得萬事前大納言殿御指揮ニ隨ひ可申旨被 仰出候

八月七日日本藩征長軍の部署を定む

元治元年

〔文久四年日記、御國江戸往來狀扣、小倉一件〕

堀丹右衛門に相渡書付寫

覺

此節討手被蒙 仰候付御手配之儀兼而之御手常組先可被差出候溝口藏人儀之組共出京被 仰付候付次點御手常組沼田勘解由組共御差圖次第被差出候管之處小倉援兵之儀被蒙 仰候付直ニ同所迄出張被 仰付候事ニ候右貳番手之儀之有吉將監組共ニ模様次第引續キ出立之筈ニ候松野亘組共溝口藏人組共其内罷下候ハ、御先手ニ可被 召仕其方組共長岡監物組共 御留守被 仰付旨尤變化ニ應し臨時之御下知之可爲別段旨被 仰出候條被奉得其意御同役ニ可有通達候以上

八月七日

八月七日日本藩政府は征長の令發せられたるにつき藩中舉つて戰國の心得を以て警戒を加ふべき旨を達す

〔御書附并御觸達等之扣〕

覺

長防討手之儀別紙之通被爲蒙 仰候付專共御覺悟有之事ニ候一己々々用意之儀者彌以此間申達候通無油斷心懸御國末々ニ至迄萬事戰國之心得ニ罷在候様可申聞旨被仰出候條奉得其意支配方に茂早々可被相觸候以上（別紙は七月廿三日の條に出つ）

八月七日

八月七日毛利慶親長兵の京師を擾りしは自己の心情にあらざる旨の執達方を藝藩に倚頼す

〔元治元年 尊攘錄自筆狀〕

松平大膳大夫書面を以奉申上度趣ニ候先般同人家來共輩下ニおゐて不容易所業有之深ク奉恐入候謹懼罷在候ニ付右書付拙者ヲ致執達吳候様吉川監物を以頼越候處此儀ニ不限惣而此類御取扱向茂可有御座候付御役人衆領内迄御下り御請引ニ相成候様いゝし度尤此度之儀之指懸候趣ニ付拙者より致執達候而不苦候哉此段御差圖可被下候以上

八月十日

松平安藝守

御差圖

書面執達之儀之不苦候間所司代に可被差出候併右等之儀ニ付而之別段御役人方之不被差遣候間向後此儀ニ不限惣而此類之儀ニ付臨機之取計之格別難差定儀ニ付其節相伺候様可被致候

松平大膳大夫様御使者木梨彦右衛門去ル七日廣島表に參着役方之者に應對別紙書取御頼談之趣厚申聞候ニ付不取敢別紙之通及返答置候ニ付此段御届申上置候様安藝守申付越候此段御届申上候以上

八月十五日

松平安藝守家來

萱野肇

此度脱走之家來共多人數京都罷登所々屯集歎訴之趣相聞候付爲眞請國司信濃差登候處折柄福原越後出府懸右之次第承之暫伏見相滞尙又別用向有之益田右衛門介事茂罷登候付申合鎮撫方可仕之處豈計脱走之者共ニ被誘拙者父子趣意取違終ニ同心私ニ書付相認朝廷に差出加之輩轂之下をも不憚及爭戰候段何共恐怖之仕合不堪畏縮之余り彼等不心得故ニ而父子不任心底と乍申斯ク大不敬之至り苦衷此事ニ御座候右三人之もの共國許立歸候ハ、連ニ其罪屹度申付父子之罪を奉謝候覺悟ニ御座候得共其内可然御取扱偏ニ致御依頼候此上御存付茂御座候ハ、無御腹藏御懇諭被成下度所希候以上

松平大膳大夫

直書

此度脱走之御家來京師に罷登候付而ハ爲眞請國司信濃御差登福原越後益田右衛門介茂罷登候折柄ニ付申合鎮撫方可仕

元治元年

一六九

候處御趣意取違聲殺之下をも不憚及爭戰候始末驚入候萬民舉而奉恐入候程之事件貴様御父子御恐懼御苦衷之旨ハ別而之御儀ニ察入候依而之三人もの共其罪御申付御陳謝可被成との御儀彼是御配慮御尤ニ存候既ニ尊藩之儀ニ付而之被仰出候趣茂有之蛇度御誠實相顯候程之御處置無之候付而之御逆鱗御氷解ニハ被爲到間敷武門之習諸藩とても此度之儀付而ハ不得止之次第ニ至り可申敷と心痛之事ニ候御依頼との儀之深ク恥入候拙者等之力ニ及ひ候事ニハ無之候得共御申越之趣ハ申出置候心得ニ御座候其他心得茂無之任御懇諭無伏藏此段及御答候以上

松平安藝守答書

八月七日日本藩京都留守居中山平左衛門は交代の我藩兵歸國につき幕船借用の交渉、松平春嶽の征長總督就任の辭退及び九州方面へ監軍西下の件等に關する幕府監察永井主水正の談話要領を報告す

〔京都返達御用狀扣、長防御追討一件〕

一去ル四日永井様ニ罷出候處下阪ニ付猶昨六日罷出候而伺之次第左之通
一當時兵庫に御繫之公邊蒸氣船被爲叶候儀ニ御坐候へハ郷土着いたし候ハ、小倉之一條も御坐候間一日茂早ク備手之人數ハ引替り國元へ下し申度常之船ハ風筋惡敷御座候へハ十日茂かかり申候故何卒御聲懸を以拜借は被爲叶間敷哉之段申上候處右之儀ハ兵庫に手を附候哉と被仰聞候付右様之儀無之不圖奉願候段申上候處左候へハ爰許ニ而願ニハおよひ申間敷勝に紙面遣可申候間是を以咄合候様ニとの趣ニ而御紙而被下候事
一犬藏大輔様御總轄御斷之由ニ付而ハ猶御勸メニ茂被爲在候哉奉伺候處關東より猶被仰付茂御坐候へハ御勤之御内心之由ニ茂御座候へ共左様ニ候へハ必多物延々ニ相成此場合ニ相成候而ハ一日茂早ク御追討無之而は難相成仍而一兩日内ニハ外ニ御總轄ハ被仰付候筈御咄ニ付餘程右之御名前を伺度奉存候間彼是申上候得共兩三日之内ニハ相分り申候と之

御事ニ而御咄無之候事

一九州之方ハ監軍様御下りニ相成候哉と伺申候處其等之儀阿部様ニ申上落候間致下阪候一己之存念ニ而ハ參兼候間關東に伺置候に付何れニ是ハ關東より下り可申との御答候事

八月七日

中山平左衛門

八月七日筑藩世子黒田慶賢使者を熊本に遣し書を長岡護久及び同護美に致して時勢に關する協商懇交を索めしむ

〔神庫文書 三百卅四印〕

一翰謹啓仕候秋暑兎角ニ去兼候處先以御揃愈御清安可被成御起居大幸之至奉存候扱京師御一別後ハ實以意外之御無音重々恐懼之仕合奉存候滯京中ハ誠ニ不淺御懇篤被成下何敷と御教諭被下千萬忝奉多謝候將又京地表も追々傳承仕候得ハ殊之外之變動長州暴發之旨右ニ付而ハ御互ニ追討之蒙 朝命候段武門之冥加不過之實ニ奉感戴次第ニ御坐候就而ハ此先現業之處ニ至候而ハ尤何廉御打合不仕候而ハ相濟不申儀ニ付委細弊藩ニ於て愚案之旨趣等相合家僕待并次郎兵衛と申者差出候事ニ御座候同人ハ京地ニ而も御家臣衆と追々入魂ニハハし萬機之事共話台等も仕候者之儀ニ付何卒京地之如く懇切ニ談合候様重疊被仰合被下候様奉頼候猶又右之通り切迫なる時勢之上ニ追討をも被仰出候事ニ候得ハ此際愈以京師表之通吳々御親睦萬端無御伏臘様仕度御坐候右之段同苗方可申上之處僕儀京地ニ而も 兩君と御懇意罷成居候事故前條之云々從僕申上候様申付候事ニ御坐候尙又右之段之越中守様にも重疊宜敷御傳聲所希ニ御坐候現又當節御訊問申上度何る呈進仕度存候得共存付候品無御坐弊國凡庸之鹿品乍輕微呈樹下候御一咲被下候得ハ本懐不少奉存候先者石申上度時季之御動靜も承知仕度旁如茲御座候他者期後鴻候恐々頓首

八月七日

松平下野守

元治元年

一七一

長岡澄之助様
長岡良之助様

尙以時下折角御加養專一ニ奉懇祈候取京師へ召連候山城初何をも御起居相何度段野拙迄申出候本文之趣ハ吳々御承知之様奉頓候不具

八月七日伊達宗城使者井關齋右衛門を熊本に遣し征長に際し我藩領豊後佐賀關附近に於て必要に應じ人夫米穀の貸與を諾せられんことを求む

〔文久三年八月以來
一橋初來使一件〕

伊達伊豫守様

御使者

井關齋右衛門

右者昨夕參着長谷川仁右衛門に應對申入候付同人應對仕候處良之助様は之御自翰持參差出大守様は者時候御見舞被仰進候由扱又時體之儀且御頼談筋被仰進候由右ハ御奉行に仁右衛門より申入置候段噂仕候
防長御征討ニ付御船之都合惡候間御領分佐賀關に御渡海ニ相成豊前中津迄御越先御陣を被据管之由仍豊後御領分御道御借用扱又兵糧等ハ前以付送り有之筈之由尤人夫ハ御差越ニ相成候得とも病人等出来不足之節ハ助夫之儀御頼又兵糧不足之節ハ當坐御振替被下候様御頼談右御返辨方之儀ハ追而現米ニ而御返辨ニ相成候とも代金ニ而御返辨ニ相成候とも夫等御都合次第可被成御心得旨申候由
一此方様相濟薩州に御使者として罷越候旨に付委細御返答ハ歸路ニ何度旨申候由然ルニ長州表異船戰爭之儀初而致承知御在所に注進彼是薩州へ相越候儀ハ未決之趣ニ御坐候由

右之通仁右衛門噂聞取申候へ共口上聞取相違之儀も可有御坐敷と奉存候事

八月八日

〔全書〕

伊達伊豫守様御使者薩州にハ不相越直ニ差急罷歸度段長谷川仁右衛門迄申出候付良之助様は申上御返書今日引渡候付太守様は時候御見舞被仰進候御返答茂仁右衛門より宜申述候様達仕候事

八月九日

河口權兵衛

八月八日本藩留守居中山左次右衛門同中山平左衛門は征長總督として一橋慶喜推薦の噂あることを報告す

〔京都返達御用狀扣、長防禦追討一件〕

今朝會津ニ罷越小森久太郎ニ逢惣轄様はいまた御究り無之哉之段問合申候處御内輪ハ一橋様は十二九ツ迄ハ御極之筈之由右付而は一橋卿も段々御心配之稜も御座候由右ハ何事も御手一はいニ被成候様ニ關東より之嫌疑も可有之儀ニ御心痛之由右等之儀ハ乍憚久太郎共も御證據ニ立御受合可申段申上置候仍而先御受ニ相成候御模様之由付而は内密關白様に茂罷出 朝廷より被仰出有之候様ニ久太郎共より申上候處御同意被成候由之事

之由

但本文の次第ニ而五日之内ニハ被蒙仰可御坐候へハ直ニ列國兵揃之期限一橋公之御押出之日限も可被仰出手續
一水戸より參居候御人數何事も一橋卿を擁申候間頃日の一舉も一旦御因循ニ相成候程之事ニ而此節も如何障エ申候事イも難量因而久太郎共より段々申上候付已ニ右御人數ハ昨日一橋卿御人數文の處ハ關東之様ニ歸り申候へ共未タ余一橋様御附之人數引拂候儀御手付兼居候由候事

元治元年

但御双方之御人數共ニ不怪歸り候事嫌ひ申候由

八月八日

中山平左衛門

右一通

今朝道家角左衛門同道永井主水正様に罷出九郎右衛門出京且御備被差登候處長州御追討被仰出候付從海上追而被差返候始末等委敷御咄申上坂平左衛門より奉伺置候大藏大輔様惣轄御斷之御跡者未々不被決哉奉伺候處五六日内ニは相分り可申との御返答ニ付御内輪は最早被決居候哉尙奉伺候處未々機密に御坐候得共内實ハ一橋など御出馬ニ相決居中候然處一橋様御懸念之次第ハ兼而御嫌疑被爲在候御自身ニ付此節御出馬ニ相成候而ハ彌以其邊何程ニ可有之哉との思召ニ付夫茂御尤之儀ニ御坐候へ共今日の事體ニ相成夫等之項々たる事ニ御懸念ハ入申間敷と申上候處左候へハ關東より右之命下り候ハ御出馬ハ少し及御辭退不被爲在との事ニ付此間阿部閣老御歸府之節大阪迄御追懸ニ而其邊御咄合ニ相成居候間いつれ五六日内ニハ江戸より右之命下り可申との御見込之段御咄ニ相成申候然處御人數御武器等茂御不たらひニ付夫等茂至急ニ江戸より御差登ニ相成一日茂速ニ御出馬ニ相成候様ニと御心配ニ相成居申候よし御軍配ハいつれ一兩日内迄ニは御達ニ相成可申との御咄ニ御坐候

一公方様御上洛之儀ハ如何御見込被成候哉奉伺候處阿部閣老京地之模様御一覽ニ相成候而ハ彌以至急ニ御上洛不被爲在候而ハ相成不申候へ共御上洛之御名義ニ而は御差障御坐候間御出馬と申候ハ却而すらりと出來可申御見込ニ付左候へハ尙更宜敷御坐候間一刻茂其都合ニ相成候様御咄合ニ而御歸府ニ相成候よし其上關東に而も専ら其說茂御座候由ニ付定而不日ニ御出馬ニ相成可申御見込被成候段御咄ニ相成申候以上

八月八日

中山左次右衛門

八月八日日本藩は小倉應援を命ぜられたるを以て召喚の老臣及び上京の途にある藩兵を歸國せしむべき旨を所司代に申告す

〔京都返達御用狀扣〕

〔京都所司代へ〕

越中守家老平野九郎右衛門並備頭等國許より差登候處防長御追討ニ付小倉援兵等茂被仰付候付引取候共滯京仕候共勝手次第之旨先月廿九日御達ニ相成居右九郎右衛門儀者昨七日到着仕候處差寄之用向相濟候ハ無程引取可申尤備頭等者大阪より直ニ差戻申候事御坐候此段申上候以上

細川越中守内

八月八日

中山平左衛門

八月八日長藩高杉晋作等をして外人と和を講ぜしむ
〔防長回天史〕

同日(日)世子軍を船木に進む時に馬關の兵既に退きて一ノ宮に在り此に於て和議の論復た起る遂に高杉を以て假に穴戸備前の養子と爲し穴戸刑馬と稱せしめ之れを講和使と爲し曩きに井上に與ふる所の書翰(昨年來朝命を奉じ幕令に隨ひ豈國徒幕府暴發の名を受け却て朝命に違却するの姿と相成居候折柄先般家來兩人御便を以告諭之趣も有之候付尙又朝旨窺定度長門守及發程ニ候處未到着中京和變動差起中途にして罷歸其意を不得果讀憾之事に候此上は下ノ關進航差障無之様可致候委細此者より可申述候以上(元治元年八月)を齋らさしめ杉徳輔渡邊内藏太を以て副使となし井上聞多伊藤俊輔を以て譯官と爲し與に馬關に赴かしむ(中略)

八日穴戸刑馬等の一行馬關に到り英提督に就て和議の意を陳す艦隊白旗を掲げて休戦を表す
穴戸刑馬は執政として陣羽織にして小具足なり

當時の應接記あり左の如し云々

長使云 奴今日拙者共罷越候儀餘之儀にあらず貴國軍艦來着之由ニ付篤と談判に及ぶ積の處時刻後れ終に一昨日合戦

元治元年

に及ぶ處吾國力不及何卒和議頼入たし則ち主人より書面も持参いたせり一覽下され度候

外國人云 書面之趣にては唯下ノ關通船差障無之様可致との事計りにて和議の事は無之此儀は如何哉

長使云 下ノ關通船差障無之様いたし候へば則ち和議の印には無之哉

外國人云 それは議論と申もの實以和親いたし度御存念に御座候は、禮を厚く辭を和らげて御頼に相成候こそ當然の

事と存候且此書翰防長國主と認め有之候間御主人御直書にて其名を認め候證書御持参可被成候其上にて免も角も御

返答可申候尤臺場へ備へあり候炮は不殘船にて取歸り候積りに候間此段御承知可被成候一昨日流れ潮の節相流れ候

和蘭陀小者一人乗居候小船一艘下ノ關内裏沖へ参り右小者一人にて相働き候へども何分急流ゆへ船止り兼難儀いた

し居候處下ノ關臺場より小銃數發其後其船人共に奪ひ取候處定て右小者とりこと相成居可申和議被成度候は、先此

者御返し可被成候

長使云 條々尤に存候主人直書は明後日書迄に持参可致候大砲取歸る事は御勝手次第決して手向ひ致し不申候和蘭人

の事は只今迄一向様子承知不致早速吟味の上明後日一所に返答可致候

右談判にて罷歸候

(中略) 九日井上留りて長府附近に在り外人を導て諸砲臺の炮を收む

〔尊攘録對州エ魯夷亂妨薩長夷船砲戰附生麥伏水一件〕

一筆啓上仕候然ハ今日英國人通辭に於梶ヶ鼻面會仕貴様者何々之人ニ候哉と相尋申候處下拙儀者播州姫路之出生是迄ハ

蘭學修行致し申候依之英國船に乘込五ニ言語を致交易候師匠并下拙之名前者何分難申上乍去決而防長二州之ものニ而

無御坐無間遣播州姫路之出生ニ而候段申出候

一開港之外ハ異人上陸不相成候儀と公義之御法ニ候儀者貴様も御承知之事故直様船に乘歸可申様異國人に申聞吳候様申

述候處御尤之儀ニ候未タ迎之船参り不申候間暫時御有免可被下下拙異國人に見ケ、いたし申候付決而不法之儀者爲致
中間敷迎船参候ハ、早速爲引取可申候

一長州カ合戦之儀ハ如何哉今朝カ發炮無之者何分哉若和陸ニ共相成候哉ト相尋申候處折角其事ニ候昨八日長州カ英國に
参り居五ヶ年滯留いたし居候伊藤春助松島剛藏ト申者同船ニ而完戸備前養子行馬ト申人英船に乘込致談判候趣ニ者昨
年來 天朝之勅命幕府之台命を奉シ專攘夷を事ト致候處豈圖ン哉今ニ至而ハ毛利一國之罪ト成申候依之息子長門守京
師に差登シ此儀如何哉ト 京師に相伺可申存候處 京師に者最早騒動差起り途中カ空取引取申候間甚以殘念之至ニ候
依之此以後ハ長州前異國船致通行申候而も決而一發も發炮いたし中間敷旨申述候付英國人申候ニ者右様之趣ニ候へ
ハ定而 天朝カ之御繪旨も可有御坐様相尋候處成程 御繪旨有之候山口ニ罷歸持参可申候間十日迄何卒可被相待様申
述候英國人申候ニ者此度彌無間違候ハ、攘夷之罪者 天朝ニ定り候若 御繪旨相違無之候ハ、其罪 天朝ニ正し可申
趣ニ候

一通辭申述候ニ者英國人一統 御繪旨ト申者多くハ偽物ニ而可有御坐由評定之由ニ候

一佛國之通辭谷間敬藏亞米利加通辭松田喜三郎ト申者定而知音ニ候哉ト相尋申候處其人ハ知不申由ニ候右之趣人拂ニ而
承り申候此段御届申上候右爲可得貴意如斯御坐候恐惶謹言

八月九日

鎌田 六 左衛門

杉 生 募 様

追而申入候

一昨九日門司浦梶ヶ鼻ト申所に英船カ致上陸候付早速同所在審録田六左衛門亞州通詞被致應接候趣別紙之通申越候之段
申出候間其儘寫差廻候御奉行所に御届之儀早々宜被取計候以上

八月十日

小 笠 原 出 雲

元 治 元 年

一七七

小笠原内匠
小宮民部

平林勘助殿

〔全書〕

森井惣四郎列開取書

一筆奉拜呈候然者先般御探索之償金一條ニ付左件之噂御坐候右金子當月十三日迄五十万トルラル御渡ニ相成外國奉行支配定役元縮某が英國書記役ユースデンに右高之受取書可相渡旨申候處同人答ニ受取書之儀ハ差上兼候依之外國方大ニ迷惑之弊ニて是非受取書可相渡左なくハ此方歸府出來兼候趣申聞且又素外國奉行之命ニ而金子渡し候切ニハ受取書可持歸との儀ニ付此受取なしニハ不都合之段申聞候處ユースデン曰足下いまた處をも不知此償金ハ日本政府之御頼ニて受取候間是非受取書御入用ニ候ハ、外國奉行歟又ハ閣老方之内御出張可然其上如何様共取計可申此トルラルハ素長州より可受取金子也長州政府之令を奉せず外國船を亂ニ打放候間政府ニ而早く長を調し給ふべき筈之處其儀遲滞ニ付同盟各長に軍兵を向け及戰事候處長防降レリ依之長防ハ各國之領分同様ニ自由なるべし然處長州士官罷越及應接候ニハ長防ニケ國ハ其方に相渡候而も宜敷候へ共今更各國ニ被納候而も人民不服候間先此方ニ而相納其代として二百万トルラル相渡候上此港を開可申との事ニ付各國も承諾いたし候
百万トルラル之儀者政府可受取償金也右長州亂ニ外國船を打放候節早々政府ニて所置可有之處遲々付其償金也都而三百万トルラル也其後長州 京師に亂入ニ付朝敵之名を得たり依之御進發之御引合御座候間各國申立候ニハ長ハ各國領分同様長を御征伐御座候之各國を討ニひとしと申立候付不得止政府ニて長ニ代り二百万トルラル御拂之應接極り依之三百万トルラルを三十ヶ月ニ御渡之積五ヶ月ニ五十万トルラル充也
右之趣意ニ付此償金ハ日本大事件之一條ニ而今五十万トルラル御渡ニ相成候共受取書差上兼候と右ユースデン申聞候

右七月十三日之説ニ御座候

右者公邊御家人木村道之助久留米藩永田恭平に申越候文通寫右木村道之助と申ハ英人に和語を傳へ候役人ニ而應接之時分ハ毎モ同席いたし居候人之由

八月十四日

森井惣四郎
益田勇八

八月九日我藩學教官等外夷を制せずして長州を征するの非義を國老小笠原美濃に訴ふ

〔小笠原美濃日録〕

八月九日

助教二人來、夷討長、不制之、而討長者、非道、故問官議也、予答之、以伺長崎鎮臺之旨、

八月十日幕府長人坐乗の船舶追捕に關する令を發す

〔御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

牧野備前守殿御渡候御書付寫一通相達候間被得其意云々

八月十日

大目付

上杉彈正大弼殿
松平大和守殿

右留守居

大目付に

元治元年

松平大膳大夫家來共迫禁國發炮狼藉ニ及候條不届之至付御征伐被遊候付而之長藩人銘々之領分知行内ニ潜伏之者可遂探索旨兼而相達置候へ共海岸屬島等に同家々來乗組且同藩荷物等積込候船ニ茂有之候ハ、見掛次第無二念速ニ打留可申候萬一寛宥之處置致置候面々者急度御沙汰之品も可有之候條心得違無之様可致候
右之趣萬石以上以下海岸ニ領分知行有之面々ニ不洩様可被相達候

八月

八月十日藩主慶順使を長崎奉行に遣し外艦馬關に迫るに當りて征長の兵を進むるは國家の威信に關するを以て速に外人を退去せしむる方策を講ずべしとの意見書を提出す

〔御在國日記〕

八月九日

一御奉行所方左之通

高田章之助儀長崎御奉行様に御使者被 仰付往來早打ニ而被差越候間動方之儀之御書方承合候様及違候條此段御右筆頭に可被相知候以上

八月九日

御書方

御用人 衆 中

右之趣御右筆頭に及達候事

〔機密間日記、文久四年日記〕

今度英佛墨蘭之軍艦數艘長州に致襲來去五日六日烈敷炮撃いたし竟上陸接戰必勝之勢と相聞申候長人 犖下之狼藉軍

謀發覺付而御追討被仰出候折柄ニ者候得共外夷如右侵來約り爲渠等被毒逐候様ニ茂成行候ハ、神州之御武威相立不申御恥辱海内ニ致流布候者必定ニ而悲歎之次第御坐候依之各國之軍艦一刻茂速ニ引拂候様御談判有之致退帆候ハ、御追討至急ニ御促有之度奉存候拙者儀茂討手被仰付小倉表應援も被仰付置候間何時出軍茂差支無御坐候若又異船及遅々候ハ、御國內不測之變亂差發如何成患害と相成候半茂難量實々致懸念大切之時節と致熟考候間不殘心底此段早々及御内意申候以上（本文に對する答書は八月十二日の條下にあり）

八月十日

細川 越中 守

右者長崎御奉行様に御差出ニ相成候御書付也

一長崎御奉行服部長門守様に御使者御使番高田章之助被差越候事

八月十日日本藩備頭沼田勘解由小倉應援として出陣を命ぜらる

〔小倉一件〕

口達

沼田 勘解由

近來之事體付而小倉應援被爲蒙仰候付其方組共至急ニ被指出旨被仰出候條奉得其意組中に茂早々可被申渡候尤京都詰之面々之下着次第追々可被差越候以上

八月十日

大筒手並兼而御手當附屬之御役々茂被差出候事

心得之書付

沼田 勘解由 山へ

覺

元治元年

一昨年長州暴發已來小倉より追々御應援之儀御頼談有之候へ共朝廷幕府之御慮置茂相決不申内御人數を被動候儀者難相成御差扣ニ相成居候處今度長防御追討々手被爲蒙仰引續小倉應援之御沙汰茂有之候付旁其方組共小倉迄被差出置候事ニ候追而之御差圖次第御出馬茂可被爲在然上者萬事御下知之通相心得候儀勿論ニ候處其内長州より小倉襲來茂難計左様之節之右御追討之手始とも可申哉ニ付猶更御恥辱ニ不相成様非常之忠勤有之度思召候此段之組中且御備ニ屬し候面々ニ茂精々可被示置候

但公邊より追々御沙汰之趣等別紙書付三通爲心得相渡候(本文別紙三通とあるは蓋し七月二十八日、八月五日、八月七日幕連の三通ならんと思へど小倉一件には添付なし)

一途中並滯留中共士風堅固ニ相守末々ニ至迄深謹慎を加聊茂所柄之迷惑ニ不相成様萬端ニ心を用可申旨屹ト可被示置候
一大膳大夫様御逢其外諸方より使節等之出入茂可有之左様之節者申迄も無之武門之御瑕瑾ニ不相成様心懸可有應接候
一一軍之主宰を被任置候付何事茂其心得ニ而組中之抑揚等手限之沙汰茂可有之公平之處置尤専用ニ被思召上候
一役懸之外他所應對文通等堅可爲無用候

右之外軍旅之筋之兼而被仰付置候通可被相心得旨被仰出候事

八月十日

〔文久二年より
京都江戸狀扣〕
以別紙申達候

沼田勘解由
組共

右者近來之事體付而小倉應援被爲蒙仰候付至急被差出旨尤同人組之内京都詰之面々之下着次第追々可被差越段去ル十日及達候

一大筒手并片山多門初兼而御手當附屬之御役々茂沼田勘解由手ニ差添至急ニ小倉に被差越旨同十一日及達候

右者思召之旨被爲在沼田勘解由一同小倉に被差越旨被仰出御出馬之上之御本陣ニ被召仕旨
田中八郎兵衛

大島久平
門弟共

右之今度小倉就應援螺旋炮二挺解忽炮六挺被差越候付右打方受持被仰付片山多門一同急連ニ被差立旨
右之通同十二日及達候

右吉將監

右者小倉應援ニ付沼田勘解由組共被差出候處爲奇兵被差越候間萬事勘解由に承合任差圖可申旨被仰出候將監出張之上之同人手ニ屬候管之段同十三日及達候

惣連名

八月二十四日
京都 圖書殿
江戸 長岡衛門殿

八月十日長藩外人と談判を繼續す

〔防長回天史〕

翌十日は外人に再會を約せるの日より舟木本陣に於ては高杉伊藤の故を以て違約すべからず因て更に毛利登人をして

元治元年

假りに老臣毛利出雲と稱せしめ以て講和使と爲し山田字右衛門を以て副使と爲し波多野金吾渡邊内藏太磯谷謙藏原田
隼二磯谷原田は清井上聞多譯を随へて外艦に赴かしむ毛利等公の親書を致し且つ十四日を期し公の親臨を約して歸る
末藩士なり

〔全書〕

(當時應接ノ概略)

長人云 以後西洋諸國と懇親相結び追々西洋之諸藝術蒸氣器械之事並航海術軍法等に至る迄其流儀を授り度此段願入
申候

外國人云 拙者共自國々々の高官に候得ば何卒大膳大夫殿へ對面致し其上にて直談を以萬事決定いたし申べく今日は
唯こちらより申入候迄にて太守對面之上に決定承知いたし親友と被成度候依ては今日貴公方御歸り被成御主人御出
張之儀御取計ひ有之度候

長州人云 委細承知いたし今日直に其旨城中へ申遣し來十四日日本九ツ時即西洋十二時迄に下ノ關迄出張いたし候様
取計可申間夫迄御猶豫願入申候

外國人云 太守對面之上は西洋一般の風俗人情等篤と御諭し可申是誠に日本皇國之爲めと存候

長州人云 何分頼み入候

外國人云 今日より下ノ關通航之西洋船少しも差障無之哉

長州人云 勿論何事も無之候

外國人云 以來西洋船通航之節は石炭薪水並食物等拂底に相成候得ば懇に取扱被吳候哉

長州人云 其儀は中に不及時に依り當所は風波しげき所に候得ば通航之節若し左様之事も有之候はゞ下ノ關へ上陸被
成候て不苦候

外國人云 然る上は下ノ關町人とも早々立歸り銘々の商賣相始め尙外國人買物等有之候得ば相當之直段にて買求め可

申間此段人民へ相諭し被申度候

長州人云 委細承知いたし候得共此間中より町人百姓不殘立退き未だ夫々住居も難相分仕合推察被下度候、、

外國人云 此後大君に各國ミニストルと諸事決定之談判相濟迄は下ノ關へ臺場相築候儀被致間敷總て外國の法式は戰
争後償金を出し候事常習ふり此度の戦争元より貴國無謀之炮發被致候儀に付差起り候事ふれば下ノ關市中不殘燒拂
ひ候筈之處先左様は不致貴國に於て莫大之事ふるべき處相見合候得ば其損亡之代丈けの償金は被差出候て可然尤金
高は太守對面之上決定可致候

長州人云 委細承知いたし候

外國人云 一昨日申入候和蘭陀人吟味被成候哉

長州人云 小銃の劍四つ其餘少し器械取集め則今日持參いたし候小船は未だ尋得不申候

外國人云 船は今朝田ノ浦臺場下へ繋置き候を見付候に付取歸申候人は如何哉

長州人云 右小船妨いたし候當人行衛未だ相知れ不申候に付和蘭人も未だ相分り不申いつれ兩三日中に有無返答に可
及候

外國人云 今日談判は唯長州と外國との關係にて日本皇國へ係り候事には無之外國人は以來長と親友之交りを結度
候

〔探索書〕

〔文久二年三月以來〕

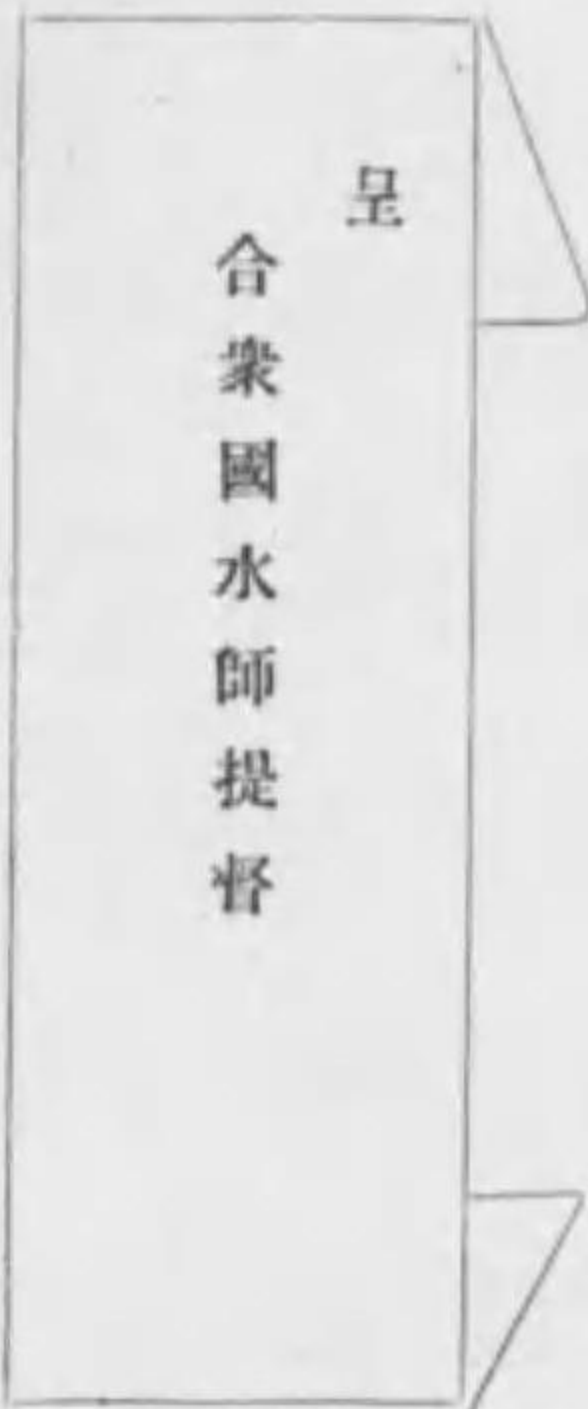
長州より差出候由ニ而アメリカ艦横濱に到着之上公主に差出候書翰之趣

昨年來奉朝命幕令於下關異艦炮擊之處豈圖哉暴發之名を蒙り違背朝命スル姿ニ相成候折柄家來越後を以懇請之儀有之
ニ付朝旨伺定度長門守及發駕候之處未着中京師變動差起不得止途中歸國不得其意果過る三日貴國軍艦姫島に來着之由

ニ付下關通航差障無之旨可及應接と家臣兩人書翰持參爲致候處御出帆後ニ付猶又於下關可及應接之處時刻相移り戰爭ニ相成遺憾之至ニ御座候某よりは宿怨は無之數萬之國民を苦しめ候儀不本意ニ付和議を冀候外無他事候此儀を御酌量被下度猶家老毛利出雲其外より可申述候以上

元治元年八月九日

松平大膳大夫花押



〔安津免久佐〕

(右書翰ノ奥書ニ)

右佛蘭斯注進船八月十一日長崎着佛通詞江川熊三郎佛船ヲ取出候事

八月十一日日本藩使番志水又七を征長の勅諭奉承の使者として京都に遣す

〔機密間日記〕

文久四年

其方儀竹田に御使者として被差越旨被仰付置候處被遊御免先月廿四日稻葉美濃守様より御書付御渡付而御請之御使者被仰付京都に海陸中之急ニ而明後十一日此許被差立候條可被得其意候尤添狀可相渡候間明日書之内御花畑に可被罷出候以上

八月九日

猶々勤方之儀者御書方可被承合候以上

御使番

遠使之稜

志水又七殿

奉行所

〔長防御追討一件〕

(京都への使者志水又七)

松平大膳大夫儀兼而被禁入京候處不容易意趣を含まラ兵端を開奉對 禁闕發炮候條其罪不輕加之父子黒印之軍令條投國司信濃由全軍謀顯然ニ付旁防長ニ押寄速ニ追討可有之旨從 御所被 仰出候付御追討有之候間私儀速ニ軍勢國許に相捕置御差圖相待可申尤從彼妄動致し候ハ、不待御差圖擊入誅滅可致旨先月廿四日家來之者被招呼御渡ニ相成候御書付之趣奉得其意候依之御請使者差立申上候

八月十一日

細川越中守

八月十二日長崎奉行服部長門守は馬關襲來の外國軍艦を退去せしめんことを勸告したる我藩主慶順の書に答ふ

〔機密間日記、文久四年日記〕

右之(八月十日藩主慶順より長崎)御答と相見高田章之助歸着の上差出候書付左之通

今度英佛米蘭之軍艦數艘長州に襲來致戰爭候儀ニ就被仰越候趣御尤之次第委曲承知仕候然處於下之關及戰爭候佛軍艦今十二日當港に相回り右船將御役所を罷出候ニ付及對話候處當月五日より九日迄及戰闘同十日長州方より和談之使者

元治元年

一八七

相越海岸大炮不殘外國に相渡候間以來戰爭無之様致度趣之談し有之候に付右之談判相濟候得者各國之船者兵庫港に相廻り大阪にも赴キ其筋に及御談判候旨申立候右談判と申立候者何等之事ニ候哉不相分候へ共定而兵庫御開港之願立ニも可有哉兎も角茂不容易事件と奉存候ニ付大村丹後守に出崎之儀申遣候間相越次第留守中相託置私儀差急キ登阪或者上京之上其子細且一體之事情可申達心得ニ御座候將又下關軍艦引拂ハ江府より各國長官に御談書長官より海軍總督に達不申候半而者迎も引拂不申儀ニ付私取計候儀ニ者到兼申候間左様御承知可被下候此段御答仕候猶登阪之上御心得ニも相成候儀ハ追々申進候様可仕候

八月十二日

服部 長門 守

八月十二日日本藩有吉將監に部下一隊の小倉出向を命じ其指揮を沼田勘解由に兼掌せしむる旨を達す

〔小倉一件〕

將 監 殿

今度小倉應援ニ付沼田勘解由儀組共被差出候處猶貴殿御組之内片手爲奇兵被差越候間萬事勘解由に承合任差圖候様被仰付旨及達被仰付候條此段可被有御達候尤貴殿御出張之上者御手ニ屬候儀者勿論之事ニ候事

八月十二日

〔全書〕

今度小倉就應援其方組共被差出候處猶有吉將監組之内片手爲奇兵被差出候間萬事其方に承合任差圖候様被仰付旨及達候條左様可被相心得候以上

八月十二日

向々右之奇兵者將監儀出張之上者同人手ニ附屬之管候以上

奉行 所

沼田 勘解由 殿

八月十二日順正、西光の兩寺より國中配下法中一統の意趣を探り國恩報謝の爲めに寸志献納の事を本藩政府に申請す

〔炮器寸志一件〕

口上之覺

今度京都大變ニ付御上ニ茂不一方被爲遊御苦慮候折柄一統下々ニ迄奉恐察候就而之拙寺共初御府中配下法中之面々如何相心得可申哉打寄咄合唯々奉恐入候計ニ御座候遠近在法中居住僧之面々ニ迄定而同様之儀ニ可奉存候依之奉報御國恩候程之儀ニ之無御座候へ共聯計寸志献上仕度奉存候當時町在共ニ御手當等をも被仰付置候折柄ニ候へ之前文之事ニ付而門徒中に奉加鉢之所存決而無御座市在一統之法中ニ茂其段ハ嚴重ニ可申論尤兼而質素を守非常之節ハ如何様之御用途ニ茂可相成乍聊貯罷在候もの茂有之病災之物入等ニ而ハ其儀無之寺々ハ門徒ニ不係自身冥加之た此節如何様之練合を以献上仕度奉存候間何卒御聞濟被下願之通被仰付候ハ、難有仕合奉存候右付而ハ御國中配下法中一統之意趣當今之御時勢如何相心得居可申哉試申度旁間ニ之心得違之僧侶可有之哉茂難計左候ハ、一統ニ及シ御國恩之程篤々申諭度奉存候間右之段可然様御參談可被下奉願候以上

八月十二日

寺社方

順正 寺
西光 寺

根取 衆 中

元治 元年

八月十三日幕府征長諸藩の攻口を部署す

〔小倉一件、長防御追討一件、文久四年日記、長防爲御征伐御進發一途、京都返達御用狀扣、長征記録〕

(牧野備前守ヨリ本藩留守居へ交付)

一筆令啓達候松平大膳大夫追討被仰付候ニ付其方儀者海路下之關より之先鋒被仰付候間同所より山口表に駈向ひ大膳大夫父子始誅戮可致旨被仰付候小笠原大膳大夫奥平大膳大夫儀茂同様被仰付候間可被申合候尤小笠原大膳大夫儀者小笠原近江守小笠原幸松丸と一手ニ罷成其方並奥平大膳大夫よりは先立可相進旨被仰出候間可被得其意候且又長防兩國に攻入候口々割合方之儀者別紙之通被仰出候間是又可被申合候尤當月中出陣之心得ニ而出張日限之儀者尾張前大納言殿に可被相伺候此段可相達旨依上意如此候恐々謹言

八月十三日

諏訪 因幡守

忠誠 花押

阿部 豊後守

正外 花押

牧野 備前守

忠恭 花押

水野 和泉守

忠精 花押

細川 越中守殿

陸路藝州より岩國夫より山口に攻寄候面々

壹番

松平 安藝守
板倉 周防守
眞田 信濃守
阿部 主計頭

松平安藝守始に應援之面々

松平 近江守

三浦 備後守

板倉 攝津守

本多 肥後守

松平 備前守

脇坂 淡路守

陸路石州より萩夫より山口に攻寄候面々

貳番

松平 相模守

松平 右近將監

龜井 隠岐守

松平 三河守

松平 出羽守

貳番

元治元年

松平三河守始應援之面々

壹番

有馬 遠江守
松平 佐渡守
松平 主計頭

海路四國より徳山夫より山口に攻寄候面々

松平 阿波守

松平 隠岐守

松平 讃岐守

伊達 遠江守

松平讃岐守始に應援

松平 壹岐守

海路下之關夫より山口に攻寄候面々

壹番

細川 越中守
小笠原 大膳大夫
奥平 大膳大夫
小笠原 近江守
小笠原 幸松丸

小笠原大膳大夫儀者領分近之儀ニ付細川越中守奥平大

膳大夫より先立可相向候小笠原近江守小笠原幸松丸儀
之小笠原大膳大夫と一手ニ罷成可相向候

貳番 松平美濃守
松平肥前守

松平美濃守始に應援

小笠原佐渡守

海路萩夫より山口に攻寄候面々

壹番 松平修理大夫

松平修理大夫に應援

松平主殿頭

貳番 有馬中務大輔

立花飛騨守

右之通被仰出候間陣中之儀萬事尾張前大納言殿御指揮

ニ随ひ速ニ遂成功候様被仰出之

右一通

陸路藝州より岩國夫より山口に攻寄候面々に

松平左金吾

御使番

向井左門
小笠原鐘次郎

陸路石州より萩夫より山口に攻寄候面々に

同 内藤彌左衛門
大島主殿
朝倉小源太

海路四國より徳山夫より山口に攻寄候面々に

水野采女

同 服部中

遠山左衛門

海路下之關夫より山口に攻寄候面々に

多賀輒負

同 曲淵鑄市

岩瀬敬太郎

海路萩に夫より山口に攻寄候面々に

天野民七郎

同 平岩金左衛門

内藤平八郎

右之通爲軍目付被差遣候間可被得其意候

右一通

美濃守儀松平大膳大夫御征伐之御用被仰付且長州表に出張可致旨被仰出候間可被得其意候事

右一通

〔小倉二件、長防御追討一件、文久四年日記、尊攘錄皇武令〕

八月十三日稍葉美濃守様方御留守居御呼出被成御渡候御書付寫

細川越中守

九州討手

一ノ先 小笠原大膳大夫

二 細川越中守

三 奥平大膳大夫

四 松平肥前守

長州御征伐被 仰出候付而書面之通相心得去月廿四日相達國許に揃置候人數早々繰出し當月下旬より來月十日を限豐

前國に參集差圖相待可被申候尤自彼妄動致し候ハ、不待差圖攻入誅伐可有之候

但人數之多少者家之高ニ應し選兵強卒差出雜人者可成丈相省可被申候

八月

八月十三日勝義邦一橋慶喜の命を奉じ異船退去談判の爲めに下關に赴く

〔防長御追討件一〕

一異國船長州に向致發炮候段小笠原奥平兩家より御届御坐候昨日一橋公より勝麟太郎殿を被差立蒸氣船より彼表に罷越
是非共退帆仕候様談判可致旨被 仰付候事會鈴木より承候

元 治 元 年

八月十四日

草野平藏

〔海州日誌〕

十二日

今夕、京師永井主水、戸川伴三郎より來狀、云、豐之姫島に、英佛蘭の軍艦十七八隻滯泊、長州に事あらむとす、今長征の御令、天下に下だれり、然るに、外國先きんじて戦争を始めば、甚御不都合の事共ふり、速に軍艦に行きて説得し暫時闘争を止めよと、是橋公の御沙汰也と、此度の事、既ニ當春長崎にて逢接、また横濱にて彼等に接す中々我輩の止むべき所にあらず、既に江戸にて參政御説得ありしに、彼之を不用、終ニ彼等に集會、臣辭するも、又消時日候而已、唯一死を以て、彼に説かむと決答す

十四日

八ツ時過、豐姫島着、異船不殘下の關に行く、聞く、去る五日英佛都合四隻下の關口え寄す、長家發砲ふし暫時にし、英より一發、佛より砲發凡百斗、砲臺より三十發程、船に不達、一々砲臺燒打、火藥庫發火、夜四ツ頃迄燒發砲は幕六ツ時止む、同四ツ時、英人上陸、火門え釘を打初め、長家より使船ありといへ共、未解、詐策あるを考へ發砲すと云、

十五日

姫島出帆、此朝、佛夷の商船三隻同津え着津

八月十三日播州龍野藩使者を大坂の我藩邸に遣して征長に關し依頼する所あり

〔大坂返達御用狀扣〕

（八月十三日播州龍野藩の使者高橋左次右衛門大坂の我藩邸に來り提出の口演書）

今般長州征討之儀被仰出此方様ニ而も御同様之趣然處淡路守様ニは御承知之通り御小藩御微力之儀今般之被蒙大命彼是被成御心配候就而者萬端厚御頼被仰進何角御示教被成進候様有御座度思召候段被仰進候
右之趣早々參上宜申述旨江戸表より被仰付越候由右之段申達候恐々謹言

八月十三日徳山藩主毛利廣篤書を宇和島藩主伊達宗徳に致し其使僧を遣はして懇示せし厚意を謝し且つ京師事變之情狀を縷陳し斡旋の勞を執らむ事を請ふ尋て宗徳之に答ふる所あり

〔自筆狀 控、尊攘錄探索書〕

徳山ヨリ宇和島侯にノ書翰

小管奉教呈候時下秋涼相催候處先以彌御安泰可被成御起居珍重不少奉拜賀候然ハ今盤京師變動ニ付態と御使僧被差向御内密被仰下候御親切之情義深重難有不奉堪感謝之至ニ候早速本家大膳大夫父子に申聞候處於父子も難有感佩之外無御坐候則弊邑迄使者差遣御兩使僧衆に茂御相對爲仕候次第ニ御座候先是本家大膳大夫父子本趣意之處先年 叡慮幕議 翻語有之候處不忍傍觀公武之御間御周旋仕 天朝幕府に忠節信義心得違無之様重々申聞置候得共其詮茂無之粗暴過激 遂ニ過日三老臣妄舉ニ立至候段深ク恐入奉り候畢竟本家父子教誡之不行届より事起り候次第其罪難遁於支藩私式茂同 奉恐縮候尤三老臣之者等先禁錮申付置本家父子謹而天幕之御沙汰相待罷居候何分粗暴之罪科ハ如何様被 仰付候様も 恐入候得共奉對 天朝賊名を蒙り候而ハ毛利一家之名義不相立家族一統心痛罷在候間乍此上無御見棄大膳大夫本趣意 之處御垂隣被下伺卒一等寛大之御裁斷被仰出候様御盡力可被下伏而。奉希上候右御禮請教願旁家臣櫻井龍右衛門飯田 信差出候に付委細彼者口頭ニ可申上候宜御聽取可被成下候恐惶謹言

八月十三日

毛利淡路守

伊達江守様

梧下謹呈

二日午筆端御親戚之御情義不被捨置御懇篤之至り幾層も難有奉拜謝候昨年以來之事情私共に於ても殊之外痛心仕居候乍憚御垂察可被成下候何分ニ茂本文之趣御盡力御救助之程吳々も奉懇禱候勿論此上於公武之御沙汰筋ハ本藩ニおゐても謹而承服仕候外ハ有御座間敷候億萬一不心得之角御坐候節ハ私ニ於而決而同心不仕候此段上對天幕之威下對祖宗之靈奉誓候哀切之餘筆不如意萬御照諒可被成下候已上

〔全書〕

宇和島ヨリ之書並兩條堂

近年御本家之所行御不同心ニ候得共立而御諫言候共強暴之勢ヒニ而不被行不被得止御引籠之處終ニ當年恐多茂禁闕ニ發炮忽朝敵之逆舉と相成候處其儀ニ而者是迄之御苦心御心裡之程ハ追々致承知深案入候得共當今 主上御逆鱗公方様御進發三十五藩討手被命只今ニ至り是迄之御赤心御明白之段建白致候共容易ニ寛大之御沙汰茂被及間敷因而者別紙之兩條之處御形跡上顯著之上ニ而無之而者御取次茂難致無止御文通封之儘一先致返進候
一御本藩實ニ御悔悟ニ候ハ、御主人ハ勿論城を明寺院杯に御閉居罪を被待候乎
一徳山御一藩ハ此上公武之御沙汰筋於御本藩ハ御不服之筋有之候共御本藩ニ御手切御敬服被成候御心得ニ居候哉
右兩條之内不拔之御處置御斷決之儀候ハ、乍不及公武に相願可申候
宇和島侯ヨリ之書
淡路守様御書遠江守致披見候處御心中深察入候御端書兩條之趣御尤之事ニ付何レ仰公裁候外無御座候依テ早速京都稻

葉美濃守殿に可相達候

八月十四日鷹司前關白父子參朝を許さる

〔京都返達御用狀扣〕

八月廿八日 九月十九日着

藤本より

御留守居書上一通指上申候

一此間差上候有柄川宮様御初十九日一條付而御差扣被 仰出候段久我様書記方より爲知參候之間違之由ニ而有柄川宮様御父子並大炊御門様之七月十八日一條ニ付御參 朝被止鷹司様御父子之十九日一舉ニ而御參 朝被止候由申來候
十八日一條と申之長州之御處置筋寬急之堺於 禁中御圓論有之候由云々以上
卷込

久我様書記方より如左

應司前關白殿

同 大納言殿

右十九日一舉ニ付御取調中參 朝被止候處去ル十四日平常之通參 朝被 仰出候事

八月廿三日

右之通知せ來申候以上

八月廿三日

御留守居中

藤本彌三郎殿

元治元年

八月十四日一橋慶喜征長總督任命のことを二條關白に報告す
〔九條家國事記録〕

○八月十六日

御清安被爲渡恐悦至極ニ奉存候然者長州追討總督紀州之旨奉申上候處又候尾州前大納言に總督申付候趣關東方申參候紀州に之去ル五日被申渡之尾州に之七日被申渡ニ御座候得共尾州之方治定之事ト奉存候就而者紀州上京申遣候儀之先見合申候此段御心得迄不取敢奉申上候委細者明日拜顔之節と文略仕候恐々頓首々々

八月十四日

慶

喜

關 白 殿 下

諸大夫中

八月十四日藩主慶順沼田勘解由以下小倉出陣の將士を獎勵す

〔御在國日記〕

八月十四日晴

- 一 今度小倉表援兵被仰付御人數被差出御備頭沼田勘解由方組共并大筒手且御備附屬之御役々共近々被差立候付左之通
- 一 沼田勘解由方御番頭兩人 志水久馬助 寺尾九郎左衛門 御小姓頭田中八郎兵衛 御奉行片山多門 九時揃ニ成ル 四時揃ニ而平服於陽春御間被召出御意被成下候事
- 一 沼田勘解由方に之御意左之通
- 一 此節之別而可致心配此間も申聞置候通ニ而該ニ乍太儀忠勤いたせ
- 一 御番頭始に之御意左之通

御番頭着座并士席以上

此節之別而不容易事柄ニ付謹慎を加瑕璫ニ不相成様忠勤いたせ何れ茂太儀

一 右相濟士席以上 九時揃ニ成ル 而御目見被仰付何れ茂平服九曜之御間中柱之御間に并居候上歌仙之御間に御出座御目見被遊御受御意被成下被遊御入候事

一 右相濟座附等共儘佐野之御間御入側に而御酒頂戴被仰付沼田勘解由方座着之上土器乗塗三方并鬘斗昆布勝粟敷紙三方持出鐵御銚子冷酒 何れ茂給仕 御小姓組 頂戴相濟御三方等取入猶又三方ニ々所は持出之 給仕步 御小姓 小姓御番頭兩人一同頂戴引續御小姓頭御奉行一同頂戴出田作左衛門無役番座頂戴相濟三方一席下々七所に持出之給仕步御小姓士席以上順々頂戴相濟三方等取入候事

(以下略)

八月十四日我藩は備前藩の使者に答書を授く

〔機密間日記〕

備前方之御使者參着書取等之持參無之口上を以段々申述

此方様御國議等も御意被仰進候付此方より茂此書而之趣意を以御返答申述候事

御側御取次

島 田 傳 之 允

御演達之趣委細御名に相達候處夫々被致承知候然處廿八日ニ長州討手被爲蒙 仰不取敢翌日御出立ニ付右被蒙 仰ニ付而之御國議之相決申聞敷候得共其以前長州方大勢之御人數兵器を携登込且長門守様も押而御出京之御打立ニ相成况京地變動有之候付而之如何様成御國議ニ而有之たる哉被致承知度御尋申候

元 治 元 年

一九九

一今度福原越後初於 闕下之所業誠以無存懸只々奉恐入候處此節追討之 朝命茂下候得之謹而被奉之尙御指圖を待被居候事ニ御座候尤小倉應援之人數之不日ニ差出候筈ニ御座候

一人數登京之儀之最前京都表物騒之様子相聞帝都御守衛茂被爲蒙 仰居候事ニ付至急ニ差登候筈ニ御座候
一良之助上京之儀之京地變動ニ付而天機窺名代として上京之筈ニ而於彼地周旋筋等豫覺悟いたし居候儀之無之候

〔一橋初來使一件〕

文久三年八月以來
太守様良之助様に御自簡箱一宛被進候付同十四日右御返書御奉行より引渡候云々

八月十四日本藩は防長攻口部署の令達に就き疑義を生したるを以て幕府に稟申する所あり

〔長防爲御征伐御進發一途、長防御追討一件、文久四年日記、京都諸扣〕

〔牧野關老へ提出〕

昨十三日夜越中守に御渡之御奉書急速國許に早驅を以差遣候而茂遠國殊此砌中國路差支海路罷越候儀ニ付無滯候而茂先十五六日程ならてハ到着仕間敷奉存候

一右之通ニ付當月中出陳仕候儀何程ニ可有御座哉此儀ハ御聞置可被成下候様奉存候

一出張日限之儀者越中守於國許御奉書拜見仕候上尾張前大納言様に可奉伺處遠國掛隔仕居候事ニ付御當地に相詰居候重役之者より出張日限之儀伺として御當地より家來之者差立名古屋表或者御出張之御向ニ而奉伺候上直様國許越中守に申聞候様仕候而茂不苦儀ニ可有御座哉

一諸手出張資寄候日限等之儀御内定之趣茂可有御座哉左候ハ、其段ハ前大納言様に御内達被爲在候哉之事

但攻寄日限之儀ハ御模様ニ寄候而者前大納言様より諸手に御達も可有御座哉之事

一出張日限之儀前大納言様に奉伺越中守承知仕候上國許出陳仕候儀ニ可有御座哉又ハ時宜相考最寄之地に出張仕候方ニ

茂可有御座哉之事

一前大納言様御出張向并追而御本陣御場所等之事

一公方様御進發御比合之事

一軍御目付御使番様方御出立日限且御出會向等之事

一越中守於國許御奉書拜見仕候上此節之儀ニ付而奉伺候儀茂有之御當地に往反之間合無御座見積ニ候ハ、前大納言様且稻葉美濃守様に奉伺候方ニ茂可有御座奉存候事

右者國許之儀遠國數百里相隔候事ニ付急場被是掛念苦心可仕と奉存候間。奉伺御差圖之趣御奉書一同急速國許越中守

に申遣度奉存候可然様奉願候以上

御内慮之程

細川越中守家來

八月十四日

澤村脩藏

八月十五日

御差圖振寫

書面出張日限尾張前大納言殿に伺方等之儀ハ書面之通相心得不苦諸手出張資寄候日限等之儀ハ前大納言殿御指揮有之筈ニ候越中守出陣心得方之儀并前大納言殿御出張向等之儀者御同人に可相伺候御進發御比合之儀者御治定次第可被仰出軍目付御使番出立日限等之儀者其向に可被承合且末々條之趣者書而之通相心得不苦候事

八月十四日本藩江戸留守居澤村脩藏征長軍の軍監多賀靱負を往訪し其出發期限等につき内聞する所あり

〔長防爲御征伐御進發一途〕

一左之通御書方に及書上候事

御用番牧野備前守様より昨夜御呼出ニ而被成御渡候御奉書并御書付之趣ニ付下關より長防に被差向候手に被附置候軍御目付御使番多賀様に御模倣伺旁不取敢今日參上仕御逢相願此方様に御達之趣一ト通申上候處親負様より御同様御達有之候付此方様御在府ニ茂被爲在候ハ、早速御出茂可被成處御在國ニ被爲在且御同人茂彼是御用繁旁ニ付程ニ寄近日御出茂可被成との御噂御座候間相應之御挨拶申上置候

一輕負様御列江戸御出立之御比台御内々承候處御同人より茂公邊向御伺之處駭と御差圖無之當月末迄之内ニ茂御出立ニ而可然との趣ニ付大概廿五六日比ニ茂御出立之御心得ニ而御用意被成候段御噂ニ御座候

一御當地より大坂迄之處御軍艦御拜借敷又之陸路被差越候哉夫等之處茂御伺被置候得共未々いつとも御指圖無御坐由一大坂より長防攻口御請場に御越之儀公邊之御船被差出候哉又ハ其手之御方々様御迎船御差出候方ニ茂有之候哉此儀茂御伺被置候へとも未々御差圖無御座由

一尾張前大納言様御出張向何方ニ可有御座哉御内々相伺候處是以一切相分不申營中ニ而之見込ニ之播州姫路又之藝州廣島邊迄御出張ニ茂可有之との見込ニ之御座候得共駭と御返答被成候段被仰聞候

一御進發御比台海陸之儀共御伺ニ相成居候由之處何之御内意茂無之由
但營中ニ而者來月廿日比御目當ニ御支度之趣ニ相唱右之心得を以役々用意致し居候との趣被仰聞候
右之通ニ御座候尙追而心付候後々ハ伺取後便ニ申上候様可仕候以上

八月十四日

澤村脩藏

八月十四日澤村脩藏は將軍閣老參政等出發の時期及び異船引戻等につき報告する所あり〔長防御追討一件〕

御留守居書上

御進發之御頃台今日茂探索仕候處駭と不相分候得共矢張九月十日比之目當ニ奥向御用意等有之候由ニ御座候

一長海に横濱表より出帆之各國軍艦引戻之儀其後之模様於 御城猶外國御奉行支配組頭宮田文吉様に御城使を以相伺候處外國御奉行様横濱御出張之上尙御談判之趣有之各國ミンストルより右軍艦引戻として去ル十日十一日比早船壹艘横濱出船之筈ニ候間定而無相違出帆いたしたるニ而可有之旨御噂有之候由ニ御座候

一本多能登守様御上京被 仰付置候處御上京ニ不及旨御達ニ相成候由

一長防御追討被 仰付置候内御在府之御方々御出立日限左之通之由

明十五日御出立之由 板倉周防守様
明後十六日右同 脇坂淡路守様
來ル十七日右同 松平壹岐守様

一右同御在府之御方々左之通尤未々御出立日限相分兼申候

板倉攝津守様
有馬遠江守様
松平佐渡守様
松平主計頭様

右之外去ル十一日御便被差立候後相替候儀承込不申候且御用御頼大目附神保伯耆守様公用方書役より差越候書付別紙差上申候以上

八月十四日

御留守居共

八月十六日日本藩長岡護美の上京を延期す

元治元年

〔元治元年五月二日以後 慶應元年十二月迄〕 御記録

一左之一通木村男吏が被相渡

此後先御不用之方ニ相成

良之助様此節之御上京御様子有之御延引被仰出候尤何時御上京可被爲在哉被難計候付向々其心得ニ而罷在候様との旨候事

八月十六日

八月十六日日本藩備頭沼田勘解由の兵本日より發足して小倉に向ふ

〔京大阪鶴崎 長崎小倉仕懸御用狀扣〕

八月十九日

〔在京〕 中山左、上田、中山、藤本殿

〔在國〕 松本より

一小倉表援兵被仰出候ニ付而御備頭沼田勘解由方出張被仰付組手之人数並鐵炮手等去十六日より追々彼地に被差立候右之段御所司代様に御届其外諸向御知せ等之儀ニ付伺相濟候別紙調書一通差進申候宜被有御取計候恐々謹言 尙々鍾田軍之助儀去十六日爰許着持參之御用狀等受取申候以上

〔全書〕

今度被差出候小倉援兵御人数之儀佐貳役に承合候處此節之上下調者不致承知候得共一御備者凡千七百人ニ而此節ハ在御家人百人鐵炮師大島手ニ被差加候間大略二千人ニ及段返答いゝし候自然外向問合等之節御返答之御都合も可相成と此段申進候以上

〔文久四年正月 御在國日記〕

〔八月十八日ノ條〕

一御備組且附屬共惣人数昨日御奉行に及取遣置候處大略之まらへニ而究粹之人数未タ相分兼候由ニ而差廻來候人数付左之通

- 一 壹人 御備頭
- 一 壹人 上齋座
- 一 壹人 小荷駄奉行
- 一 壹人 無役着座
- 一 貳人 御番頭
- 一 壹人 御鐵炮五拾挺頭組共
- 一 貳人 右同三拾挺頭組共
- 一 四人 右同貳拾挺頭組共
- 一 貳人 右同拾挺頭組共
- 一 壹人 右同五拾挺之副頭
- 一 貳人 右同三拾挺之副頭
- 一 四人 御番方組脇
- 一 壹人 御旗奉行
- 一 八拾人程 御番方貳組
- 一 壹人 御使番

元治元年

一百五拾人 内

- 五拾人 土席
- 九拾七人 輕輩
- 一 壹人 御奉行
- 一 壹人 御奉行所土席根取
- 一 貳人 同所御物書
- 一 八人 御奉行に被差添候御掃除頭支配
- 一 五人 御掃除方支配無苗之者
- 一 壹人 御目附
- 一 壹人 御目附付御横目
- 一 壹人 御勘定頭
- 一 壹人 御勘定所根取
- 一 五人 御勘定所物書

二〇五

- 一三人 御勝手方附所々御横目
- 一貳人 兵糧米等請拂役
- 一五人 金銀錢宰領
- 一貳人 御醫師
- 一壹人 御馬醫
- 一壹人 御儒官
- 一六人 歩御使番
- 一壹人 陳場奉行御作事所御目附
- 一七人 御作事所根取以下
- 一三拾人 陳場奉行差添地筒

〔北岡文庫輯録〕

(警衛出兵人數從元治元年至明治元年十二月坂本彦衛調の内)

- 八月
- 一長防御裁許ニ就て小倉へ應援スヘキ旨命セラレタリ因テ備頭沼田勘解由組共當月初旬ヨリ追々ニ出張
 - 沼田勘解由 四人 番頭并番頭格
 - 四人 物頭并物頭格
 - 二十二 馬廻
 - 四百三十五人

- 一壹人 御具足支配役御鐵炮御弓支配役
- 一壹人 御武器支配
- 一拾七人 御天守方手傳役并御細工人共
- 一九人 歩御小姓代共
- 一六人 御昇之者
- 一三拾人 一領一疋
- 一四人 天文師役門弟共
- 内
- 三人 輕輩
- 以上

二〇六

二百十八人

仲間

百九拾六人

雜人

沼田勘解由家來

五十七人

陪士

八十五人

足輕

三十六人

仲間

百四拾二人

雜人

番頭以下家來

六十四人

陪士

三十七人

足輕

二十人

仲間

百三拾六人

雜人

惣合二千二百九十三人

八月十六日日本藩長崎留守居匂坂平右衛門は征長に關し長崎に戒嚴令の布かれたる事及び島原藩主參府猶豫の事情を藩政府に報告す

〔文久二年四月上季 長崎長崎小倉返達御用狀扣〕

八月十六日 同十九日

着匂坂より

(前略)

一長崎御當番方肥前様開役より廻達有之候御書付寫壹通并島原開役より廻狀寫一通差進申候
今度長崎表に各國軍艦數艘渡來其上於京都松平大膳大夫家來共兵端を開對禁闕及均發全軍謀顯然ニ付征伐之儀從御所
被仰出候ニ付而者御取締筋專要之折柄ニ付當地樞要之日見口其外柵門ニおゐて諸家家來を始都而名前等駈ト相糾通行
爲致若胡亂之者之其所に留置浮浪之輩見請候もの之捕押候等候條近國諸家おゐても御領分通行之ものハ同様相心得仕
儀次第可被取計候事

元 治 元 年

島原聞役よりの廻狀前寫

然者主殿頭儀參府順年御座候處時情難計當表大切之次第を以先般參勤時節之儀御内慮被相伺候處御差圖御座候付當月初旬出立可被致答之處近來彌世上不穩極風聞ニ付難被捨置候條も有之素より勤場第一之心得之處島原表之總海岸ニ付當地間近ニ候得者一方之變事ニ双方手當不被致候而不相叶且豊州領分儀之長州海見渡之場所ニ御座候處同所之儀ニ付而之異人より申立居候事件も有之趣ニ候へハ是以變事難計旁小家少人數東西ニ引分候而之手薄相成萬一御國辱等引起候而之難相濟次第ニ付參府之儀今暫世上穩相成候迄見合手當向嚴重被申付置度實ニ難默止時情ニ付家老板倉八右衛門被差出服部長門守林に被及尋問候處前々廉々實以不穩儀ニ付今暫在邑可然旨御申聞候よし被致承知尤時情見合少も穩ニ相成候ハ、早速出立可被致段江府表之御届書被差出候依之右之趣長門守様ニ以使札被申候間昨日私相勤申候此段爲御知爲可得貴意乍略儀以一紙如此御座候以上

八月三日

石川 治部 右衛門

八月十六日長州末家毛利讃岐守同左京亮は京師騷擾の責任者たる長藩三老臣の處置及び藩主父子恐懼謹慎の狀を具して事情酌量の歎願書を提出す

〔採 襟 録〕

本家松平大膳大夫家來之者先達而脱走仕候ニ付家老之者へ申付爲鎮靜差登候處却而浪士輩ニ被相誘去月十八日恐多も於釐穀之下及騷擾候儀全大膳大夫父子之命令不相守不屈之儀ニ付右家老之者共毛利淡路守へ預置御差圖奉伺猶父子共深奉恐入候罷在候就而於私儀も不存寄儀とハ乍申末之間柄誠以奉恐懼候依之同様懼罷在候何分前條之始末深御取扱被成下候様偏ニ奉願候以上

八月十六日

毛利 讃 岐 守

浪士鎮靜撲夷歎願として本家松平大膳大夫家來之者爲罷登候處去月十八日夜禁闕近及騷擾候由於私毛頭不存寄事柄ニ而一入苦身罷在候處京師留守居之者罷下り巨細之儀承知仕實以奉輕朝廷絶言語候次第深奉恐駭候ニ付謹慎罷在候勿論大膳大夫父子ニ於て聊別意無御座候處家老益田右衛門介福原越後國司信濃等大膳大夫宿志ニ違背脱藩之者ニ被誘及暴動候ニ付右三人とも毛利淡路守へ預置何分御差圖相待候由就而は大膳大夫父子共深恐入候罷在候間右之邊之儀等被聞召分被下候様伏而奉懇願候已上

八月

毛利 左 京 亮

八月十八日丹後宮津藩主松平宗秀老中に任ぜらる

〔文久四年より慶應二年迄御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

一御同席觸寫一通八月十九日被指出

上 杉 彈 正 大 弼 様

御城當番

松 平 大 和 守 様

表組頭

御留守居中様

杉 山 道 筑

松平伯耆守殿加判之列被 仰付旨御吹聴且屋敷程遠ニ付歎諸廻勤御斷之旨被仰聞候段神保佐渡守殿被申聞候間申進候御同席御類役中に早々御順達可被成候以上

八月十八日

猶以留り之御方、御城に御報可被遺候以上

八月十八日藩主慶順明日小倉に出陣すべき番頭寺尾九郎左衛門小荷駄奉行楯岡小文吾を召し奨勵する所あり

元 治 元 年

〔御在國日記〕

〔文久四年 八月十八日の條〕

一今度小倉表爲應援被差越候御備手之内將監殿組片手之御番頭寺尾九郎左衛門小荷駄奉行楢岡小文吾明日爰許被差立候付今日於陽春御間被 召出御手尉斗蛇被下候事
但不老門出入之事

八月十八日京都の形勢一變の報により溝口藏人の一隊中途より歸國す

〔御在國日記〕

〔文久四年 八月十八日〕

一京都表不容易形勢ニ付先月廿三日方同廿五日迄追々被差立候御備手之面々依御呼下船中引返今日内牧方歸着御備頭溝口藏人方御番頭西山大衛澤村八之進御花畑に罷出候付於陽春御間被 召出御手尉斗蛇被下候事
但溝口藏人方に者御吸物御酒御肴一種一汁三菜之支度被下候付御小姓頭に及御達御給仕出方之儀も一同申達候尤用意之儀之御臺所頭に及口達候事

〔北岡文庫輯録〕

〔警衛出兵人數從元治元年十二月 坂本彦衛調の内〕

七月

一備頭溝口藏人組共一備京地不穩趣ニ因テ至急ニ國元出發ノ處行違ニ前條ノ變動有之共一事ハ不日ニ鎮定且長防追討ノ模様ヲ聞キ海上ヨリ引返ス

但郷士百人右一同出發是ハ其マ、上京警衛ノ人數ニ加ル

八月十九日幕府は將軍の征長進發に際し糧秣等の徴發に關する注意を沿道に示達す

〔御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

〔文久二年慶應四年迄 阿部豊後守殿御渡候御覺書壹通相達候間被得其意云々〕

八月十九日

大

目

付

細川 越中 守殿

〔外九名〕

右留守居

覺

今般長防爲御征伐御進發被爲在候付而者兵糧米并秣等用意之儀最寄御代官ニ而取調候筈ニ付其所々ニおゐて差圖を請差支無之様可致候尤右ニ付米穀之勿論諸色等無謂直段引上ケ賣買致間敷候右之趣東海道中山道夫より長防に之道中南北海岸并津和野道最寄國々在町に御料ハ御代官私領之領主地主より不洩様可被相觸候
右之通萬石以上以下之面々に可被相觸候事

八月

八月十九日幕府長崎の長藩邸を沒收す

〔御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

〔文久三年四月上季 崎小倉返達御用狀扣〕

八月廿九日 九月朔日着

元 治 元 年

句坂より

別啓

一 爰許御當番方肥前様類役より廻達有之候御書寫一通并久留米類役より之廻狀寫一通則差進申候以上(久留米よりの廻狀今探らす)
松平大膳大夫當表屋敷被召上候間同所ニ罷在候家來共國許ニ爲引拂條様可取計旨和泉守殿被仰渡候御書付昨十九日到來候付即刻裁屋敷詰家來中間共迄引拂條様申渡當分之内大村丹後守に預置候條爲心得相達候

子八月

八月廿日幕府は去る十三日京都に於て示達せし征長軍部署の令を撤し江戸に於て示達する所に據らしむ

〔長防御追討一件〕

八月廿一日中山左、上田、中山平、藤本より 九月五日着

一 昨廿日五時稻葉美濃守様より御呼出ニ付久兵衛罷出候處別紙御書付一通御用人を以被成御渡候付差上申候云々

細川越中守

長州御征伐討手配之儀於當地去ル十三日以書付相達候處右者取消しニ致し討手配之儀江戸表おゐて相達候通可被心得候(八月廿二日幕府は江戸に於て同意味の令達を發す)

八月

〔小倉一件〕

今朝稻葉美濃守様より御呼出ニ付上田久兵衛罷出申候處別紙御書付公用人を以御渡ニ相成申候間則寫之御達仕候然處去ル十三日討手配之儀ハ此許ニおゐて一橋様御始御評議之上美濃守様より御達ニ相成候儀有之候處右ニ付而於江戸表

茂御達ニ相成候處ニ而ハ一鉢之御趣意ハ相替不申候得共區々相成候處々右之通御取消ニ相成候事ニ有之候然ニ於御當地御達ニ相成候處ニ而之定而御手當筋之御手障ニ爲相成儀茂可有之候向後討手筋ニ付而之御達ニ都而江戸表ニ而之御達通相心得條様との儀茂演達ニ相成申候間此段御達仕候以上

八月廿日

御留守居中

藪圖書殿

八月廿一日奥州棚倉藩主松平周防守幕命により野州浪士追討の兵を小金潮來附近に出す

〔諸雜御留守居録上〕

文久三年八月以後
一 松平周防守様に去十九日野州邊爲追討御人數被差出候様御達ニ相成候由ニ付外使御同方様衆に差越問合候處同廿一日小金潮來邊に出張被仰付俄ニ侍以上三百人程其外雜人被指出候由其節御目付戸田五助様歩兵頭河野伊豫守様大地方被差添候由御附屬人數委敷相分不申歩兵之五百人被差立候由其後之模様未何等茂相知不申候由御座候(中略)
右之通ニ御座候猶承合后便ニ申上候様可仕候

八月廿九日

澤村脩藏

八月廿二日幕府更に征長の部署等は都て江戸の命令に従ふべき旨を達す

〔長防御追討一件〕

(八月廿二日於江戸牧野閑老ヨリ留守居ニ交附ス)

細川越中守

毛利大膳御征伐ニ付口々討手之面々手配之儀於京都相達候趣も有之候得共攻口之割合出陣比合之儀者都而於當地被仰出候通可被心得候

元治元年

八月廿二日本藩政府砲五百挺を鑄造することを決す尋て原料の鐵購入の爲め人を大坂廣島等に派遣す

〔小笠原美濃日録〕

八月廿二日

吉田少右衛門來、製砲決五百挺、然速不成、故不限員、令可造、而欲速成、云々、予諾之、彼云、若及大數、則賣之於他邦、可也、云々

〔機密間日記〕

文久四年

御城內方 御奉行に 覺

廉三郎二男

森 尾 龍 彦

右者地鐵御買上御用付而大坂表に被差越右御用相濟候上京都に被差越同所御武器御取下御用を茂兼相勤候様尤委細之儀之御城內方承合候様可被達候以上

八月廿二日

志水新承組大塚甚右衛門育大塚丹次儀地鐵御買上付而精粗品段見分として大坂表に被差越候尤委細之儀者御城內方承合候様可被達候以上

同日

奉 行 所

池部 棕右衛門 殿
嘉悦市之進 殿

一筆致啓達候各樣彌御堅固可爲御勤珍重存候然者鐵砲地鐵御入用有之爲買入御家來森尾龍彦大塚丹次と申者共御許差越申候間速ニ買入方都合能相調候様其筋に可然被及御沙汰被下度此段御頼爲可得御意如是御座候恐惶謹言

御 家 老 連 名

八月廿三日

豐州御家老也

淺野 右 近 様

淺野 豐 後 様

上 田 主 水 様

此紙面龍彦列に添狀一通共當番所に遣御奉行より之添狀一同持し懸之申談いゝし候事

八月廿四日幕府毛利慶親父子の官位を禡ふ旨を達す

〔御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

文久四年慶應二年迄

牧野備前守殿御渡候御書付寫一通相達候間被其意云々

八月廿四日

大 目 付

上杉 彈正 大 弼 殿

松平 大 和 守 殿

右留守居

大 目 付に

松平大膳大夫家來共迫 禁固炮發候條不恐 天朝次第殊ニ父子之軍令條家來に遣候始末重々不届之至ニ付父子共官位並御一字御稱號被召放候旨被仰出候此段爲心得向々に可被。達候

八月

元 治 元 年

八月廿四日本藩政府は防長の事漸く迫るを以て藩士一般に征長部署の幕令を示し下知を待たしむ

〔小倉一件〕

長防討手被爲蒙仰候付而者一統覺悟筋之儀去ル七日相觸置候通候處同十三日於京都別紙之通期限被仰出候既ニ御備一手者小倉に被差出候事ニ候得共此上猶追々ニ御人數御練出御出馬被爲在候付表方御次方之無差別彌以諸事相整へ御下知を奉待候様可申聞旨被仰出候條奉得其意組々に茂可被相觸候以上（本文別紙とあるは八月十三日相觸置候條より交附したる九州打手の書なり）

八月廿四日

八月廿四日本藩政府は専ら武備の充實を期すべきを達し且つ更に征長軍の部署を定む

〔小倉一件〕

覺

御 小 性 頭
御 奉 行 人
御 用 人

不違御出馬被爲在事ニ候處萬般之御用意筋何程ニ可有之哉ト不一方被遊御懸念其上如是時體ニ付地場之事柄者不依何一切疊置御軍用一偏ニ打懸聊茂御差支無之様相整置可申旨御沙汰被爲在候條奉得其意附屬之御役々に茂屹可被示置候以上

八月廿四日

〔全書、御國江戸往來狀扣、文久四年日記〕

覺

堀 丹 右 衛 門 氏

此節討手被蒙仰候付而御手配之儀此間申達置候。通候イ處溝口藏人儀下着いたし當年一番手之事ニ付左之通

一番 溝口藏人組共

二番 有吉將監組共

三番 松野 亘組共

右之順ニ而被召仕其餘は最前申達置候通相心得候様尤此後變化次第ニ之臨時之御下知可有之旨猶被仰出候條奉得其意御同役は茂可有通達候以上

八月二十四

八月廿四日小笠原一學京師變動につき天機奉伺の使者として熊本を發す

〔御國江戸往來狀扣〕

以別紙申達候小笠原一學儀京地變動ニ付 天機御親爲 御名代 良之助殿御出京被 仰付置候處暫御延引被 仰出候付右御親之御使者被 仰付豊後路海上中之急ニ而被差越暫滯京被 仰付置候付今日爰許被遊御差立候此段爲可申達如是御座候以上

八月廿四日

御 中 老
御 家 老

藪 圖書殿
長 岡 衛 門 殿

〔機密間日記〕

元治元年八月良之助様御上京暫御延引付而御手数小笠原一學 天機御裏之御使者被仰付候付出立之節持參之書付等御書方調達扣

小笠原一學之八月廿四日熊本立也

御所司代様に

京都表變動之聞有之候付 天機伺として名代舍弟長岡良之助差登御警衛をも仕せ可申用意仕居候處七月廿日御達之趣ニ付尤上京仕せ候善之段最前御届申上候通御座候處同廿四日防長御追討被仰出候付越中守儀討手被仰付打續小倉援兵茂被仰付候付詰合役人共申談良之助此節之上京御猶豫之儀御内意奉伺候通御差圖被成下候付早速其段國許に申遣候處前條御達ニ付小倉表には人數差出御追討付而之人數練等專計會中ニ付旁良之助儀暫國許に罷在越中守に力を添諸般之手配行届候様仕度勿論此後之形勢次第ニは直ニ上京仕せ候覺悟御坐候此段申上候様越中守申付越候以上（本文の意味を日上田久兵衛より申告書を出す）

月 日

御名内
御 留 守 居 名

〔長防御追討一件〕

八月二十三日原案出來小笠原一學へ相渡す

八月廿四日森井惣四郎は長藩外人と和親を結びたることにつき公邊の處置に關する幕府勘定奉

行小栗上總介の談話及び和約の大要を報す

〔尊攘錄對州エ魯夷亂妨薩長夷船砲戰附生麥伏水一件〕

八月廿四日聞取抄略

森 井 惣 四 郎

一昨廿三日桑名藩留守居高野一郎左衛門御勘定奉行小栗上總介殿に罷出今度夷等長州為討其末和親を結候間取沙汰仕候幕府の願ニ御差留ニ相成候を外夷強而罷越戰爭を致候事其罪固不可許加之朝敵の長州と勝手ニ和親を結候に到りては愈其罪難被許事ニ御座候處乍恐公邊之御所置如何御運御座候哉と相伺候處上總介殿返答に者長州外夷と和親を結候者今日始り候事に無之既に拙者先年亞米利加に渡海仕候節長州人亞國と已に和親を結居申候處歸國仕候得者長州事京師に取入り頻ニ攘夷之説を表ニ唱へ京師之威光を假り態と幕府を困窮せしめ其虛に乗して幕府を仆シ己を天下之權を取り開國を成んと巧ミ居候處不計も天朝も被見捨昨年已來之事と相成國內にて者外夷と和親を結ふ事異論を生し候歟此節外夷長州に罷越候ても表ニハ戰爭之形を見セ候上公然と和親を結之手段ニ有之候處實戰と相成最早長州内外に之頼を失候得共根源和親を内々結居候歟合戰之後再和親之談判と相成申候長州之罪惡一日半時も難被許是非とも至急ニ御進發罪を御正し不被遊して者難相成御座候乍併外夷既ニ和親を結候上者長州御征伐外夷を引離し候上ニ御進發無之て者愈以大變出來可仕候間旨く夷人をムまして長州と離間せしめ其上御征伐之御手順も相立可申カし一旦外夷和親を結ひ候上者容易ニ彼等引離候見込も無之何様彼の者ニ戻らす程能取なし候外有之間敷右之次第にて攘夷者勿論鎖港之休店之も思ひも不寄事ニ御座候於京師御慮如何被爲在候哉此時ニ當りて攘夷鎖港杯と御唱被遊候而者以ての外之事ニ而會津と貴藩と者今度京都にて拔群之御忠誠御盡被成候間自然攘夷鎖港之事とも被仰出候ハ、程能御周旋外夷と事を破さる様有之度との事にて御座候ニ付猶一郎左衛門伺候ニ者然らハ夷人等推て長州を討其上和親を結ひ候罪御許無御座候哉長州之罪惡耳責候て夷人を御責不被爲候て者天下之人心折合可申歟何分其見込付兼候と申候處上總介殿左をハ其事ニ候政府にて甚々御困り被成居候との事にて何とも返答無之候山右者一郎左衛門が相話承申候

(下) 略
増補横濱新聞抜書

- 一 亞國蒸氣ターキエンク八月廿一日夕刻下の關ヶ當港に來着船左之條々知告セリ
 - 一 當月十六日日本人立會之上事件を約ス
 - 一 已來内海通行自由なるをし
 - 一 往還之船ノ薪水食糧相當之價にて賣渡るべき事
 - 一 破壊之臺場修復不可致事且新規臺場不可築立事
 - 一 各國軍兵等卒ひ來候入費相當可拂長門國主 帝に不相伺候ニ付海軍惣督に面會不致候
 - 一 當月十八日船隊下ノ關出帆ニ而同廿七日比下ノ關に軍艦貳艘相殘置候積り也
- (参考)

〔防長回天史〕

十四日講和使復た外艦に赴く前約あるが故ふり公は謹慎中に在るの故を以て親臨する能はざるを謝す同日和議の約成る(中略)

條約書

- 一 今日より以後總して外國船馬關通航之節は懇切に取扱を加ふべし
- 一 石炭食物薪水其他船中入用之品賣渡すべし
- 一 馬關海灣風濤つよき處故風波之難に逢ひし時は無障上陸すべし
- 一 新規に臺場を調るは勿論古き臺場を繕ひ並に大炮置ましき事

一 馬關町より始めて外國艦に向ひ砲發せしによつて此度可及燒失之處燒さる故其價金を出す事其外に軍之雜費を出す事之ニテ條江戸に於て四ヶ國欵差より決定する之段承知致す事

右は此度の合戦を止むべき迄に取結ふ條約にして日本政府の外國と從來長州の事を取捌べき事に不拘候事

元治元年八月十四日

松平大膳大夫

八月某日薩藩の使者橋原幸五郎幕府に對する同藩の建白書を携へ來りて我藩征長の意見を敵く

〔御國江戸往來狀扣〕

文久三年正月ヨリ
以別紙申達候(中略)

一 長崎御奉行様に被差出候御書付寫並御奉行様御答書寫一通(八月十日及同十二日の條を參照せよ)且又薩州御内使者橋原幸五郎持參之御建白寫一冊並右御使者に御答口上振大意書取一通差遣申候(中略)

右之趣爲可申達如是御座候以上

御中
御家老

八月廿四日

蕪圖書殿
長岡衛門殿

〔全書、文久四年日記、尊攘錄諸家建白並御届書等、小倉一件〕

薩州御建白之寫橋原幸五郎持參

松平大膳大夫儀陪臣福原越後等自ら兵端を開き對 禁國發炮候條其罪不輕加之父子墨印之軍令條授國司信濃山軍謀顯然候旁防長ニ押寄連ニ追討可有之旨被仰渡趣奉畏候然處今般長州に異艦數艘襲來戰爭央ニ而長州敗走而已之由傳承仕

元治元年

三三一

候就而只今 御征伐之儀彼是之分ニおひて難安儀と奉存候右戦争之次第相分候ハ、自ら御然評之上至當之御處置可有御座候儀と奉存候得共何とも結局相付候上 御征討御相當と奉存候元來長州之逆罪不容易儀ニ候得共其罪ハ何ク迄茂被相糺度候處寬急其所を得名義判然之御處置專奉存候只今軍勢差出候様御達も有之候ハ、差扣置申度未曾有之事故不願恐此段一應言上仕候

薩州御使者に御返答

口上振大意書取

御建白之次第被成御承知長州夷船と戦争之事件之何を共相片付候上 御征伐之相當之儀ニ付其罪之何ク迄茂相糺寬急其處を得名義判然之御處置專奉と之御趣意之至極被成御同意夷船と戦争之末是彼之分理ニ無係收斂之弊ニ乘し候様之儀有之候而之武門之面目決而難相立御座候尤 此方様。に之小倉應援被爲蒙 仰候付而御間柄之事ニ茂有之旁既ニ同所ニ御人數茂被差出置候事ニ付万一長州より小倉に取懸候儀茂有之候ハ、應援之申迄茂無之其節之模様ニ應候而之惣督之命を不待直様長州に討入候事ニ茂至可申哉夫等之時宜ニ應候事ニ付豫如何様共難申述候(ハ小倉一事件に據る)

八月廿四日越前丸岡藩主有馬遠江守征長の命を蒙り江戸を發す

〔諸雜御留守居録上〕

長防御追討被仰付置候御在府之御方之内有馬遠江守様去廿四日御當地御出立之由右之外板倉攝津守様松平佐渡守様松平主計頭様御發足之御頃合相分不申候由ニ御座候

八月廿四日常州浪徒新治郡志筑領粟田村を襲ふ

〔風聞書〕

八月廿六日

御用番備前守殿に本堂内膳を差出候届書

私在所常州新治郡志筑陣屋領内共兼而御達之通手配申付置候處今廿四日朝五ツ時頃府中宿ニ集屯仕候浮浪共俄ニ他領染吉村に致放火所々々忽火煙立登火勢盛ニ相成候頃浪徒後詰之人數も押行候由凡貳百五十人程ニ而及亂暴尙私領分西米田村に向大砲數發打掛候ニ付同村に兼而屯集罷在候一隊之人數も早速大砲打掛二之手人數も差出置候間後詰致し及砲戰候處浮浪致取走候哉黑煙ニ紛悉く逃去候間午之刻過一ト先二之手人數引揚申候兼而出張之一隊之同所ニ相固め罷在候其後 公邊御人數多勢並鳥居丹波守人數も凡四百人程同所に出張御座候尤發炮中浪徒之内餘程怪我有之様子ニ御座候得共私人數之内怪我無御座候尙夫々嚴重手配申付候此段不取敢御届申上候以上

八月廿四日

在所日付

本堂内膳

八月廿五日本藩征長先鋒の命を受けたるを以て小倉應援の命は之を解かれたるものと解するこ
とを得べきかとの旨を幕府に稟申す

〔長防爲御征伐御進發一途、長防御追討一件、文久四年日記、小倉一件〕

今度防長御追討被仰出候ニ付小倉表援兵越中守に被仰付候間人數差出小笠原大膳大夫可申合旨先月廿八日於京都御達御座候處去十三日於御當地者下之關より之先鋒被仰付御奉書ヲ以被仰出且去廿二日御渡之御書付より者右御征伐ニ付口々討手之面々手配之儀於京都相達候趣も有之候得共攻口之割合出陣比合之儀都而於御當地被仰出候通可心得旨御達ニ相成候付而者越中守儀右先鋒被仰付候上之小倉表援兵之儀之御用捨と相心得宜有御座哉此段奉伺候以上

細川越中守家來

八月廿五日

澤村 脩 藏

元治元年

二二三

(即日指令)

伺之通相心得候様可仕候事

八月廿五日支藩細川行眞の使者熊本に來り藩主親く征長の軍に臨まば之に隸屬せんことを請ふ

〔御記 録、小倉一件、長防御追討一件〕

(廿五日熊本着)

口上覺

長防討手之儀ニ付而若自然太守様被遊御出馬候得者豊前守ニ茂御附添出馬仕度奉存候右ニ付而者公邊に茂兼而御願被爲成置被下候様奉願候此段參上仕申上候様申付候以上

八月

上羽又十郎

八月廿五日本藩江戸留守居澤村脩藏は過日外國奉行横濱に於て各國公使と應接せし狀況を報告す

〔諸雜御留守居録上〕

一左之通書上有之

各國軍艦去五日六日戦争之上長州より和談申出候由長海十二日出之新聞到來之趣ニ付同廿日御用御頼外國奉行支配御組頭宮田文吉様に相伺歸船別番之通御坐候其後御暇接も御坐候哉ニ付尙又今朝御城使里内官右衛門差出御内々相伺せ候處其後長州より之使ニ無之者候得共近日外國御奉行横濱に御出張各國ミンストルに御而命應接御坐候處ミンストル共申出候者長州と和談相察候而も同所軍艦人數引拂之儀者政府より御談判次第ニ而早速ニ引拂可申候得共追々御談判有之候横濱鎖港之儀逆茂可相整筋ニ無之此節能折柄ニ御坐候付逆茂難相整筋京都に被仰立可然既西國筋ニ

而高名之長州すら幾兩度之戦争ニ而和談申出候程之儀ニ候得之兼而獲夷鎖港御同意之御向も最早御故障ハ有御坐間敷乍然右之趣政府より御談判難相成儀ニ御坐候ハ、各國ミンストル京都に罷登り主上に直ニ御説得可仕尤一旦政府と和親取結候上者此後長州ニ而何程之談判有之候と茂決而取合申間敷因而彌長州御征伐ニ相成候上者長防二州ハ御料所ニ被成置右兩國之内一ヶ所開港ニ相成度尤近日惣督歸帆之上各國ミンストル同道より出府致右之趣ハ開老方へ御面會ニ而委細者可申上其節前件二ヶ條御決答承知罷歸候様致度旨申立候由去長州路軍艦人數共先引拂可申段者申出候由ミンストル出府之儀者御差支も右之御模様ニ付何ヶ開老方横濱に御出張之上御談判ニ可相成哉之趣御内話ニ相成候段申出候以上

八月廿五日

澤村脩藏

八月廿六日幕府は將軍進發につき沿道の警戒修繕等に關する注意を與へ且つ防長二州に武器米穀を移入するを禁ず

〔御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

水野和泉守殿御渡候御書付寫登通阿部豊後守殿御渡候御書付寫登通相達候間被得其意云々

八月廿六日

大目付

細川越中守殿

(外九名)

右留守居

(和泉守渡)

大目付に

元治元年

毛利大膳父子始爲御征伐御進發被遊候節御道筋東海道美濃路より大阪播州備州藝州路邊諸大名城々御旅館ニ被仰付候
管ニ候取締向之格別無益之取締等一切致間敷候道橋等茂難捨置場所所有之候ハ、手輕補理可致候

一松明草鞋箒木筵苦繩竹木明俵桶櫛之類并柄杓鋤鉾鋤鉈等之品々宿々ハ勿論最寄村々に兼而用意爲致置可申候
右之趣御料之御代官私領之領主地頭に不洩様可被相觸候

八月

(豊後守渡)

大 目 付に

毛利大膳父子叛逆ニ付近國之面々に追討被仰付候ニ付而ハ武器具外米穀等を始諸國より長防之兩國に輸入候儀不相成
候萬一海上陸路共運輸致候者有之候ハ、近隣國々ニおゐて急度差止尤時宜ニ寄討留候而も不苦候間其段相心得右運輸
之品々ハ差留メ候領主々々ニおゐて取上置其段可申聞候
右之趣向々に不洩様可被相觸候

八月

八月廿六日幕府三十二藩をして江戸附近を警衛せしむ

〔文久三年の元治元年迄
江戸返達御用狀扣〕

非常御警衛

神奈川宿

松平阿波守
間部安房守
内藤長壽麿

羽根田邊
川崎宿

松平能登守
牧野内膳正
本多豊後守

品川宿

奥平大膳大夫
松平山城守

東橋

片桐主膳正
津輕式部少輔

赤羽

伊達遠江守
伊達若狭守

中川口

岩城左京大夫
牧野錠吉

宮増道言坂邊より
駒場野代々木邊迄

稻葉右京亮
松平爲五郎

市川渡
下板橋

織田兵部少輔
安藤理三郎

新宿

松平佐渡守
松平伊豆守

飛鳥山邊

松平飛彈守
池田信濃守

永代橋

水野肥前守
内藤金一郎

千住

柳澤彰太郎
松平助十郎

新大橋

細川大和守
毛利伊勢守

右之通一昨廿六日被仰付候由ニ御座候事

酒井大學頭

佃島

堀田三四郎
井上筑後守

八月廿八日

兩國橋

八月廿六日加賀藩留守居は仙臺藩類役に對し其藩世子筑前守義に長兵暴舉の際託病逃避せし嫌
あるを以て藩主之に謹慎を命ぜし旨を通知す

〔風聞書〕

元治元年正月

松平陸奥守様

加州

御留守居中様

生駒權兵衛

以手紙致啓上候然者七月十九日長藩之者奉對禁闕不容易及舉動候節筑前守義一ト通病氣者乍申被引取候仕様被對朝廷暨公邊迷惑至極ニ付先不取敢筑前守逗留先に愼方之義中納言殿ヲ被申遣候ニ付愼中ニ者都而動向相扣被申候右爲御知申上候以上

八月廿六日

極新作我ものかへうた

若殿とおもへハかるき加賀の罪勅乃重き焼かふむりて京のさまきを知まふら進まぬ旅ひの跡や先キおる乃勘氣の身よしみて往くも歸へるもならぬ身はほんにつらひじやないかひふ

越前福井に滞居候趣

八月廿六日外國船十二艘横濱廻航の途大坂安治川沖に碇泊し翌日悉く退帆す

〔風聞書〕

元治元年正月

八月廿六日

目印山沖に異國船十二艘渡來候得共是者於是地別ニ子細も無之直ニ横濱表ニ廻船致し候事ニ付市中騒申間敷候旨組合町々に可申通事

子八月廿六日戌上刻

異國船安治川沖手に乗入碇泊致し候得共大坂最寄海岸者遠淺ニ而右休之船乗寄候儀難相成場所ニ有之自然絆を以乗入

候共御警衛方其外諸手當も有之其上差向子細等無之儀ニ付市中之者共驚騒申間敷候勿論畏ニ浮説等不申觸妻子并召仕之者共迄諸事心得違無之様得と申示別而火之元入念可申候

右船乗入候事寄商賣取引一同相滞候儀無之様致し諸色直段等引上候儀者不及申前後無辨米其外品々買立候儀決而致間敷候若又相背候もの相聞候ハ、召捕嚴重可申付候

一異國船碇泊場所に漁船或者沖合働之小船等ニ乗海岸附之場所を見物之船乗出し彼船に近寄候義堅不相成候間夫々所役人共より嚴重相制し可申候自然不相用見物船差出候者有之候ハ、留置可訴出候

八月廿六日

右之通大坂三郷町中端々迄并所々請負等ニ至迄も早々可申通候尤夫々所役人共も諸事心付厚世話可致旨能々可申間候事

一安治川沖手に異國船乗入碇泊致し候得共最早退船致候間此段安心渡世相營可申事

口達

最前相觸候安治川沖に碇泊致し候異船之儀今廿七日朝同所退帆最早帆影も不相見様相成候間一統致安心平日之通產業可相營候勿論諸船出入諸取引等彌以差滞義不可致候
右之通三郷町中并所々請負地端々迄も可相觸もの也

此度英國より幕府に差出候五箇條之寫

一幕府不征長我之

一何爲不開兵庫港

一備横濱及神奈川地爲英戰士屯場

元治元年

一傳聞幕府多攘夷詔何以不攘夷
一幕府何建私議拒市人之貿易乎

八月廿七日幕府閣老阿部正外明後日を以て江戸を發し上京すべき旨を達す

〔文久四年より慶應二年迄〕
〔御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

牧野備前守殿御渡候御覺書寫壹通相達候間被得其意御同列中不殘様無遲滯早々可有通達候答之儀者先々銘々よま不及
挨拶各よま土井出羽守方々可被中間候以上

八月廿七日

大目付

上杉 彈正大弼 殿

松平 大和守 殿

右留守居

覺

豊後守事來ル廿九日京都に發足致し候尤御軍艦操練所を御船拜借ニ而相越候間爲心復向々には可被達候事

八月

八月廿七日日本藩政府は征長從軍に關する支藩細川行眞の請願を納る

〔元治元年五月以後〕
〔御記 録、長防御追討一件、小倉一件〕

ツマニ 御家老衆

今度大守様長防御討手被爲蒙仰候付自然御出馬被遊候ハ、豊前守殿ニも御附添御出馬被在度段御申上有之達御聽候處

近々被遊御出馬管ニ付可被召連候間御用意ニ相成居候様尤右之段公邊に此節御願等之不被爲在其期ニ至御届被仰達管候事

八月二十七日

八月廿八日本藩小倉出兵の順序を變更す

〔小倉一件〕

堀丹右衛門に

覺

御備御人數繰出様之儀沼田勘解由之小倉爲援兵被差出置候内溝口藏人組共下着ハ、ムし候處豊前に參集之御沙汰有之依之當年一先藏人組共夫々有吉將監組共被差出管候處小倉表之儀差寄惣奉行之主宰無之候而之極々都合不宜旨申來候付前後振替將監組共引續藏人組共出張之順ニ被仰付旨猶被仰出候條奉得其意御同役には可有通達候以上

八月二十八日

別紙

小倉表に人數繰出之儀先溝口藏人組共引續其方組共繰出候管候處同所之儀差寄惣奉行之主宰無之候而之都合不宜段申來候付前後振替先其方組共出張申付候引續藏人組共繰出候間其通相心得候様

右之通御直ニ將監に被爲在御沙汰候事

八月廿八日本藩長岡護美上京中止の旨を布達す

〔文久元年ヨリ元治元年迄〕
〔觸狀 扣〕

覺

御奉行に

良之助殿御上京暫御延引被仰出置候處必多物切迫之御時躰ニ相成來月十日迄ニ御人數豊前ニ參集之御沙汰有之將軍様

元治元年

二三一

に茂御出馬之被遊御決定候程之御事ニ付此節之御上京者先御延引被仰出候尤追而之御模様ニ應し候而者御上京被仰付儀茂可被爲在との旨候此段爲被奉承知申達候條觸支配方に茂可被相知候以上

八月二十八日

八月廿八日本藩老職の分擔を定む

〔機密間日記〕

〔文久四年〕

覺

御小姓頭

御奉行に

御用人

一御備御手當筋之儀主ニ成申談

長岡 監物

有吉 將監

松野 瓦

一御側備之儀主ニ成申談

小笠原 美濃

平野 九郎右衛門

有吉市左衛門

平野 九郎右衛門

郡 夷 則

右之通常分被仰付候間左様可被相心得候以上

八月廿八日

〔全書〕

覺

御政道筋平日之不依何事席中一般ニ評議仕候儀ニ御座候處近日軍國之御手當至急之事柄而已一時ニ落集主立候者無御座候而之果敢々々敷決着ニ至兼候間科目を茂別紙之通被仰付候而之何程ニ可有御座哉尤科目外之面々茂心付候儀之無頓着申談候管御座候以上

八月廿八日

八月廿八日本藩は非常の時勢に付連枝一門日々花殿に出仕して政務を與るべき旨を達す

〔佐田文書〕

近來非常之時勢ニ付 思召を以澄之助殿 良之助殿 日々程ニ御花畑に御出此砌之御用向大小事とふく被成御聞御一門兼に茂同様出席有之候様被仰出候此段御組中に御知せ之事

八月廿八日

八月廿八日本藩政府は長柄の者長槍組百人を銃隊に編入することを達す

〔小倉一件〕

覺

市左衛門 殿

九郎右衛門 殿

夷 則 殿

御長柄之者共先年以來銃隊積古致し候付此節御出馬之節之先藝術出來合候者百人劍付雷火銃を以被 召仕候間此段被及御達御小姓頭に茂御知せ之事

八月廿八日

八月廿八日豊後森藩の使者熊本に來り尋て藩吏に會見して事變に際し援助を請はんと欲するの意を陳ふ

〔御在國日記〕

〔文久四年〕

元治元年

八月廿八日

一御客屋方御奉行方左之通

久留島伊豫守様方御使者淺川六郎助と申仁參着明日於御客屋口上取次之御手當被 仰付候此段爲御存申達候以上

八月廿八日

御用人衆中

猶々六郎助儀物頭役ニ而知行高百石上下拾壹人之由候以上

右之趣御側御取次を以御序之節達 尊聽候事

〔文久二年八月以來
一橋初來使一件〕

口上手扣

殘暑之砌御座候得共彌御堅達被成御座珍重御儀奉存候然者私領分御隣境之儀ニ付兼而蒙御懇意忝仕合奉存候近來者世上一統不穩時合罷成候ニ付若異變御坐候節は御助勢被成下度何分宜奉頼候此段以使者申上候將又時候御見舞之驗迄ニ國產曬葛一箱進上之仕候
右之段江戸表より申付越候

豎目錄ニ而

進上

曬葛 一箱

以上

久留島伊豫守使者

物頭役

淺川六郎助

〔翌晦日答書を與ふ〕

殘暑之砌彌御堅固珍重存候近來世上不穩時勢ニ付若異變之節は御助勢爲御頼預御使者入御念儀存候御隣境之儀何茂及御相談申ニ而可有御坐候將又時候爲御見舞御目錄之通被懸御意御厚情之至忝存候此段御答申述候

八月廿九日本藩淺井新九郎宮川小源太薩藩へ内使として派遣を命ぜらる

〔文久四年
機密間日記〕

淺井新九郎儀薩州に御内使者として被差越候條此段可被達候以上

八月廿九日

御裏方

御用人衆中

猶々勤筋之儀之御書方承合候様且又宮川小源太儀新九郎一同薩州に被差越候條此段可被達候以上

〔中略〕

淺井新九郎儀薩州に御内使者被仰付候付御物頭列之振合ニ而來月二日爰許被差立往來早打ニ而被差越候條此段可被達候以上

八月晦日

御裏方

御用人衆中

元治元年

奉行所

八月廿九日日本藩國友式右衛門等征長先鋒の命を辱めざらんが爲めに汽船を購入せられんことを藩政府に建議す

〔文久四年日記〕

(八月廿九日の座にあり)

覺

今度長州御征伐ニ付而下關口より之先鋒被爲蒙 仰候處差寄御人數渡海之儀御關船ニ而ハ何程ニ可有御座哉長州に茂兼而異船之備ニ海岸筋ニ之嚴重ニ臺場等を設有之候由ニ付和船ニ而乗付候儀者無覺東候處西洋船所持之諸藩之機を見變ニ應し最寄ノ、ニ乗渡り候節 此方様御人數而已渡海不仕候而者先鋒之名義ニも背候而已ならず 公邊に之 御奉公筋茂何程ニ可被爲有哉と奉恐入候次第ニ奉存候依之何卒於此許至急ニ洋船御買上ニ相成候様奉存候左候ハ、私共一列未タ航海術習熟も不仕候得共右船乗廻り御人數渡海之御用丈ケ位者ケ成ニ相動り可申奉存候間此節柄右等之御奉公を茂仕度志願ニ付此段不關御内意申上候以上

八月

國友式右衛門

牛島五一郎

小野敬藏

八月廿九日

右之通ニ付蒸氣船一艘爰元限御買上ケ之方ニ申談御國中向等自筆狀扣ニキ六有之候事

一前條蒸氣船御買上之儀代金調兼候内於長崎表御買上ニ相成筈ニ決議ニ相成候趣御國方申來候付旁爰元にて御買上之方ハ見合候段九月七日御國に申向候委細者御國狀扣ニ扣有之候事

八月廿九日征長軍軍監多賀靱負曲淵鑄市岩瀬内記等江戸を發す

〔長防御追討一件〕

八月廿九日長岡村上より 九月十七日夜着

一軍御目付左之御方々様今廿九日御當地御發足ニ付御歡御使者を以被仰進御餞別左之通被進候儀被仰付置候趣を以取計相濟申候

押懸 五掛

代金二千疋宛

御看一折

代金五百疋

多賀靱負様
曲淵鑄市様
敬太郎様御事
岩瀬内記様
御三方様御用人
金子三百疋宛 六人

〔京都返達御用狀扣〕

覺

一御發途御日限并御同勢員數之事

明廿八日御發途之思召候へ共時宜ニ寄明後日ニ可相成茂難計且御同勢ハ御三方ニ而五十五六人程ニ候事(中略)

御答

御陣羽織

五字八分ニ而

元治元年

右之下ニ御銘々御紋

多賀親負様 輪ふし壹つ片喰

曲淵鑄市様 丸ニ横木瓜

岩瀬内記様 丸ニ三本杉

右之通相伺候事

八月廿七日

御 留 守 居

八月晦日傳奏飛鳥井雅典野宮定功は防長追討督促の勅詔を京都守護職及び所司代に傳達す

〔長防御追討一件〕

九月十日 同廿八日着

村上より

御進發御催促之儀付而會津桑名兩藩士兩三日跡出府つたし右兩藩士は澤村修藏面會手ニ入候別番勅書寫御差上ニも可相成哉と差上申候兩藩士到着即日御城に罷上り昨日も出候由とふぞ急進御進發之期奉祈候事御座候以上

彌御清榮珍賀候抑防長追討總督尾張前大納言に申付候へ共今以御受無之哉ニ相聞候右様及延引候而ハ不都合且混雜之儀出來候も難計候間急進御受上京等無之儀ニ候ハ、先副將而已進發早追討可有之旨被仰出候付早々申入候猶被申談可然御勘考有之候様被存候依而如是候也

八月晦日

野 宮 中 納 言
飛 鳥 井 中 納 言

松平肥後守殿

松平越中守殿
稻葉美濃守殿

勅書寫

防長追討被 仰出候付大樹ニも進發可有之旨至當之儀 思召候途日支度有之儀進發とハ被 思召候得共自然及因循候而ハ人心ニも差障候間速ニ上阪有之候様被遊度被仰出候事

八月

八月晦日幕府は長人の長崎侵入を虞り五島飛驒守に命し福岡佐賀兩藩の應援として臨機其追捕に從はしむ

〔他所御往復〕

一筆啓上仕候今度毛利大膳叛逆付右一家之家來等萬一長崎表に不時侵入亂妨相働候節同所詰合之人數を以追捕候様松平美濃守殿松平肥前守殿に被 仰付候間私儀右應援相心得非常之節者速ニ致出勢追捕候様可致旨最長崎奉行可相談由昨卅日從牧野備前守殿被相達難有奉畏候此段爲可申上捧愚札候恐惶謹言

九月朔日

細越中守様

參人々御中

八月某日御所築地内外の守衛を諸侯に命ぜらる

〔風聞書〕

元治元年

五 島 飛 驒 守
盛徳判

八月

京都 御所御築地内外御守衛左之通
 同御門南角 尾張大納言殿
 同所 紀伊中納言殿
 同所 大久保加賀守
 朝平御門 藤堂和泉守
 猿ヶ辻 中川修理太夫
 南御門 渡邊飛彈守

〇〇下
 朝平御門
 寺町御門
 石藥師御門
 今出川御門
 乾御門
 中立賣御門
 蛤御門

水戸中納言殿
 井伊掃部頭
 細川越中守
 松平阿波守
 有馬中務大輔
 松平修理大夫
 松平筑前守
 松平肥前守

八月某日幕府は萬石以下隨從の士に對し征長期間扶持渡方及び行裝の心得を達す

〔長防御追討一件〕

一左之御觸書寫一通前條御飛脚ニ江戸より相達萬石以下に之御觸書御城より御城使持歸候

豊後守殿御渡

大目付に

毛利大膳父子始爲 御征伐 御進發被遊候付而者 御征討之日數素より難見定候得共大凡五六ヶ月程の見定を以御扶持方等可相渡候事

一甲冑持越之儀ハ可成丈手輕ニ致し從者之戎服之主人見込之品相用不苦事

一得物之儀之御行列ニ加り候節之可成丈相携其外之銘々相携候儀勝手次第之事

但從者同斷之事

一衣服之儀具足下着陣羽織裁附或之伊賀袴相用尤道中ハ割羽織取交不苦事

但新規相調候分ハ總而平日相用候節之陣笠相用候事

一徒若黨之衣類胴服裁附或之半天股引相用不苦事

一武具馬具虎皮相用候儀無用之事

一火事具禮服等之用意ニ不及事

一御道中雨天之節ハ桐油簀取交相用不苦事

但從者同斷之事

右之趣御供之面々に可被達候

八月

八月某日日本藩偵吏は長府藩士の上坂に關し大坂町奉行の報告書を得て之を提出す

〔尊攘録自筆狀〕

當八月二十六日夜五時頃長州阿彌陀寺と唱候同國渡海船壹艘安治川筋を漕登候付右川筋御軍艦奉行番所ニおいて右渡海船を引留船中相改候處左之通乘込罷在候

毛利左京亮家來

西 小豊後

同家老手付

梶山勘三郎

右小豊後家來

相川儀右衛門

福井男次イ

同愛兵衛之助

松海錢右衛門

中村金助

右左京亮家來

副使 江見小平太

右小平太家來

同手附

松浦和吉

山田茂一郎

太田房吉

右衛士家來

常七月下旬其筋に願濟之上歸國いたし候

田中喜十郎

右左京亮家來

肥後貞之助

京都屋敷留守居

岡野富三郎

村上衛士

伊三郎
下人登人

右之通乘組罷在候ニ付勝安房守組之者一ト通り相尋候處此度松平大膳大夫藩士共於京地暴發及亂妨候事件ニ付左京亮同所に歎願之筋有之同人申付を受同月八日國許出帆罷登候儀ニ而直様上京致度由申立候付猶船中相改候處具足櫃貳荷鎗登本有之候迄ニ而外ニ持乗せ候武器類ハ無之差而怪敷筋不相見候旨安房守在阪不致候付同人組之者より届出申候然處此節柄之儀ニ付右小豊後申立之通上京可爲致譯茂無御座儀と奉存候間左京亮當地藏屋敷内ニ爲差置候上愈以謹慎被仰付置候右屋敷詰同家來共身分其外取締心付として勤番申付置候松平隱岐守中川修理大夫當表藏屋敷詰家來を以猶巨細得斗爲承札候處小豊後儀上京之上別紙左京亮より之願書並小豊後演舌等所司代に差出度由申立右夫々書付寫又ハ村上衛士より奉行所に之申立書登通差出申候付右ハ何れニも御沙汰之上ニ而無之候而者上京難相成儀と奉存候間其段小豊後に申聞同人其外之者共一同右屋敷ニ爲相慎置申候間此上取計之儀可然様御沙汰被下候様仕度奉存候依之右夫々差出申候書付三通相添此段申上候以上

子八月

松平大隅守

左京亮歎願書寫

浪士鎮靜攘夷歎願として本家松平大膳大夫家來之者爲罷登候處去月十八日夜 禁闕近及騷擾候由於私毛頭不存寄事柄

ニ付一入苦心罷在候處京師留守居役之者罷下巨細之儀申出承知仕實以不奉憚 朝廷絶言語候次第深奉恐駭候ニ付謹愼罷在申候勿論大膳大夫父子ニおひて聊別意無御座候處家老益田右衛門介福原越後國司信濃等大膳大夫宿志ニ違背候脱藩之者へ被誘及暴動候付右三人とも毛利淡路守に預置何分之御差圖相待候由就而ハ大膳大夫父子共深恐入憤罷在候間何卒右邊之趣篤被聞召分被下候様伏而奉歎願候以上

毛利左京亮

西小豊後演舌書之寫

尊王攘夷之儀於左京亮覺悟罷在候之先年來本家松平大膳大夫父子公武御和順醜夷掃攘皇國永久之御處置相貫候様頻ニ東西ニ奔走仕候處左京亮儀其頃宿疾相發臥床ニ罷在候へ共神州之御大事傍觀之容ニ相當本家ニ之信義も不相立次第ニ付強而出病床去年十二月廿二日在所出帆翌正月二日京着仕候攘夷御國是成功相立候様本家之一臂を助盡力罷在候折柄天幕より本家に御沙汰有之候ハ五月十日攘夷期限と被仰出候付左京亮領分ハ中西國之要地ニ而守備等閑ニ難仕候間御暇奉願三月六日歸國當日より攘夷手當之外無他念既ニ去年五月十日後數度之戰爭ニ及候付而者恐多度監察使御下向愼感不測之御旨奉蒙過分之御沙汰候次第攘夷之即公武之御本旨と此ニ一圖ニ奉存彌感奮微力之領分ニ之候へ共上下一致之膏脂を盡し器械炮臺等假成相調天恩萬分之一ニ奉報度存意罷在候處不斗夜昨八月十八日京師變動以來本家父子並家老迄茂入京被差留候仕合ニ付奉 勅始末其外數通之歎願書差出候得共爲何御沙汰茂無之於左京亮茂一入苦身罷在候然處攘夷之儀之幕府に御委任相成候付以來之關東之御差圖ニ可任段御沙汰之旨奉長候尤於左京亮之萬事本家方伺取を以差圖仕候事ニ付本家より申達候儀ハ即天幕之御趣意と而已奉存居候處前件之仕合ニ付先達而主人を以關東に歎願書差出申候勿論於本家之不堪痛哭悲泣長門守儀攘夷爲歎願上國可仕由猶爲浪士鎮靜長臣一兩輩爲差登候段之承知仕候然處去月十八日於闕下暴動之振舞仕候儀之毛頭不存寄儀にて恐縮無此上奉存候是全本家々來之者如何ふる心得違方右様暴戾之振舞ニ及候哉實ニ不奉憚 朝廷言語同斷之仕合奉存候元來於本家父子之尊攘之外無他念事偏ニ神州之御恥辱外夷

元治元年

二四三

猖蹶之振舞有之候を嗟嘆仕候のミニ御座候處家來之者共旨趣ニ相背及暴動候終ニ木家父子之名議ニ茂相拘り候様可立至歟と於左京亮只管悲歎罷在候何とそ此等之心事御賢察被成下宜様御執成伏而奉願上候以上

毛利左京亮内

西 小 豊 後

京地變動之儀ニ付先達而伺濟ニ而一先罷下左京亮に巨細之繩申向候處實以恐縮之至奉存候付恐ふら不取敢御敷申上候儀御坐候間家老西小豊後副使江見小平太申者差登せ昨廿六日私一同着坂仕候付此段申上候間何卒此者共儀茂上京被仰付歎願之趣御聞届被成下候ハ、於左京亮茂無此上難有仕合可奉存候此段伏而奉願上候以上

毛利左京亮京地留守居

村 上 衛 士

八月廿七日

九月朔日幕府參勤交替嫡子室家在府の舊制に復す

〔御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

文久四年より慶應二年迄

猶以 御嫡子様御妻子様方御呼寄御比合之儀彈正大弼左兵衛督居殘御老中様方に被相伺候處御遠國之勿論其外共ニ無御據御都合有之 御方様之 御進發後ニ相成候共不苦就中此度 御征伐被 仰出御出張之 御方々様之御急務之御事故御成功之上被御呼寄候而茂不苦趣無急度御噂有之候間此段も致通達候様被申付候以上
以廻狀致啓上候然之今日彈正大弼左兵衛督被致登城候處御禮後居殘候様大御目付土井出羽守様御達ニ付被居殘候處於御白書院御縁頼林御老中様方御列座諷訪因幡守様御書付貳通御渡ニ付右寫并大御目付神保佐渡守様御渡之御覺書寫壹通各様迄致通達候様被申付廻狀致通相認持廻り申付候御請之儀之御先格之通御取計可被成儀と存候以上

松平左兵衛督内

九月朔日

上杉彈正大弼内

酒 井 清 兵 衛
增 尾 新 兵 衛
高 津 隼 人
木 滑 要 人

御次第不同

細川 越 中 守 様

御留守居中様

松平 越 前 守 様

御留守居中様

松平 備 前 守 様

御留守居中様

龜井 隱 岐 守 様

御留守居中様

溝口 主 膳 正 様

御留守居中様

万石以上之面々并交替寄合嫡子在國在邑且妻子國邑に引取候共可爲勝手次第旨去々戌年被仰出銘々國邑に引取候面々茂有之候處此度御進發茂被遊候付而ハ深き思食茂被爲在候ニ付前々之通相心得當地に呼寄候様可致旨被仰出候万石以上之面々并交替寄合參勤之割御猶豫被成下候旨去々戌年被仰出候處深き思食茂被爲在候ニ付而後者前々御定之

元 治 元 年

割合ニ相心得參勤交代可有之旨被仰出候

覺

今度諸大名參勤之割前々之通ニ被仰出候付而者當時在國在邑之面々之内當年參勤年之分者早々參府候様可被致候

〔全書〕

以廻狀致啓上候然之去ル朔日於 御城御渡御座候 御嫡子様 御妻子様御當地に御呼寄之儀御達御書付之内御隠居様之儀不相見候ニ付右之如何相心得可然哉之旨水野和泉守様は彈正大弼左兵衛督より御問合被致候處前々之通相心得隠居之儀茂妻子同様呼寄候様御差圖ニ付右之趣爲御心得無急度御通達致候様被申付候依之廻狀數通相認持廻り申付候以上

松平左兵衛督内

九月七日

上杉彈正大弼内

酒	井	清	兵	衛
增	尾	新	兵	衛
高	津	隼	人	
木	滑	要	人	

御次第不同

細川 越 中 守 様

(外四名)
御留守居中様

〔自筆御用狀扣〕

文久二年慶應元年迄
以別紙啓上仕候參勤交代之儀向後者前々御定之割合ニ相心得候様且嫡子妻子國邑に引取候面々茂有之候處前々之通相

心得當地に呼寄候様可致旨去ル朔日御觸達之趣他筆御用狀之通ニ而此御如何之御見識ニ而右之通候哉一回解策申事ニ御座候然處參勤等御弛付而者當春別段留賞茂被爲在候程之事ニ御座候處此節之儀京都御伺濟之上御取起と申譯共相聞不申候へハ差寄京都に之御不都合諸藩之困窮ハ勿論之事ニ而一統彌以不平を増し候者必然ニ而騒亂不待時を形勢ニ成行申候殊近來閣老初一切言路相塞り候付假令諸藩より如何建白等有之候而茂御採用ニ相成譯と茂相聞不申候間外様之諸侯方ハ一刻も割據之覺悟可致之外ハ有之間敷哉と奉存候右之通ニ付御國之儀も得斗御評議之上是迄之御國議筋者御疊置ニ相成別途ニ御國是相立申儀敷と恐考仕候扱々傷思なる事に成行歎息之至ニ御座候

一細川若狹守殿を以松前伊豆守様御手前別紙稜書を以内々御問合之儀相願置申候處態々彼御屋敷に御出御打合ニ相成候處御内答之趣朱書之通ニて何分被打明候而之御答振とハ相聞不申尤夷人共長州領海に滯船之一條之全公義を重し候而之事之由ニ候へ者最前長州行之夷船御差留杯之事も何程ニ可有之哉内實ハ夷人御相談合之様ニも相響若左様之事ニ茂候ハ、沙汰之限ニ而御座候

一森井惣四郎聞取書別紙進達仕候右書面之通候得者尾張老公之御請も未曉と無之何程之都合ニ候哉且御目付石野民部殿内話之趣ニ候へハ此節之御觸達吹出迄ハ御承知も無之程之事ニ御座候へ者帷幕中も區々相見猶及惑亂可申且又御進發之儀も何程ニ可有之哉此許當時之模様ニ而者長州攻寄等今程之事とハ相考不被申候得共去り迎討手之諸藩ハ左迄緩り構も六ヶ敷只々東西之奔走ニ疲弊を相増申計ニ而埒も無キ次第ニ御座候
右之趣爲可貴意如是御座候以上

九月七日

藪 圖 書
平野九郎右衛門

御 家 老 殿
御 中 老 殿

元 治 元 年

二四七

〔全書〕

以別紙啓上仕候細川若狹守殿頃日松前伊豆守様は御出之處今度諸家奥方等前々之通江戸御住居被仰出候付而ハ此方様ハ從公邊分而御頼被思召候譯茂有之候間御婦人様方成丈早く御參府被爲在候様若狹守殿御周旋被有度旨御沙汰之由御傳達御座候付右之趣御國許に可申上段御請上之事ニ御座候然處非常之世上ニ相成只今御參府杯とハ誠存懸も無之事ニ付先暫御見合ニ相成居中候ハ、追而ハ一統之模様茂可有之其上ニ而御參談之筋も可被爲在と奉存候此節之儀伊豆守様御主張ニ而御取起之唱も有之一統之風説茂不宜様子ニ付追而ハ御退役も可有之哉何分此儘にてハ將軍家御永續之程無覺束奉恐入候事ニ御座候此段爲可得貴慮如是御座候以上

九月七日

藪 圖 書
平野九郎右衛門

御 家 老 殿
御 中 老 殿

九月朔日本藩政府は征長軍議に關し藩士の意見を徴す〔小倉一件〕

覺 堀丹右衛門に

防長御追討被爲蒙 仰不違被遊御出馬候程之御事ニ而軍議付而心付候儀各者勿論御番頭中聊不殘心底申出候様尤其餘組方之面々者頭々迄申出候様ニと 被仰出候條御同役に通達組々には可被申聞候以上

九月朔日

右書付月番御備頭御呼出被相渡組持銘々被受取八代にも寫遣候事

九月朔日本藩政府は征長從軍者の跡目相續に關する令を出す

〔御書附并御觸達等之扣〕

今度出張之内男子無之面々假養子之手數ニ不及萬一之節者組頭等申立次第跡目者無子細被仰付候條左様御心得御同役に御通達御組々に茂早々可被成御達旨以上

九月朔日

御 奉 行 中

御 備 頭 宛

九月朔日藩主慶順奇兵として小倉に出向すべき備頭有吉將監以下の將士を獎勵す

〔御在國日記〕

九月朔日

- 一有吉將監殿手ニ而小倉に被差越候御備組之面々附屬之御役共今日四時揃ニ而御目見被仰付御酒を茂被頂戴候次第左之通(但書略す)
- 一將監殿於陽春御間被召出御意被成下退去之節九曜之御間御入側ニ座着之上土器三方等持出御酒頂戴有之諸事先月十四日沼田勘解由方頂戴之節之通候事
- 一右將監殿引續松井直記無役着坐松野八郎右衛門御番頭陽春御間に召出御意被成下候事
- 一右相濟士席以上御目見被仰付候付何れ茂平服九曜之御間中柱之御間に並居候上歌仙之御間に御出座御目見被遊御受御意被成下被遊御入候事

元 治 元 年

〔本朱書〕本文將監殿以下に之御意振先月十四日之座ニ記有之通候事

〔中略〕

一將監殿手小倉表に被差越候人數御奉行より申來候趣左之通

松野八郎左衛門

松井貞記

一御物頭六人

一大組附四人

一御番方組脇二人

一御番方四拾人

一御使番一人

一炮術師役貳人

一平野新四郎門弟

内 拾人

士席

内 四拾八人

輕輩

一内尾直兵衛門弟

内 拾人

士席

内 貳拾四人

輕輩

一御目附助勤一人

一御勘定頭一人

一御勘定所根取一人

一同所物書五人

一御勝手方附所々御横目三人

一兵糧受拂役二人

一金銀錢宰料御掃除頭支配之者五人

一御醫師二人

一御馬醫一人

九月朔日本藩備頭有吉將監等の出發を延期す

一御歩使番并助勤四人

一步御小姓代貝太鼓役五人

一陣場奉行一人

一御作事所根取一人

一同所物書一人

一同御役人一人

一御大工四人

一地筒三十人

一御武器支配一人

一御鉄炮支配一人

一御細工人五人

一同無苗之者四人

一御天守方手傳役拾人

一御手木之者五人

一御昇之者六人

一一領一疋三拾九人

一御番方子弟三拾七人

一御物頭子弟五人

一大組附三人

一外様足輕八拾八人

合三百七拾六人

以上

八月

〔小倉一件〕

覺

將監殿

貴殿并御組附屬之御役々明後三日より小倉表に出張之管候處宿所等急ニ整兼候段注進有之候付明後日之出立者先被差延來ル九日に出張被仰付旨被仰出候間共通御心得之事

九月朔日

九月二日尾張慶勝征長總督の命を拜す

〔江戸返達御用狀扣〕

九月四日御城使御城ニ而探索之趣左之通

尾州前大納言様に長防御征伐之惣督被仰遣置候處御請之御使者御家老瀧川又左衛門去ル二日着府仕先一應之御請被仰上候由尤御惣督之儀大諸侯之分御指揮被成事ニ付不容易御大任ニ有之因而廉々御伺筋御座候由右御伺之御差圖振次第彌々御請之被仰上候筈之由尾州様御城附より御座候由御坊主より申聞候段申出候

九月四日

澤村脩藏

付札 本文御伺筋段々探索仕候得共分兼候ニ付御城附ハ里内官右衛門懇意ニ付罷越内々承合候得共重御事柄御城附も承込居不申段噲仕何分相分兼申候

九月三日日本藩政府は浅井新九郎を薩藩に遣し前月同藩が特使を派して交渉せし厚意に答ふ

〔御記録〕

〔元治元年五月以後〕

御書方

元治元年

御用 人 衆 中

奉行 所

淺井新九郎儀薩州に御内使者として被差越旨及達候條此段御右筆頭に可被相知候以上

八月廿九日

〔全書、尊攘錄諸家建白並御届書等〕

薩州に申述之大趣意書取 此書取薩州へ之御内使者淺井新九郎儀薩州に御内使者として被差越旨及達候條此段御右筆頭に可被相知候以上

一良之助様御上京之御知せ最前御内使者被進候處段々御可嘆之被仰付忝思召候其後猶又事體打替長州御出勢之方ニ專御助力被成候付右御出京ハ暫御見合有之追而之御模様次第ニは何時にも御發足之筈候段一ト通

一長州御追討寛急之御處置筋付而ハ公邊に御獻言之御寫御内使者橋原幸五郎殿を以被差越委細御懇念之御口上共被成御承知至極御同意之段ハ其節御返答有之且越中守様には小倉應援之御沙汰有之右に付而は御人數ハ一ト御備被差出候儀も一ト通被仰進候處夷船之方ハ和議相整追々致退帆候様子ニ而諸家人數揃之期限も被仰出候付追々猶御備手出張被仰付筈ニ付此段不惡御聞置有御坐度尤越中守様御出馬之比合等之儀は御總督に御窺之上追而之模様ニ被應候との趣一修理大夫様は茂討手之命を被爲蒙仰候付而ハ御人數御繰出且御出馬も被爲在候ハ、其御比合海陸之御運等何程之御都合ニ可有御座哉扱又此後之御處置成行之御見頁も別段御懇交之御間柄無伏藏至密御内教被下との趣

九月三日日本藩探索森井惣四郎は當時閣老の人物觀を我在府當局に報告す

〔探 索 書〕

元治元年より
〔三日桑名藩高野一郎左衛門幕府目付石野民部に就きて問答の内なり起筆
〔二人同人とあるは高野を指す森井惣四郎は高野よりの直話を筆記せしなり〕
〔九月三日森井惣四郎問取書の内〕

一同人々言路之塞り候を伺候處閣老よてハ水野侯ハ随分物之見渡も付き話も出来候得共言路を塞きニ相成候を牧野閣老諏訪因州主張ニ相成尤諏訪侯ハ其魁たる人ニて御目付者平生閣老に何事も相談仕候ハ當然之儀ニ御座候處諏訪侯之説よてハ御目付ハ惣參政之支配ニ候得之直ニ閣老に議論を致も差越ニ相成候とて良もをハ辭之誤杯を尤べらる頓斗熱談等ハ出来不申近來之閣老之權威之落候を強而俄ニ振ハんと被致閣老中よても彌尊大ニ被構候山ニて一刻も如此人ハ退役ふくしてハ御政事一和不仕候と嘆息被致候由

九月五日幕府は長崎に四ヶ所の關門を設け出入を監視する旨を達す

〔文久四年慶應二年迄
御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

諏訪因幡守殿御渡候御書付寫一通相達候間被得其意無遐滯順達從留駒井相模守方に可被相返候以上

九月五日

大 目 付

細川 越 中

守殿
(外九名)
右留守居

大 目 付に

此度長崎表出入之口々日見西山浦上茂木四ヶ所に新關取建候ニ付而ハ諸家々來所用ニ而通行候之勿論假令主人用向たりとも兼而主人又之其役方之者より長崎奉行所に判鑑差出置右に可引合判鑑持參不致者之右關所おるて出入共差留候筈ニ候且百姓町人職人之類商賣又之稼之たえ或之所用有之通行者ハ其所村役人町役人之印紙持參入出可致旨御料之御代官私領之領主地頭より不洩様可被相觸候
右之趣向々に可被相觸候

九月

元 治 元 年

九月五日大坂城代松平伊豆守は同町奉行松平大隅守に對し長藩末家毛利左京亮の歎願書を却下すべき旨を達す

〔尊攘録自筆狀〕

九月五日伊豆守殿御渡書寫

去月廿六日毛利左京亮家來西小豊後其外之者共登京歎願之筋有之趣ニ而當地通行此節柄之儀上京差留當地藏屋敷ニ差扣爲愼置取計方之儀御自分被相伺候趣別紙共松平越中守殿に申遣候處已ニ追討被仰出茂有之候處假令如何様歎願筋有之とも決而御取揚可相成儀無之況哉末家之身分として差付家來登京申付候條至極不都合之事共候條早々書面差返し爲致歸國可申條御自分に可相達旨越中守に申來候間此段御達可有之候

子九月

松平 隱岐守
中川 修理大夫家來

去月廿六日毛利左京亮家來西小豊後其外之者共登京歎願之筋有之趣ニ而當地通行此節柄之儀上京差留京地藏屋敷に差扣爲愼置取計方之儀其筋に相伺候處已ニ追討被仰出茂有之候處假令如何様之歎願筋有之候共決而御取揚可相成儀ニ無之況末家之身分として差付家來登京申付候條至極不都合之事共候間早々書面差返し爲致歸國可申旨松平越中守殿より被仰越候由松平伊豆守殿被仰達候付此段西小豊後其外之者共に右書面差戻相成候事

九月五日英佛米蘭四國公使本日より相次て品海に入り開港に關する幕府の決答を迫る

〔文久二年三月以來 探案書〕

九月廿四日相達

外表之模様先月廿五日外國方宮田文吉様を御内話之趣申上候末猶探索として今朝御城使里内官右衛門差出相伺せ候處左之通

先達而申立候鎖港御談判迎も難相整趣京都に 被仰立其儀難相整候ハ、各國ミニストル上京之上主上に直ニ御説得可致哉長防二州御征伐之上壹ヶ所開港之儀御決答伺として出府之儀申出居候處多分閣老方參政之内横濱に御出張ニも可相成哉之處出府之方ニ御治定ニ相成彌英佛亞蘭ミニストル出府被仰付既昨夕品川沖に軍艦貳艘着艦猶今朝迄ニ跡艦貳三艘着之筈ニ而着揃之上牧野備前守様宅ニ而右四ヶ國ミニストル應接有之筈乍去迎も御即答ニ相成間舖候付當分品川沖に滯船可致惣人數まると不相分候得共餘程多數出府之趣尤和蘭之外之寺院に止宿不致軍艦に罷在候旨申出候山右四ヶ國出府之上士官之分ハ三方に分レ遊歩可致趣も申出候由依之今日途中爲警衛騎兵百騎被指出候由御座候

一長州路を其後之模様外國を之駁し不申出候由ニ御座候得共長州家父子も夷人面會ニ相成候模様ニ相聞此以後長州船路通艦無差支且昨年來不法之一條ニ付而之價金も可差出尤此員數之政府に御談判之上取究可申との趣長州を返答有之候趣相聞申候との趣ニ御座候

右之通御内話御座候段申出候ニ付此段申上候以上

九月六日

澤村 修藏

〔諸雜御留守居録上〕

一左之書付九月九日被差出

英佛亞蘭四ヶ國ミニストル爲照接六日七日兩日牧野備前守様御宅に罷出候付右應接御模様御探索御用頼外國奉行御支配組所宮田文吉様に里内官右衛門昨夕罷出相伺候處去ル六日右四ヶ國ミニストル都合夷人拾人罷出彼方申出候ニ之長州を價金可被指出旨申聞候右之金子ハ長州を可受取哉政府を御指出ニ被相成哉と申候ニ付御答ニ兼而増致し置候通長防征伐可致ニ付金子政府を可相渡候猶夷人共々申候ニ之下之關開港ニ可相成哉御答ニ何を征伐之上ハ開港可致候夷

元 治 元 年

二五五

人々申候ニハ彌々御座候哉御答に彌之儀ハ京師に奏聞之上ならてハ彌々ハ難申夷人申候ニ之元來各國と約條爲取替委細之儀是迄京師に奏聞無之儀と存候付人心不居合と存候間此節委細奏聞ニ相成候ハ、彌開國ニ治定可致左候へハ下之關開港之儀も尤御治定ニ可相成と申候御答右之趣此節豊後守上京ニ而委細奏聞致し候付同人歸府之上ならてハ決答雖相成長州海軍艦ハ早々引拂相成度候夷人申候ニ之金子政府ハ御渡ニ相成候段書翰申受度旨申候尤明日一同罷出可申候間其節右書翰受取へき旨ニ而引取申候一昨七日二國充刻限違ニ罷出候へ共矢張四ヶ國一同ニ相成夷人都合三拾二人罷出其節前條書翰御渡ニ相成候尤員數ハ未タ取極り不申候由其切夷人申候之彌下ノ關開港ニ相成候ハ、償金受取不申候而茂宜旨申候依之出府之夷人一ト先不殘横濱に引取申候答ニ而引取候由尤各國軍艦都合十艘品川沖に參居る處多分昨日中ニ之横濱に引取申候

長州海之方も早々引取申へく旨ニ御座候右御用ニも可有御座哉御目付塚原但馬守様上京被 仰付今朝亞國蒸氣船に乗組ニ而上京ニ相成申候豊後守様にも此日頃迄ニ之御歸府ニ可相成御模様之由各國軍艦御決答無之内ハ品川沖引取申間敷被存候處存外右之趣承伏ニ而一旦引取申候段御内話ニ相成候趣申出候以上

九月九日

澤 村 修 藏

〔佐田文書〕

元治元年

甲子九月七日閣老牧野侯宅に各國士官以上四十人計罷出御馳走等有之其内雜話有之候を其席ニ列し居候英學家通辯福澤諭吉ハ國友式右衛門承候趣書綴り申越候書附之寫 佐田

一去ル五日之夕ハ翌六日之朝迄ニ英佛蘭墨之軍艦都合十三艘品川臺場前ニ乗入碇泊ハムし軍艦ニ付毎日の商船ト違ひ碇泊も列ヲ正シ各船備ヲ立テ居申候

一同七日御老中牧野様ニ而應接御禮應も有之候由各國ミンストル及初士官以上都合四十人計り罷出一躰打解たる様子ニ

而久敷く閣老方へ懸御日不申候間御ふつかしニ罷出差而用事連も無之段申出候付此方かも相當の挨拶ニ而種々御馳走共出候由其内の雜話ニ異人ハ是迄日本事情如何哉ト有様疑居候得共此節長州之様子ニ而頓斗疑念ハ氷解いたし候然處京都帝王ハ頻々鎖港之事申出ニ相成候由ニ候得共夫ハ世界の形勢及不被知食候間御尤之事ニハ候得共京都ハ御申出ニ付而謀反の徒夫ヲ主張して日本中ノ動亂とも相成候事ニ付其處ハ江戸ハ能々 帝王の御得心ニ相成候様御申論し無之ハ江戸の旨も未タ御手の詰らざるニ可有之候間尙精々御諫争ニ相成候様

一長州之方ハ去年暴發之遺恨ハ此節相晴し候得ハ向後ハ各國ハ決而手差候儀無之此後尙臺場等築不申たニ于今一二艘ハ彼地に留置申候間是ハ者長州之事ハ政府の御處置次第是ハ内輪之御政躰ニ付御潰しニ成も不成も各國ハ少しも構ふ事ニ無之候併し下ノ關ハ能々港ニ付兵庫かも彼地開港ニ相成度日本外國双方之便利ニ可有之各國ト御交リニ相成候からハ外國人の便利の御仕法ハ被付下候様有御座度杯咄候よし

一長州償金者長州ハ可遣段申出ニ相成居候間彼方直ニ受取可申哉ト申出候處閣老方之答ニ長州ハ御征伐ニ相成候間彼方直ニ受取方ハ見合候様公邊方御出方ニ可相成との返答のよし

一江戸内諸浪人狩り並筑波一撥退治之事杯咄ニ相成候處異人共大ニ歡の色顔色ニあらまを候よし
一昨日も御小屋窓下及異人五六人騎馬ニ而通り大名小路を南へかけを追イ參り候由西御門番嘶ニ御座候其外日々數人打連江戸内所々遊行いたし候由

右閣老ニ而應接之事ハ世上ニハ路ノ、取沙汰も有之候得共右錄上仕候其席ニ列し通辯英學家福澤諭吉の内話ニ御座候以上

元治元年甲子九月九日記

前條軍艦も今日日ニハ横濱に歸港いふし候由ニ御座候事

國友式右衛門 當時江戸御
小屋ニ居候

九月六日藩主慶順出馬の際は長岡護久は名代として國に留り長岡護美は從軍すべき旨を達す

〔小倉一件〕

御二方様に被仰付振

今度太守様御出馬ニ付澄之助様御事御名代として御留守ニ御殘被爲置諸事被遊御委任良之助様に之御一同御出張被仰付旨被仰出候事

九月六日

九月六日日本藩長谷川仁右衛門將軍防長親征に關する藩主慶順の建白書を携へて熊本を發す

〔長防爲御征伐御進發一途〕

九月廿二日

一長谷川仁右衛門備當時無役霜座

太守様御建白之御封書持參去ル六日御國元被差立同三日京地に着云々

〔内密公武に御建白一件〕

元治元年九月五日

一左之御建白草稿御家老衆より御用人に被相渡於御書方清書出來猶御用人に相違候御使者長谷川仁右衛門副使山縣典次郎被 仰付即夜被差立候由 御別紙ともニ一ツニ御書封紙ニ而封如左

細川越中守

封

〔内密公武に御建白一件、文久四年日記、尊攘錄諸家建白並御届書等〕

今度於 國下長州狼藉之次第一統憤怒いたし候程之事ニ付幕府之御煩悶如何可被爲在哉近年 神州之御氣運日を遂及衰頹候處より如是變動致出來候處御所置斷然と有之候ハ、右之變動却而中興 御開業之御根軸ニ茂相成可申天下目を刮而奉窺候折柄御征討 御進發之被 仰出之有之候得とも御期限茂今以相分不申惣督副帥之命茂被下候得共追々致變更其餘列藩人數練出等之儀茂前後之 御沙汰首尾不仕彼是御内輪之儀 御不整之由唱候者茂有之軍旅之樞要之人氣之奮立第一ニ而遠國邊土ニ至候而之猶更右様之唱承り疑懼を生し候之必然之勢ニ而其内ニハ兩端を持候向茂難計即今之形勢にてさへ甚以無心元往々如何成行可申哉實ニ家勞ニ堪不申重疊思惟仕候處差寄惣督之方種々之差障茂有之候ハ、乍恐 將軍様藝州あたり迄急速ニ 御進發山陰山陽四國九州之諸侯伯 御自身ニ御指揮被爲在四道一部々々之統帥を被立其向より得斗及談合大概一同ニ打入候都合ニハハし一刻茂 御成功を被遂候と申。覺悟相立其儘實地ニ被遊御乘出候ハ、末々迄茂人氣一時ニ振立ムとへ不良之心を抱候向茂自然と無二之忠良を盡候様相成可申左候へ之 皇國之治安ニ赴候茂生靈之塗炭ニ落入候茂其大機關ハ今日之御一舉ニ可有御座無此上大切至極之御時節柄ニ候處是迄之有姿ニ而者中興之 御開運之見込無御座末之列國割據之勢ニ變化茂難量誠切迫之御處置片時茂御遲延御座候場合ニ無之晝夜寐食を安不申候ニ付不願萬死言上仕候誠恐誠惶頓首謹白

九月

細川 越中 守

元治元年

二五九

別ニ此書付御添可被爲在哉

外夷四ヶ國之軍艦馬關ニ驅入いたし先月初々度々戦争長州勝利を失ひ其後和義相整追々退帆いたし候由候得共今以二三艘之碇泊罷在候様子ニ致承知候然處外國と相應且其收帳ニ乘し 御自國之御征討有之形ニ相成候而之天下之義膽ニ差障候間相殘軍艦も速ニ致退帆候様御所置被爲在度奉存候已上

九月

九月六日本藩有吉將監の小倉出陣を延期す

〔小倉一件〕

將監殿

來ル十日限豊前國參集之儀御取消ニ相成出張日限者御惣督尾張前大納言様に御伺可有之旨京都江戸方御沙汰有之候付貴殿組共出立之儀暫被差延旨被仰出候尤右期限何時申來候茂難計候間用意筋之儀者聊無油斷相心得候様御組中に茂精々御示可被置候事

九月六日

本文通ニ付將監殿組中且御使番に之將監殿を知らせニ相成御奉行附屬且大筒手に之御手當方一刻茂知せニ相成候様被仰聞人夫茂遠在方出候由ニ付御郡方に茂至急ニ知せ候事

九月六日本藩備頭沼田勘解由小倉より特使を發し九州征長軍總師任命の周旋に關し小倉藩より頼談ありしことを藩政府に報告す

〔小倉一件〕

小倉詰御使番志方司馬助往來早打ニ而罷越差出候間取書左之通

小倉様方御相談之趣意付而沼田方口達之聞取書

今度長州御征伐付而者列藩嚴命を奉し競懸候儀ニ付惣軍之大都督無之候而者難叶因而山陽道より尾州老公爲元帥御進發然ニ此地未々軍監之御沙汰無之何様九州者大藩之牧伯數多御三家又者關老之中可然御方下向無之候而者抑揚進退無覺末既今般肥筑之二國者元帥轉變ニ付而尙又御誅伐之期限爲伺公武に使者差立兎角參集期會不同肥州之當月四日國許操出ニ相成候筈之人數茂先ツ出程抑留畢竟者惣帥之無之故歟と小倉方頻ニ悶頭曰此期を不迦至急ニ 公武に周旋右主宰發向乞受候覺悟ニ而別段大夫之中を京師に差越候方ニ治定仕候間 此方様ニ之万端御依頼之御間柄ニ付可然御重役之中を以諸共 公武へ御盡力被下候様ニと本陳へ相談ニ成候處沼田方初同意之筋ニ付一刻茂私を以奉親 尊慮候間御謙談御差圖を奉願候已上

九月六日

本文沼田方同意之趣意是非々々兵馬を動し追討と申儀ニ限候事ニ而者無之候得共折格是迄御押詰ニ相成候末被是御模様とも御坐候而者敷ワ敷何卒公平正大之御處置を以御國典屹度通徹上下敬服仕候様ニ 公武へ御盡力被爲在度との趣ニ聞取候事

右之通ニ付此方より御渡被成候演舌書取左之通

今度長州御征伐付而者列藩 嚴命を奉一時ニ攻懸可申儀候處惣軍之大都督無之候而者難叶山陽道より者尾州老公爲元帥御進發之由然ルニ小倉表未々軍監之御沙汰無之何様九州者大藩之牧伯數多之事ニ付御三家又者關老方之内可然御方御下向無之候而之抑揚進退等無覺末既ニ元帥轉變等付而者肥筑方爲御伺 公武へ御使者を茂被指立出張之人數茂先懸留ニ相成居候由畢竟惣帥無之故歟と小倉様方頻ニ御悶急速ニ主宰御發向を御乞請之覺悟ニ而別段御家老之内京師に被指登 公武に御周旋之筈ニ候間 此方様は者万端御依頼之御間柄ニ付重役之内を以諸共御盡力被下候様委細御相談之趣具ニ致承知於 此方様茂至極御同意之筋ニ而既ニ右等之事件ニ付去ル五日早打之御使者長谷川仁右衛門を被指立

元 治 元 年

公邊に御建白且御窺之稜々巨細申合其外京都江戸々御沙汰之趣等一統及違帳書付共沼田勘解由に申向置候通ニ付於彼方茂猶更厚被申合小倉様よりも其筋一致之御盡力被爲在旨周旋有之候様早々勘解由に可被申達候事

九月九日

九月六日在府本藩士牛島五一郎小野敬藏長崎に於て汽船購入につき下國を命ぜらる

〔文久四年日記〕

各儀今度於長崎表蒸氣船御買上ニ相成筈之段申來候付用意次第御國許に被差下候此段可及違旨候條可被奉得其意候以上

九月六日

柏木文右衛門

牛島五一郎殿

小野敬藏殿

九月七日閣老諏訪忠誠は本藩江戸留守居を召喚して征長進軍方面變更の令達を交付す

〔小倉一件、長防爲御征伐御進發一途、長防御追討一件、元治元年長征録、江戸返達御用狀扣、文久四年日記〕

ツヤニ
細川越中守に

細川越中守

毛利大膳父子始追討被仰付候ニ付攻口之儀下之關ノイより山口に攻寄候様先達而相達置候處下之關ノイより府中清末共攻落夫より山口に攻寄候様可被致候

九月七日幕府は軍艦奉行に令し野州屯集浪士の海路より逃亡する者を追捕すべきにつき漁船の外常陸近海の通航を禁する旨を房總常三州の沿海各地に示達せしむ

〔御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

松前伊豆守殿御渡候御覺書寫一通相達候間被得其意云々

九月七日

上杉彈正大弼殿

松平大和守殿

右留守居

覺

野州邊屯集罷在候浮浪之徒水戸殿御領内に罷越夫より海上乗逃候者も有之由ニ相聞候間此度御軍艦御差廻しニ相成右脱走之者共打留候筈ニ候間九十九里銚子口鹿島浦那珂港邊都而常陸海岸通獵船之外渡海之船々一切差出申間敷旨安房上總下總常陸國海岸通浦々ノイに其方より早々相達候様可被致候事

九月

九月九日常州志筑藩主本堂内膳筑波浪士騒擾の状況を幕府に申告す

〔風聞書〕

九月十二日

御用番因幡守殿に本堂内膳より差出候届書

元治元年

先達而より常州筑波山其外に相集候浮浪之徒追々暴行相募候間追討御人數被差向候ニ付近頃浪徒散亂仕候處一昨七日夜九時頃府中宿之方に當り炮聲相聞候内東北之方三四里先ニ火之手相見へ候ニ付早速物見差出候處浮浪百五十人程ニ而片倉村ニ申所に致放火候由翌八日朝五半時頃ニ至り府中宿邊ニ而又々大炮烈敷相聞へ候ニ付猶物見差出候處府中杉並木ニ而府中勢浮浪共々大炮小炮打合及接戰双方死傷人も有之候趣府中町方致放火候由其後私領内にも可致燒打風聞頻ニ御座候得とも自領之義ハ兼而御達之通相心得口々出張爲仕置候間時々廻村仕向又領分栗田村下志筑村等に人數一隊ツ、繰出置候處松平播摩守陣屋より以急便援兵之儀申越候間人數一組差遣候後無程領内土田村に懸浪徒多人敷通行仕候ニ付直ニ出張人數馳向候内猶又佐谷村ノ浪士六七十人程早足ニ而罷通候趣注進御座候ニ付同村にも一隊差向夫より追馳候處大雨ニ而路次惡敷浪徒所々に散亂仕他領河波村ニ申所迄追馳候得共行衛難相分殘黨壹人致手向候間討取追懸ケ候節浪徒とも取落し候品々取上置申候領分境猿ヶ峰ニ申所に陣取扣居り候得共其後別條無御座候間今朝一同引揚申候播摩守陣屋に差遣候人數も引取申候且又 公儀御人數兵糧米當月朔日頃ノ鬼怒川家屋河岸通私領分下佐吉村に敷百俵積立相成候間萬一右糧米に浮浪共致亂妨候哉も難計早速同村にも人數差向置候處別條無御座候間引揚申候

- 一首 壹ツ 但地金襴
 - 一鎗 壹筋 一拾匁玉筒鐵炮 一
 - 一兜 壹ツ 但銀象眼入
 - 一刀 二腰 一皮胴亂 一ツ
 - 一脇差 一本 一割羽織 一枚
 - 一直垂 壹枚 一白木綿稽古着 二枚
 - 一陳羽織 壹枚
- 右之通御座候此段不取敢御届申上候以上

九月九日

本 堂 内 膳

在所日付

九月九日宇和島藩主伊達遠江守は遣長使臣の齋したる長藩主の届書及び老臣根來上總等の書翰を幕府に提出せしも即日却下せらる

〔風聞書〕
元治元年正月

九月九日

御用番因幡守殿に伊達遠江守の家來を以内意伺
毛利大膳毛利長門末家方吉川監物急度憤振之儀被仰出候ニ付而者長州表に達方之儀被仰越之趣も御坐候付去月三日長州表に早使差立候處同十四日防州宮市迄罷越被方出役人に相渡同十六日返書受取唯今歸着仕候處左之通差越申候
一御届書 三通
一先方之書狀 壹通
右者如何相心得可申哉此段御内慮奉伺候以上

九月九日

伊達遠江守内

八 木 志 津 摩

別紙

今般家來之者兩人異船乘組横濱より罷歸報知之次第ニ付臣子之分片時も難閑趣有之 叡旨御伺として長門守儀發途爲仕候處上京暫差扣御沙汰相待候様於大阪御達之趣於途中承知仕直様歸國仕候間此段不取敢御届申上候以上

七月廿二日

松 平 大 膳 大 夫

元 治 元 年

二六五

別紙

去月十八日夜私家來脫走之者共諸浪士に相加り 闕下近ク罷出及騒擾候趣不奉憚 朝廷次第深く奉恐入候右一件者脫走之者共爲鎮靜國司信濃差登其折柄益田右衛門介福原越後罷出居候付申諭鎮靜可仕管之處却而脫走之ものを被誘私共同氏長門守宿志を取違ひ自己之了簡を以書付迄も相認差出終ニ及騒擾候段甚以不届至極不謂儀ニ付右三人之者共末家毛利淡路守に先預置候此後如何可申付哉御差圖奉伺候猶又於父子不存儀と者乍申兼而示方不行届故之儀ニ御坐候ニ付幾重ニも奉恐入候依之父子共於國許慎罷在候間何分御沙汰被 仰付可被下候以上

八月

松平大膳大夫

別紙

當月四日英佛蘭諸夷軍艦十八艘赤間ヶ關に襲來(八月五日四國聯合艦隊下關砲撃の條に出づるを以略之)

八月九日

松平大膳大夫

別紙

一筆致啓上候遠江守様益御機嫌能成御坐奉恐悅候然者大膳太夫様御家老共三人於京都暴發に與シ御父子様御旨趣ニ背自己之了簡を以書付迄も差出終ニ及騒擾候段不届至極不謂儀ニ付御末家毛利淡路守様に先程預置被任御差圖候尤御届書早速被差出度候處上筋通路被相禁候より御國許に大膳大夫様御使者を以右御書付御差出方御取扱方被成御頼管ニ候得共其内御取扱振も可有之哉と別紙御書付寫差越申候是以別段飛脚差立可申處通路不相調無是非次第御勘辨可被下候右爲可得御意如斯御坐候恐惶謹言

八月十二日

根來上總親行判

浦親負

元襄判

信田左衛門殿

右之通九月九日出

右之書同夕持歸り遠江守家來宅に呼達之覺

扣因幡守

別紙届書可請取筋ニ無之候間差返候様可仕旨宅に伊達遠江守家來呼書面可返候事

九月十日佐倉藩主堀田相模守常州潮來村浪士追討の經過を幕府に申告す

〔風聞書〕

九月十日

御用番備前守殿堀田相模守より差出候先ツ届

潮來村浮浪追討之儀ニ付新庄駿河守内田騎一郎松平大藏少輔兼而打合候上去ル三日申越佐原村出張潮來村小利根川迄人數操出し大炮小炮を以責懸候處何分地理不宜上陸仕兼候内追々時刻打過一ト先引拂猶又同五日牛堀并北石三ヶ所手分々仕騎一人數之息柄と小見川之間相固大藏少輔人數之後援ニ而前書三ヶ所に取掛ヶ候處前々日致出勢候ニ驚キ候哉浮浪之徒悉く致散亂駿河守人數ニ而裏手より館山陣屋焼拂候ニ付御代官小笠原甫三郎に伺之上浮浪足留可相成場所不殘取潰候上前加藤洲村に人數殘置候時々潮來村牛堀村邊見廻り取締申付且又鹿島屯集之賊徒川筋脱走之者も有之哉ニ付同六日曉佐原村に引揚川筋大倉村邊に手分人數差出置相固同書頃浮浪三百人程延原村邊より罷越房總之方に相越候趣加藤洲邊廻り方より注進申越候處芝宿村長藏寺に屯集致し候趣ニ付即刻出勢同七日曉同寺に練詰候處浮浪共出勢模様見受夜半頃俄ニ諸方に散亂致し候趣同寺留守之者并村役人とも申達候依之右口々邊追駈脱走之者夫々討取召捕候者も有之自殺之ものも有之其外何まに賊逃去申候右脱走之内麻生陣屋に相向候者も有之候由同家々援兵申越候ニ付

元治元年

二六七

勢人數之内より致手分直様差向未引取不申候前書長藏寺に縁詰候節同寺ニ有之候武器類之市三郎差圖ニ付取上ケ置申候右品々も取調之上追而可申上候得共先不取敢此段御届申上候以上

九月十日

堀田相模守

九月十日日本藩中鳥嘉左衛門は吉川監物より毛利家名跡存續に關する歎願の趣旨及び征長總督尾張慶勝出征に關する狀況を報告す

〔機密間日記〕

吉川監物が藝州迄歎願の趣并尾州老侯御出張之儀ニ付探索家中鳥嘉左衛門間取書

先日吉川監物潛ニ藝州迄罷越歎願仕候趣ニ此節本家家來共 禁國之下におゐる不埒之所業有之候付而ハ彌以御追討可有之左候得之私共迄迄御誅伐被遊候儀之勿論覺悟仕候儀ニ而其所ニおゐるハ聊道徳無御座候得共私心底ニおゐるハ追々御聞取被下候通本藩之儀ハ遠却仕毎度申立候筋成有之候得共行を不申其末々様ニ相成候段重疊届兼候處方之事ニ而幾重ニ茂奉恐入候得共俱ニ朝敵之名を蒙り激徒ト同様ニ滅亡仕候段之甚殘念ニ奉存候間何卒右之處御汲取被下候ハ、無此上難有奉存候との趣ニ而自身覺悟之次第述候趣ニ之勿論奉對官軍手向仕候存念之毛頭無之然し其今正義之モの共漸十人程有之激徒共鎮靜致居申候間何卒速ニ御追討之諸侯御押寄被下候ハ、其御威光を借私丈之力を以取押申度右申上候通奉對官軍ニ弓を引候ものハ無之積ニ御座候得共若又其期ニ至り手向候者有之ニおゐるハ監物自ら其者共之首刎官軍を奉迎存念ニ御座候間一刻茂御急被下度との趣申向候山猶又咄候趣ニハ益田右衛門介初外兩人之者徳山に預ニ相成居候處宍戸備前と申者是之正義之人ニ而吉川一致之老臣此者右三人之者とも切腹仕せ何程ニ可有之哉と申越候得共右之者共ハ不容易大罪人ニ付手元ニ而之刑斷之暫見合御差圖を相待如何様成被仰付茂可有之候間先其儘嚴重ニ戒置候段も咄申候山何様上下勢却而御追討之速成儀を願望仕候山ニ御座候監物右咄之様子殊勝ニ相見元就以來相傳

之國家も至當代爲激徒被欺一時ニ滅亡仕候段甚殘念ニ奉存候間何卒後日祭を存ル丈ケ之御取持偏ニ歎願仕ルとの趣坐上ニ而毎々申向候由

一尾州老公總督御斷ニ相成居申候處當月四日御斷難被爲叶段向江戸を被仰越候間御所勞ならら御發途ニ相成候方御内定之段とふる一昨日頃此方御登込之御役々迄御届爲有之山只今藝州が尾州に御用向ニ而罷越居候人有之今明ニ之歸京之由ニ付是ニ之體成儀相分可申右御出馬有無之儀ニ付而者藝州表ニおゐる何角用意之儀茂有之候間其御決定ニ相成候得之速ニ御通シ有之候答ニ取組ニ相成申候間明日頃迄ニハ相分可申段承り申候以上

九月十日

中鳥嘉左衛門

九月十一日幕府監察山口信濃守本藩江戸留守居を召喚して本藩主馬印旗指物雛形及び藩士袖印等を提出すべきことを達し且つ差添軍目付の人名書を交付す

〔長防爲御征伐御進發一途、長防御追討一件、江戸返達御用狀扣〕

(九月十一日山口信濃守留守居呼出交付之)

口達之覺

馬印旗指物等雛形を以早々可被差出候

一袖印之儀相分居候ハ、是又可被差出候

但船手之分者船印差出可被申候事

別紙

軍目付差添

御徒目付

元治元年

二六九

九月十一日藝藩義に内証あり是日足助九一郎等數十名府中岩屋山に屯集し藩主の祖廟に詣るを要して其正邪を辨し相當の處置あらんことを訴ふ

〔風聞書〕

元治元年正月ヨリ
藝州ニ而八月十一日正邪二手ニ相成建白之趣意好物之爲ニ誠心難背依而九月十一日君公先靈に參詣之節直訴致し府中岩屋山に屯集之人數左之通

足助九一郎 井上權之丞 岡田圖書 松野文四郎 八島外馬 港源太郎 大中義之助 筒井政兵衛 栗島内藏之助
天野俊藏 川崎鹿之助 足利藏八 英清之助 天島靱負 中尾彌五兵衛 原八太夫 東彦兵衛 中村俊太郎
三浦馬之丞 石田平五郎 小島彦之進 岡田内記 佐々善六 蒲生介兵衛 木村外記 千種甚太郎 市川仲之丞
櫻井泰助 勝田左京 堀尾順助 仙石權之助 長田三郎左衛門 池田政人 今枝若藏 三浦原兵衛 野村良之丞
幸丈鼎 堀九郎兵衛 服部齋 南部他次郎
右之通ニ付於城中晝夜評議有之政事役仙石小五郎丹羽嵩兩人に被仰付岩屋山より速歸候よし
一好物者等御糺之上切腹被仰付候面々左之通

御家老隱居政事後見
役料千依 淺野 出羽

御年寄政事掛 千八百石 生田 筑後

石坂 武兵衛
御小人目付 大木 助次郎
清水 達藏

御用人御側頭
五百八十石 青野 保太郎
御側頭格
四百石 湊 左馬
同
三百石 井原 藤藏
同
三百二十石 谷口 寅之助
同
三百八十石 間宮 守人
御小姓筆頭
貳百五十石 上月 貫
御小姓
百五十石 足達 權介
同
貳百石 宮村 正太郎

同 貳百拾石 上田 藤之助
御祐筆 百石 村上 勝之助
同 百石 寺田 良之助
右者思召ニ依而御役御免知行被召上格別之譯を以三ノ丸屋敷ニおゐて切腹可致何れも同文言御年寄藤田大炊辻將曹申渡ス
右之面々介錯人被仰付
千村 千兵衛
荒木 政人
丹羽 益人
見届 藤田 大炊
辻 將曹

九月十二日幕府は總州木下風關門通過に關する規定を達す

〔文久四年慶應二年迄御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

元治元年

諏訪因幡守殿御渡候御書付寫一通相達候間云々

九月十二日

大 目 付

細川 越 中 守 殿

(外九名)

右留守居

大 目 付に

浮浪之徒取締ニ付而之追々被仰出之趣茂有之此度總州木重關門來ル十八日より往來之者都而去冬御上洛御留守中諸國御關所并江戸出口宿々番所取建之節相觸候通印鑑相廻し置通行之度々調印之書付可被相渡候若脇道間道相越又者押而相通候ハ、召捕手向致し候ハ、切捨致し候管ニ候

但右印鑑壹枚來ル十五日迄ニ大目付に可被差出候

右之通向々には不洩様可被相觸候

九月

九月十二日日本藩京都留守居上田久兵衛二條關白の邸に候し參勤交替復舊の事より公武の扨格を生ぜざらんことを建言す

〔京都諸扣、機密間日記〕

此節關東ニ而參勤交代等之儀以前之通舊復被仰出候趣小倉藩より知せ來候付會桑等間繕候處何を茂眉をひそ光居中候故何様御追討之兵氣挫ケ不申様周旋不仕候而之天下瓦解之勢眼前ニ御座候幾重ニも御追討御差障無之筋ニ盡力可仕申談置候扱又右之通重大之事件定而 朝廷に之御伺茂無之儀と相考申候就而之 朝廷より御詰問御譴責とも御座候而

之忽ニ公武之御間扨格仕無是非次第ニ付御奉行申談今十二日關白様は參殿高島右衛門を以奉伺候處未タ何共御承知無之不怪御仰天ニ而御座候付此節之儀乍恐緩急輕重を御計較ニ相成防長御追討相濟候上如何共御參談可被成御座只今彼是ト御差詰等有之候而之公武之御間ニ隙を生シ不容易御運ニ相成可申重疊奉懸念候吳々茂右之御所置筋之迷惑之事ニ御座候得共天下を愛スル心ニ相成候而之可成丈押直シ御調和之路ニ赴候様念願ニ御座候段逐一ニ御内意申上候處委細御承知深御尤ニ被思召候其通御含御取計可有之安心いたし候様御傳諭御座候事

九月十二日

上 田 久 兵 衛

九月十二日在京本藩大目附藪圖書將軍親征に關する建白書提出につき藩政府よりの通牒に答ふ

〔自筆御用狀扣〕

別紙を以申達候然之長州御追討ニ付而將軍様大坂御進發茂被仰出候得共御内輪と寸斗御不整且御惣督も度々相替尾州老公も御斷杯と申唱も有之如何成行可申哉當時攝西之諸侯伯も遲疑猶豫ニ而人數繰出さへ邊巡之向不少甚以御懸念之次第ニ付願曰ハ將軍様藝州邊迄御出張御自身ニ御指揮被爲在度其邊之儀御建白被爲在候管ニ而長谷川仁右衛門儀京江戸に之御使者被仰付早打ニ而被差立管ニ付爲心組被仰達候條御奉行にも中間置候様被仰聞候通承知仕候右御建白之通藝州邊迄將軍様御出馬被爲在候ハ、諸侯伯も御憤發御盡力可有御座候處別紙ニ申達候通此砌證人等之儀被仰出候付而之何程之御運ニ相成可申哉慨歎之至ニ奉存候此段貴答迄如此御座候以上

九月十二日

藪 圖 書

御國

惣 連 名 殿

九月十二日杵築藩使者を熊本に遣して征長出兵に關し豫め我藩の援助を請ふ

元 治 元 年

二七三

〔文久四年
機密間日記〕

上切紙寫

松平但馬守様御使者

元 田 百 平

右持參之口上書一通差上申候以上

取次 眞 下 梶 之 助

御 右 筆 頭 衆 中

秋冷之御御座候處彌御堅達可被成御在國珍重之御儀奉存候將又長州御征伐被 仰出右御討手被爲蒙 仰御苦勞之御儀
御心配ト被奉推察候右御見舞被申述候且當方に茂人數在所表に相揃置候様蒙 仰候處當時中務大輔在府最御固等被
仰付東西に人數引分ク其上海岸手廣小藩ニ之有之高ニ應し候人數茂難被差出至而少人數ニ者候得共相備置御沙汰相待
罷在候若出勢ニ茂相成候ハ、別而御厄介罷成候儀ト被奉存萬端無御服臆被 仰聞被下候様御頼被成度且當時御模様等
之儀彼是承知仕度此段以使者申上候

九月

〔文久三年八月以來
一橋初來使一件〕

(九月十三日杵築藩への答書)

秋冷之御愈御堅固御在邑長州御征伐ニ付御人數被揃置候様被仰出候段珍重存候拙者儀茂右討手被仰付候付而御見舞預
御使者悉存候御人數被差出候節者御頼之趣致承知兼而御隣交も有之萬端可及御相談と存候當節之模様は用意中にて臺
命相待罷在候事御座候此段御答申達候

九月十三日幕府は常州筑波山屯集の浪士の追捕及び征長從軍者の雇人足宰領馬日雇賃銀の遞減
並に武士方奉公人の解雇願出の嚴禁等の令を發す

〔文久四年慶應二年迄
御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

諏訪因幡守殿御渡候御書付並御覺書寫二通相達候間被得其意云々

九月十三日

大 目 付

細 川 越 中 守 殿

(外九名)

右留守居

大 目 付に

常州筑波山等ニ集屯暴行致し候浪士共追討御人數御差向ニ相成候處浪徒共散走致し候由ニ相聞候乍去兼而相觸候趣も
有之難逃延儀ニ候得共自然委を替落行候者も可有之候間聊ニ而も怪敷體ニ見掛候ハ、無用捨召捕可申候尤手向等致し
候ハ、切捨候様可被致候萬一右黨類共隠し置候もの等有之外より於相顯之當人ハ勿論所役人共迄可被處嚴科候條其段
急度可被申渡置候右之趣關八州陸奥國領分知行有之面々には不洩様可被相觸候

九月

覺

此度御進發御供之面々町方雇人足宰領馬日雇賃銀共省略之上格別際立直段引下ケ御奉公筋ト相心得出精可致旨相觸候
大坂迄之夜道脇道賃共直段書兼而町奉行に爲差出置候間雇候面々其心得ニ而可相雇候引受方之儀者平日出入之者又者
最寄ニ而聞付候共勝手次第可致候尤通日雇引請候者不筋之申台致し不正之取計於有之ハ町奉行に其段可被相達候奉行

元 治 元 年

二七五

所ニ而吟味有之筈ニ候

一武士方一季居之奉公人極り月ニ至り候共主人勝手次第只今迄之請人ニ而其儘召仕候筈ニ候間主人より暇出候儀ハ格別奉公人より暇取候儀仕間敷旨町方に相觸候間其旨可被相心得候若違背致し候もの有之候ハ、町奉行所に可被相達候右者御供御留守之面々も同様之儀ニ候
右之通可被相觸候事

九月十三日本藩備頭長岡監物其組下の上京者に關する申告書を藩政府に提出す

〔小倉一件〕

拙者組牧多門助組共御物頭片手用意濟次第出京被 仰付候付左之通

當番所知セ濟

佐	分	利	又	兵	衛
組	共				
磯	谷	半	兵	衛	
組	共				
杉	山	理	兵	衛	
組	共				
深	野	佐	十	郎	
組	共				
安	富	重	九	郎	
組	共				

右之通及達御請相濟候且牧多門助儀之鶴崎に相詰居候付組脇池邊椋右衛門山縣嘉平太に及達御請相濟候事

九月十三日

九月十三日森井惣四郎は會桑諸藩及び新撰組等が將軍の進發を迫りし狀況を報告す

〔探 索 書〕

〔森井開書之内〕

九月十三日

一今度 公方様御進發一日も御速ニ有御座度會津桑名其外御譜代列藩京都表ニ而談合之上各藩御使者被差立 公邊へ建白之儀ハ先日書上候通ニ御座候處 公邊近來御撰立ニ相成候新撰組之内京都へ被差立候ハ新撰組ト唱申候右浪士之内四人當月九日到着仕申候彼等之存意之御進發御供衆に已前々知音之人も有之右之人々彌御奮發被成候様鼓舞誘引之内存ニ而京表へ罷下り候者之由御座候會津ニ而ハ野村右兵衛此節周旋之頭ト相成罷下り居り候然處右野村より新撰組等を以 公邊に迫り候由若御聞濟無御座候ハ、聞老衆を暗殺致杯ト何者之唱候歟近來水野聞老ハ御屋敷内徹夜打廻らせ警衛嚴重ニ有之候由當時 公邊會津を御疑ニ相成候事如斯御座候付何事も情實貫徹不仕彼藩大ニ歎息いたし居り候

九月十四日征長總督尾張慶勝國を發し上京の途に就く

〔機密間日記〕

尾州老公御總督御斷之儀御願ニ相成居候處去ル四日右御斷難被爲叶段關東御沙汰有之候付老公も御所勞ふら御受之内定ニ相成其段之京都御詰込之御役々に御届御座候由承込申候然處稻葉聞老上使として尾州老公に御總督御受御勸ニ相成候筈ニ而永井様戸川様御付添十一日頃御發足之由申候前條御總督御請之儀御届御座候ハ、御勸之上使有之間敷と重疊疑惑仕候間昨日永井様に參上奉伺候處主水正様御尊之趣ニ之此節大久保井上兩監察に關東より被仰含候儀有之強而老公を奉勸候ため皆々出立之筈ニ候處一昨夜尾州御使者を以稻葉聞老に被仰越候趣ニ之老公十九日之

元 治 元 年

二七七

變動後之 天機御伺として是非御上京之御存念ニ御座候處御病氣ニ而何分其儀被出來兼候中御總督之儀被仰付候故即御斷被仰上置候事ニ御座候右御病氣とハ乍申御國元ニ引籠御斷被仰立候儀何とか被對 天朝幕府御心痛之次第ニ被成御座候處近日少々御快方ニ付不聞御登京之筈ニ而來ル十五日御發途之御内定ニ相成候との事ニ御座候然之上使も右御登京を御待受爰許ニ而御勸可然と相決候久兵衛聞込之處を篤斗御勘考有之候へハ如何様老公御登京と申之關東方被仰越候趣ニ付而御受之方ニ御内定之譯ニ相違有之間敷吳々茂恐悅之至と御歡ニ相成申候

一同十一日會藩手代木直右衛門より承申候へハ尙又昨夕尾州方十二時之早打着一日御引上ニ而十四日御發途之段尾藩方會津様に參上御届申上候此節御登京之方ニ相決候と成瀬隼人正殿不怪盡力ニ相成漸御引立之由撫躰成瀬殿ニハ御先立之格ニ御座候處此節之御願ニ而十五日ニ御跡立御着京前より御追付御供ニ而御入京との御事ニ御座候右之自然隼人正殿御先立ニ而候ハ、老公御發途俄ニ御延引と申儀難計勢ニ御座候由何様君側を初一統因循說多有之趣右直右衛門内話仕候事

九月十一日

上田久兵衛

〔長防爲御征伐御進發一途〕

尾張前大納言様御惣督御請有無之儀ニ付今日御城出之御城使より御坊主を以御城附に問合候處惣督之儀者此節御請被仰上候得共御伺之廉々之未々御差圖無之由然處京都より追々被爲召候付御病中なら平常之御行裝ニ而去ル十四日名護屋表御發途御上京之由因而京都之御模様ニ應し御歸國之上御出陣敷又之京都に御人數被召呼直ニ御出陣敷其儀之駭と難相分候段申聞候由ニ御座候以上

九月十七日

澤村修藏

〔長防御追討一件〕

九月十七日 青地藤本より
一前大納言様九月十四日名護屋御發途七日之御日積ニ而京御入之由御座候以上
付札
御道中ニ一日御滞留明日御京着之由

〔九條家國事記錄〕

○九月十八日
前大納言殿一昨十四日尾州表發途被致候仍之御届被申候

使 河村嘉平太

九月十四日森井惣四郎聞書の内

〔探 索 書〕

一薩州海江田武治近衛様御内意之儀ニ付 公方様一日茂早夕御進發御座候様牧野閣老公用人迄申入且ハ卑賤之身ニ候得共天下之大事件ニ付閣老に御目通仕度と申込公用人閣老に言上仕候處申立之趣一々尤ニ御座候 公邊ニも御進發御取急被爲成との御答ニて差して御拒ニ相成候様子も相見不申公用人も同様ニて御座候由乍併目通之儀ハ星敷ニ而ハ難被致候ニ付御城に罷出可申何を其中此方可申越との御答ニて御座候得共今日迄何之御模様も無御座迎も御目通いたし十分建白之儀ハ六ヶ敷と力を落し居候段公用人御尋候ニハ御進發御延引ニ相成候而ハ如何ナル弊害御座候哉又之 天朝ニ而も長州へ御依頼被遊との恐レも御座候哉と相尋候付海江田答ニ之乍恐 天朝只今ニ相成長州へ御傾被遊候儀ハ萬々有御座間敷候得共天下之人心未々疑惑も抱キ又ハ長州を正義と心得居候者不少自然御進發延々ニ相成候ハ、列藩之内如何ナル事ニ變仕候も難計第一 天朝之御依頼 公邊に薄く相成恐も御座候と答仕候由海江田方直ニ

元 治 元 年

二七九

承り申候

九月十五日御所九門悉く開放せらる

〔機密間日記〕

以別紙申達候去ル十五日より九門悉被開候付而松平越中守様方御渡ニ相成候御書付寫一通御留守居方相達候付則進達仕候此段爲可申達如是御座候以上

九月十九日

小笠原一學

御國 家老宛
中老宛
寫

細川越中守家來に

從明十五日九門悉被開候事

一御門々々ニ而姓名並行先等承札諸人通行可爲致事

但疑敷者之嚴重ニ相止メ早々届可申出事

右之通從 御所被 仰出候間此段相達候

九月十四日

九月十五日日本藩長岡護美上京延期の件を傳奏及び所司代に申告す

〔京都返達御用狀扣、御記 錄〕

元治元年五月三日以後

松平越中守様は (野宮傳奏へも)

細川越中守弟長岡良之助儀上京仕せ候筈之段先月十八日御届仕候通御座候處防長御追討之儀被 仰出候砌右上京御猶豫之儀御内意申上可爲伺之通旨御差圖之趣於國許承知仕且小倉表援兵之御達及有之候付而者旁良之助儀暫國許に罷在力を添此後之形勢次第直ニ上京仕せ候筈御座候右之段申上候様越中守申付越候以上

細川越中守内

上田久兵衛

九月十五日

九月十五日日本藩は藩主の馬轍船印等に關する申告書を幕府に提出す

〔長防爲御征伐御進發一途、長防御追討一件、江戸返達御用狀扣〕

細川越中守馬轍昇船印等之圖別帳五冊差出申候

一指物之事

指物用不申爲代白紺段々之染分七本幡連之小馬轍を側廻りニ爲持申候形容等別冊繪圖帳之通ニ御座候一袖印之事

越中守家ニ而袖印相用不申候尤台印之儀者家中昇地紺上ニ白ニ而引轡之台印を用下ニ銘々定紋付之候右之通御座候以上

細川越中守内

澤村修藏

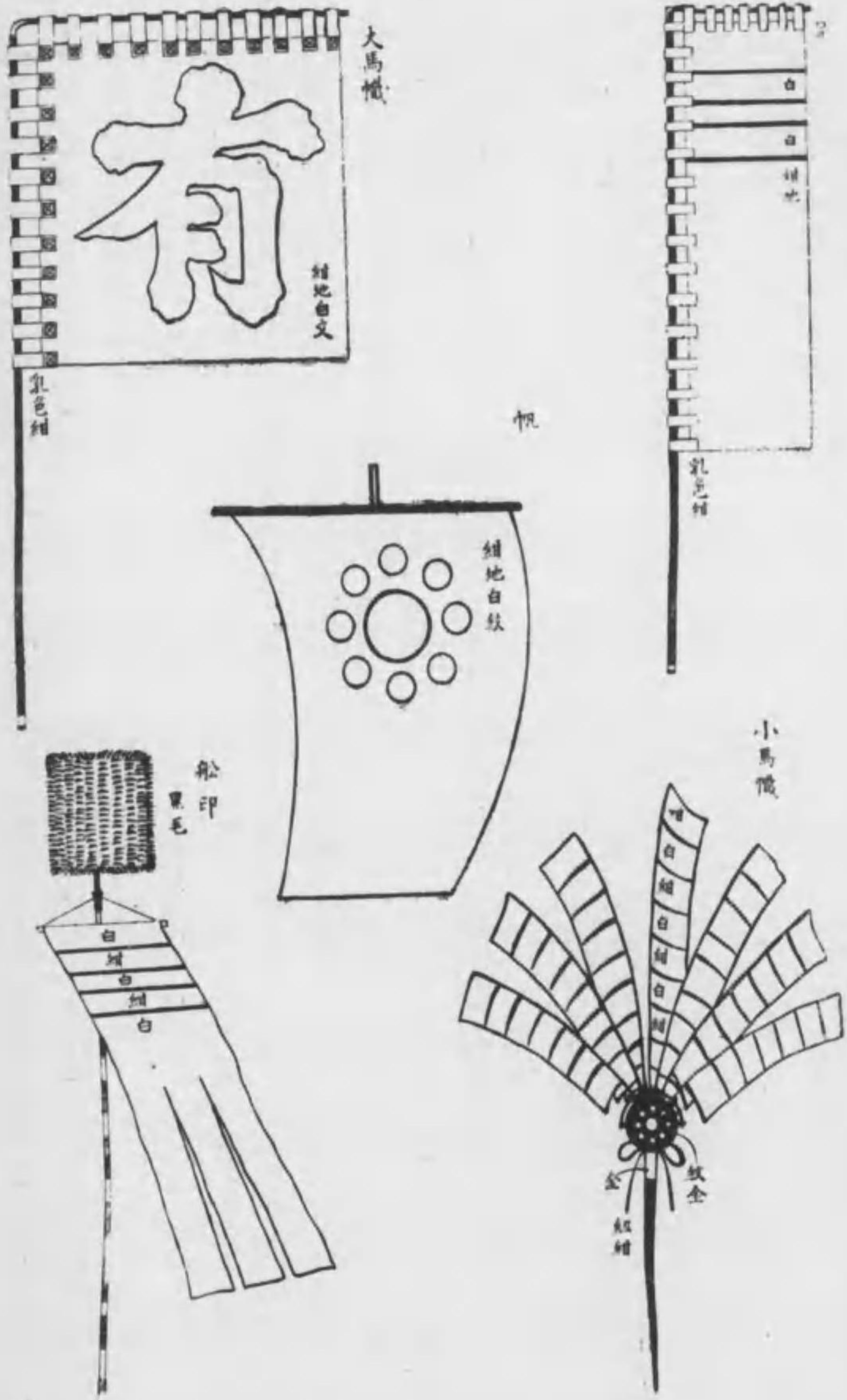
九月十五日

美濃紙帳面仕立

細川越中守馬轍昇並船轍等之繪圖(張面)上書

元治元年

二八一



九月十五日我藩長谷川仁右衛門嘉悦市之進薩藩の西郷吉之助等と征長の爲めに肥薩聯合の策を講ず

〔防長回天史、^{勝田孫彌著}大久保利通傳〕

(九月十六日西郷吉之助より大久保市藏への書翰)

御當地之形勢は可行候鹽梅更に無之越前侯去る六日御着京相成直様村田已三郎等へ引合候處非常備にて御出張相成候譯にても無之平日の御上京にては御座候得共何れ副將之命を御受候事故總督之場を御勤可被成之御事に御座候間是非征長之儀總督を不俟御出張相成候様戦は諸藩より可相勤候得共振切兼候模様には被伺申候畢竟御國內之混雜も有之斷然之御策出來兼候事と奉存候然處越藩より勝安房殿へ相談致し幸關東へ下向之由に候間將軍上洛を盡力致し吳られ候處を兩藩より頼入候ては如何可有之哉との趣直様同意いたし吉井と私下坂いたし越藩よりも兩人被差遣之直書を以て被差出候に付問掛候處幕府之内情も被打明候に付承候處誠に手之附様も無之形勢と罷成候事に御座候畢竟幕吏之處此度之一戰にて暴客恐縮いたし候ものは身之禍を免れ候心持にて太平無事之休と相成好威はこり立候向と被相聞申候左候て幕吏も餘程老練いたし何方に權有之とは知れぬ様にいたし成し一同して持合居候姿に御座候其内にも諏訪因幡守と申者魁首と相聞へ申候色々正義を立込候得者御尤と同意致し何となしに正論之者を退け候に付迎も盡力之道無之との譯に御座候然らば好吏を遠け候策は無之哉と問掛候處一小人を退くるには譯もなき事なから是を受繼もの無之つまりと今一段攻掛候處是以て受繼ものあればこそ行はれもいたし可申候得共薩摩より個様之議論有之候と役人へ持出候へば直様薩摩より被欺候人と申成し落し付候様子御座候諸藩より盡力いたし候ても無益之事に相成との説にていたし方無之次第に御座候幸阿部閣老上坂之處にて御座候に付爲人相尋候處餘程はめられ何と賦計策を勝氏より被授候模様

座候一昨日京着相成候勝氏も上京之旨に御座候間此機會を見合候事に御座候處私にも閑老へ申込置候間篤と談判いたし候様昨夜書面を以て被申越候に付是非拜調を願一問答いたし可申合に御座候阿部其人に候はゞ諸藩より相助幕奸三四五輩は斷然 勅命を以て打落し候策にて無之候ては迎も埒明申間敷事と相考申候(中略)勝氏へ初て面會(中略)攝海へ異人相回候時の策を相尋候處如何にも明策御座候只今異人の情態においても幕吏を輕侮いたし居候幕吏の談判にては迎も難受いづれ此節明賢の諸侯四五人之御會盟に相成屹度條約をも請候ハ、皇國之耻に不相成様成立異人は却て條理に服し此末天下の大政も相立國是相定期も可有御座との議論にて實に感服之次第に御座候彌左様之向に成立候はゞ明賢之御出揃までは受合て異人は相留置との説ニ御座候右に付ては今より個様の議論立候ては決して破に及可申又離間之策を用ひ候儀無疑事に御座候に付攝海へ異人相廻候節初て此策を唱出急速に相決し候様不致候ては相成申間敷一度此策を用ひ候上は何迄も共和政治をやり通不申候ては相濟申間敷儀と奉存候乍然次第して申さば長征之處第一の譯に斷然と割據の色を顯はし國を富すの策に不出候ては相濟申間敷儀と奉存候乍然次第して申さば長征之處第一の譯に御座候間折角促し立油斷は不致候間左様御納得可被下候昨朝は肥後藩着にて面會いたし申候處肥薩之兩藩を以て長征を相願ひ 勅許を得て速ニ可打との議論有之候ニ付私方にては頓と諸藩之受も不宜候ニ付肥後さへ御差はまり御座候はゞ肥後に因て如何様共可致其儀は直様御同意之段申入候處段々六ヶ敷故障言出候次第に御座候是迄之肥後之情態より相考候處餘りよふ過候間却て不安心之事に御坐候兩藩にて引受被申儀ハ迎も六ヶ敷と申出候ハ、如何程激論を起候半早速に同意之段申出候處故障出來いたしまた本氣之もの歎不相分攝海異船處分之議論は本文勝之策同意之段に御座候御國元へも肥後より御使者も參候由如何之説にて御座候哉征長之事共烈敷申たる哉爲御知可被下候(下略)

〔勝田孫彌著 大久保利通傳〕

(同時に吉井より大久保に贈りたる書)

(上略)肥藩も長谷川仁右衛門等四五輩横井派之者共上京同論に御座候云々

一大久保越州(一翁)横井勝ふとの議論長を征し幕吏の罪をふらし天下の人才を擧て公議會を設け諸生といへども其會に可出願之者はさつさと出し公論を以て國是を定むへしとの議に候由只今此外挽回之道有之間敷候

〔嘉悅氏房先生傳〕

元治元年九月(中略)先生即ち長谷川仁右衛門と共に上京の命を受け早打を以て大阪に至り坂本龍馬勝安房等の來り迎ふるに會せり先生之に説くに將に薩公に陳じて長兵の暴戾を制せざるべからざるを以てす坂本曰く我等曩に西郷南洲に迫りしも彼れ遂に之を容れず故に卿等の企畫も亦徒勞に終らんと先生此忠言を顧みずして入京し(九月十三日長谷川等齋京す)越前の中根雪江を介して南洲に面し議論二晝夜をして漸く之を納得せしむるを得たり坂本勝の二氏之を聞きて大に歡び相共に二本松ふる薩州邸に會議し遂に長州征討の事を決せり

九月十六日幕府關八州及び奥州の諸藩に對し逮捕浪士の處分に關する令を發す

〔文久四年慶應二年迄 御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

諏訪因幡守殿御渡候御書付寫一通相達候間被得其意云々

九月十六日

細川 越中 守殿

(外九名)

右留守居

大 目 付に

浮浪之徒召捕方等之儀追々被仰出候趣茂有之討捨又ハ擯捕候由ニ相聞候就而之右賊徒其筋々ハ可爲差出之處方今銘々

領内防備其外彼是多端之處江戸表に差出候而之途中警衛等手敷茂相懸可爲難儀間今般限り右賊徒共一ト通相糺農民劫金錢強奪致候と歎又ハ筑波山其外集屯之徒ニ加り候と歎兩條之内一事申立候ハ、巨細吟味ニ不及右廉口書申付不及を伺連ニ死罪申付候様可被致候尤御代官並關東筋取締出役共召捕相預ケ置候分ハ最寄御代官廻村之節前書之通御仕置申付候筈ニ付無差支様可被取計候
右之通關八州並奥州ニ領分有之面々は不洩様可被相觸候
九月

九月十六日幕府小笠原長行の罪を免し諸大夫たらしむる旨の朝命を傳達す

〔鶴崎長 文久三年四月より慶應元年迄 達御用狀扣〕

唐津開役方之廻狀寫

然者先月十五日諏訪因幡守様より御留守居之者御呼出ニ付被成御差出候處佐渡守様明十六日 御用之儀候間八時爲名代一類中登人因幡守様御宅被相越候様御書付御渡ニ付翌十六日爲名代本間彈正様御差出候處御養子圖書様事先達而思召有之御役被成 御免候節大坂御城代に御預被 仰付候處今度 思召を以右御咎之廉都而被成 御免候依之前々之通諸大夫被 仰付候間同席嫡子並之通可相心得旨被 仰出候段御老中様方御列座大目付士井出羽守様御出座ニ而因幡守様被 仰渡之同十七日壹岐守様へ御改名御伺之通被 仰出難有仕合思召候此段爲御知乍略義一紙を以如斯御座候以上
十月十日 渡邊多門

(匂坂宛)

九月十六日尾州藩御所南門前の警衛を因州藩に引渡す

〔九條家國事記録〕

(九月十八日の條)

尾張殿家老渡邊飛彈守儀南門前御警衛被成御免候ニ付代り松平相模守に今日引渡申候仍之御届被申達候
九月十六日 河村嘉平 太

九月十八日日本藩小笠原一學天機奉伺の使者をつとむ

〔御 記 録〕

傳 奏 様は(傳奏野宮中納言に提出す而して綱) 先達而御當地變動ニ付乍恐 天機奉伺度使者差上申候

細川越中守使者家老代

小笠原一學

九月十八日日本藩政府は征長に關し我藩及び九州各藩の意向協商の要領を京都並に江戸の兩藩邸に報す

〔自筆御用狀扣〕

京都付札

本文之通從御國許申來候付則致披見差廻候長谷川仁右衛門儀御建白御使者として被差登候處(九月十七日長谷川仁右衛門儀御建白御使者として被差登候處(川京都出陣東下) 御都合何程ニ可有之哉上村彦次郎儀先月廿九日歸京ハ、其御地之模様委細申出之通ニ候へハ御建白貫徹之儀何程ニ可有之哉深掛念仕候事ニ御座候同人儀も明日早打ニ而御國許に差下筈ニ御座候爰許之儀も先便申達候後ハ格別相替儀

元 治 元 年

二八七

も無之候間左様御承知候様存候以上

十月朔日

小笠原一學

長岡衛門殿

以別紙申達候長州御追討付而公邊之御模様何分ニも御不安意之處方御存念之次第長谷川仁右衛門に御使者被 仰付御建白被差上候儀ハ御承知之通ニ而其後小倉一おひても重墨御懸念有之差寄九州ニも御三家又ハ關老之内爲御總宰御一人御下向有御座度肥前筑前よりハ將軍様一刻も御進發之儀御使者を以被仰上候趣ニ相聞其邊之儀小倉よりも御家老之内被差登御周旋有之旨ニ付此方様に茂御同様被爲在度由御相談有之御双方之御趣意暗ニ致符合且又薩州にハ最前御内使者淺井新九郎被差越置候内右御建白之一條差起候付早打ニ而寫差遣委敷申達候處彼御地ニ而ハ當月朔日比方海陸より御人數御繰出引續君公も御出張之御手續ニ而都合三千之精兵御城下に屯集いたし居候處先月廿八日ニいたり出張期限相違之御沙汰申來俄ニ士氣相弛ミ如是御運ニ而ハ往々甚以無覺束敷息罷在候折柄此方様御建白相達上下一統殊之外太慶有之何様同様之御趣意御建白之御無用ニ付小松帶刀早々出京實地之周旋被 仰付管候得共近比少々病氣故快復次第早速被差立旨御返答有之其餘薩州ニ而ハ愈以此方様御國議一轍之由ニ付御隣國何方も大概右之通ニ而仁右衛門ハ申ニ不及名初御役々盡力之心得ニも可相成ト右之次第態々早打飛脚差立申達候事ニ御座候以上

九月十八日

御家老 御中老

蕨圖書殿

小笠原一學殿

仁右衛門京都出立後ニ相成候ハ、急ニやとひ飛脚を以江戸へ申向可有之候

長岡衛門殿

猶々江戸表之議當時探索之人跡少ク即今大切之時節ニ付此許方も探索之人跡一兩人被差登其御地ニ而も相應之人跡有之候ハ、探索被仰付公邊其外一跡之事情等委敷聞繕至急ニ此元注進有之度宜御配意候様存候以上

九月十八日大村藩長崎の長州屋敷を長崎奉行服部左衛門佐に引渡す

〔文久三年四月より慶應元年迄 新崎長崎小倉返達御用狀扣〕

句坂平右衛門様

稻田隼人 緒方久藏

以手紙致啓上候然者去ル十七日服部左衛門佐様より家來之者御呼出當分之内丹後守に御預被成候毛利大膳當地元屋敷被成御請取候旨被仰渡翌十八日御役々立合之上相渡候番手付爲引拂申候右爲御知貴所様迄宜得貴意旨被申付越如斯御座候以上

九月

九月十九日本藩は征長に關する銃砲其他武器の輸送は専ら便方に依りて諸關門を通過せしめたき事を幕府に申告す

〔長防爲御征伐御進發一途、長防御追討一件、江戸返達御用狀扣〕

越中守儀今度長防御征伐ニ付海路下ノ關より之先鋒被仰付候付鐵炮等江戸より國許に差越候ニ付家來之印紙ニ員數相認直ニ御關所々々に差出通行爲仕度奉存候尤御警衛等被仰付候而々其外共武器運送之節御關所々々通行之儀付而ハ去年三月御觸達之趣茂御座候事ニ付旁前條之通仕度此段御届申上候以上

細川越中守家來

九月十九日

澤村脩藏

元治元年

二八九

九月十九日日本藩江戸留守居は田中彦右衛門暗殺の嫌疑者因州藩人須山萬就縛の旨を藩地に報す

〔文久三年元治元年マテ江戸返達御用狀扣〕

九月廿一日 十月四日着
村上より様書

一田中彦右衛門變死ニ付而相手御吟味之儀公邊に申出置候趣之先達而得御意候通ニ而其節第一不審之因州藩須山萬此砌町御奉行所に被召捕候由御吟味懸與力より内知せいたし候御留守方書上別紙一通差進申候相手此者に相違之有之間敷猶模様相知候ハ、可申進候今一人之岩名昌之進者未知不申由御座候以上

因州島取在住居

醫師

須山敬造二男ニ而

當時刺髪いたし居候由

須山萬

右者此節町御奉行池田播磨守様に被召捕候付因州御家來御呼出被成御見せ候由之處萬ニ相違無之由乍去御領主より扶持切米等遺シ被置候者ニ無之諸用ニ而出府致し滯留中御屋敷内ニ被差置候者ニ候處當夏中御國元に出立之趣申立罷出候由御答ニ相成候由ニ御座候右ニ付早々御吟味御取懸ニ相成候管之趣懸與力より内話有之候事

九月十九日

御留守居方

九月某日長崎奉行長州藏屋敷破毀の旨を達す

〔文久三年四月より慶應元年迄長崎小倉返達御用狀扣〕

〔長崎奉行達〕

毛利大膳藏屋敷取毀候様江戸より被 仰下候付取拂候條爲心得相達候

子九月

九月廿日本藩は長州出兵に關し我兩支藩の勤務上彼此適宜の處置を執らしめんと欲し幕府に申請書を提出す

〔機密間日記、江戸返達御用狀扣、長防爲御征伐御進發一途、文久四年日記〕

御用番諏訪因幡守様に九月廿日澤村脩藏持參上候書付寫

細川豊前守田安御門外に人數出之儀御免被仰付被下候様との儀別紙越中守より差上候願書之通御坐候然處先月廿三日新宿御警衛被仰付田安御門外に人數出は御免被成候旨御達有之右之趣は越中守に承知不仕以前別紙願書國元より差越候事ニ御座候依之新宿御警衛之方ニ御引付此節御免被仰付被下候様有御座度奉願候此段御内意申上候以上

細川越中守家來

九月廿日

澤村脩藏

御用番諏訪因幡守様に九月廿日澤村脩藏を以被遊御差出候御願書寫

末家細川豊前守儀當時田安御門外に人數出之儀被仰付置候處私儀今度長州討手被仰付近々國許出馬仕候付豊前守儀茂召連罷越候心得ニ御坐候然處同人儀兼而人少ニ付御當地に差置候家來共之内も在所に呼寄申度由申出候尤末家細川若狹守儀茂豊前守同様之譯ニ御座候得共御進發御留守中自然非常之儀茂御座候ハ、當時神田橋御門番は被仰付置候得共在府仕居候事ニ付御達次第ニは猶如何様之御用茂相動せ可申候間豊前守當節田安御門外に人數出之儀は御免被仰付被下

元治元年

二九一

候様奉願候以上

八月十三日

御用番諏訪因幡守様に九月廿日澤村脩藏を以被遊御差出候御届書寫

末家細川若狭守儀當時神田橋御門番被仰付置候處私儀今度長州討手被仰付候儀承知仕可相成は右御門番御断申上一姓茂罷下私手ニ屬忠勤を抽度志願之趣内々申越候然處私儀一昨年以來は京地之御用向重ニ相勤於江戸は格別勤上之稜目茂無之此節長州御進發御留守中は猶更非常之御手當無之候而は難相成御時節と奉存候間旁若狹守儀は其儘在府仕責而右體之御番衛ニ而茂彌以嚴重ニ相勤せ申度奉存候此段御聞置可被下候以上

八月十三日

細川 越中 守

九月廿日日本藩江戸留守居をして兵を小倉に出したる旨を幕府に申告せしむ

〔長防爲御征伐御進發一途、長防御追討一件、江戸返達御用狀扣〕

(諏訪開老へ)

今度長防御追討被仰出候付而越中守儀小倉表援兵被仰付旨七月廿八日於京都松平越中守様より御達御坐候付備頭沼田勘解由ニ組之人數差添彼地に差遣申候此段申上候様越中守申付越候以上

細川越中守家來

澤村 脩藏

九月廿日

九月廿日因州藩主松平慶徳答書を贈り長岡護美が時勢觀察の要領を報せしに酬ふ

〔子爵長岡家文書〕

晩春初九御認之貴翰其砌相達拜誦申候時下雖秋冷之時候先以愈御清安奉珍喜候小子社御承知被下候通り春來大病取結

細川 越中 守

漸此頃少々づゝの事は出来候得共今以是步難相成困苦仕候春中登京之義 勅命台慮も蒙候へ共右之次第不任意意外御疎濶之段御仁恕可被下候其砌之時情以貴書委敷拜聞奉萬謝候貴君不相替御精勵之條段々備前等よりも拜承爲天下奉賀候一橋も御在京中は毎々御而會之由横港之一條云々等拜承仰之通り兎角其砌もはまり込み不宜抔風評ニ承乍病褥切齒罷在候事ニ候諸賢君御盡力にて鎖港も御請之場ニは至候へ共此上御成功之程御同情奉祈候諸藩も永々在京故御暇出其上御一和御基本云々等何も承諾仕候最早過去候義一々不及御報如仰太平一條長之暴亂爲外夷ニ往々内亂を生し恐入候義殊更ニ長之義ニ於ては 鞏殿之下と申不容易次第乍去 九重無御別條其段は萬民安堵仕候得共何分ニも不怪事ニ而可惡之甚敷ニ御坐候只々此末益如何と奉考痛候色々申上度は海岳ニ候得共病褥中殊ニ長病一入執筆難仕乍延引御禮答可申述迄書外後信萬可申上候紳々已上

柴月廿日

松 相 州

長 良 之 助 様 貴 答

二仲先頃者越中殿御昇進貴君御勤功相顯候義一入奉賀候時下御自重奉專祈候以上

九月廿一日鳥原藩使者を熊本に遣して征長に關し交互協商謀議して意志の阻隔なからしめんと欲するの心情を陳ぶ

〔機密間日記、一橋初來使一件〕

(二十日鳥原藩の使者熊本に來る翌廿一日鎌田軍之助應接本書を受く)

越中守様に主殿頭口上

彌御堅勝可有御座珍重御儀奉存候今度長州御追討ニ付御討手被蒙仰候趣承知仕誠以不容易儀何角御配慮之御儀と奉察

元 治 元 年

候將又松平修理大夫殿に海路萩表に之先鋒被仰付候付私儀爲援兵出張可仕旨蒙 台命難有奉存候右就而者萬端無御隔
意御示談可被下候右御頼御吹聴旁以使者申上候
右一通

此度長州追討之儀之實ニ 皇國之御安危ニ拘り候御一大事無此上御重任と奉恐縮候於 皇國爭戰差起候而者天下一變
之機會と苦心之至奉存候然處御隣國之儀ニ御坐候得は何事茂相伺察藩之指揮相心得度何卒無御隔意御示諭被下候ハ、
辱心強萬事取計可申儀と奉存候此段宜御頼申上候
(即日答書を授く)

越 中 守 よ り

主 殿 頭 様 様

彌御堅固御在邑珍重存候今度長州御追討ニ付松平修理大夫に海路萩表に之先鋒被仰出候付爲御援兵御出張之儀被蒙台
命候由珍重存候御用意彼是御心配之儀と存候拙者儀茂右討手被仰付候付萬端可及御相談旨御頼御吹聴旁態々預御使者
被入御念儀存候何茂御相談申ニ而可有御座從是茂諸事御頼申候此段御答申述候
御別紙

此度長州追討之儀は實ニ 皇國之御安危ニ茂拘り候程之御一大事と深御苦身之趣御尤存候就而は御隣國之儀何事茂
無御隔意御相談申候様別段御口上之趣致承知兼而御隣交茂有之爲御國家御互ニ可致盡力委細之儀は御使者に其筋之
者を以口上申含候此段御答申述候

九月廿一日征長總督尾張慶勝京都に着す

〔九條家國事記錄〕

○九月廿二日

尾 張 前 大 納 言 口 上

今日到着仕候ニ付早速罷出 天氣奉伺答御座候處所勞未相勝不申候ニ付暫遲延可仕候間先以私 天氣奉伺候

九月廿一日

山 村 多 門

九月廿一日大村丹後守長崎總奉行を免ぜらる

〔文久三年四月より慶應元年迄
鶴崎長崎小倉返達御用狀扣〕

大村丹後守様方之奉札

以手紙致啓上候然者丹後守儀就病氣御役 御免之儀相願候處先月廿一日依御用 召名代一柳兵部少輔様御登 城之處
願之通被 仰出難有被奉存候右爲御知貴所様迄宜得貴意旨被申付越如斯御座候以上

十月九日

猶以本文之趣ニ付以前之通常表聞役申付近々被差出候筈ニ御座候出崎迄之間詰合私共引請取扱候間諸事宜御申合被
下候様被頼存候此段茂宜得貴意旨被申付越候以上

十一月朔日長崎申向濟

御願之通被 仰出珍重被思召御見舞旁御使者平右衛門を以可被 仰進候、御知之御挨拶申述候

九日廿二日幕府將軍進發從軍者の旗馬印等携帶心得を達す

〔尊攘錄皇武令〕

元治元年九月廿二日

豊後守殿御渡

元 治 元 年

大目付に
御目付に

今度御進發之節万石以上以下召連候人數之儀先般相達置候ニ付御役高ニ不拘銘々分限を以旗馬印等爲持候心得ニ可有之候得共今般之儀之左之通可被心得候

一御側衆講武所奉行三番頭旗馬印共爲持可申候事

一持高五千石以上之面々并陸軍奉行并御旅奉行御持小筒組之頭并御鎗奉行新番頭御持之頭大炮組之頭御先手右役々之儀之馬印爲持可申候其外之組々召連候向目印を都而四半小旗相用可申事

右之趣御供之面々不洩様可被達候事

九月廿二日本藩長谷川仁右衛門藩主慶順の建白書及び閣老阿部正外の同松平宗秀に致す所の書を携へて江戸に着し翌日之を幕府に提出す

〔長防爲御征伐御進發一途〕

九月廿二日

一長谷川仁右衛門儀當時無役齋座

太守様御建白之御封書持參去ル六日御國元被差立同十三日京地に着同十七日同所被差立今廿二日致着府候然ル處於京地阿部豊後守様より松平伯耆守様に御當テ之御直書仁右衛門被成御渡候間持參致候ニ付右御直書届上ケ旁差寄伯耆守様に罷出御目通奉願御逢之上右御建白之御封書届ケ上ケ等之儀奉伺候筈ニ而今夕左之通之手札并口上書取脩藏持參差出置候事

仁右衛門に遺置候手札左之通出來

今廿二日御當地に到着仕候使者長谷川仁右衛門儀阿部豊後守様方御渡ニ相成候御封書持參仕候ニ付御目通奉願御届奉申上度今明日之内同道可仕哉奉伺候

細川越中守家來

澤村脩藏

細川越中守國許より差立候使者

番頭

長谷川仁右衛門

細川越中守國許より去ル六日差立同十三日京都に立寄同十七日同所出立今廿二日御當地に着仕候

使者

番頭

長谷川仁右衛門

〔文久四年日記〕

元治元年子九月廿三日御用番諏訪因幡守様に長谷川仁右衛門を澤村脩藏同道被遊御差出候

御建白草稿寫(建白書は九月六日の條に出づるを以て略之)

九月廿三日幕府在府の長藩士を土佐外十一藩に分預す

〔元治元年
尊攘録探索書〕

一九月廿四日 御城出探索之次第左之通

元治元年

吉川 監物 家來

毛利左京亮同

四拾人程

毛利淡路守同

貳拾七人
外ニ女八人

毛利讃岐守

家來之豊人も無之
地守計之由

松平土佐守様

松平相模守様

伊達遠江守様

宗對馬守様

加藤出羽守様

脇坂淡路守様

土屋采女正徳御代
竹腰龍若殿

板倉主計頭様

秋元但馬守様

關民部少輔様

木下飛彈守様

堀田攝津守様

三井 庸 三 郎

右之御方々様は九月廿三日家來之分御預被仰付屋敷々々者御目付方御請取御作事方に御引渡ニ相成候由追而御様可有御座哉未々解崩等之儀之御差圖無之由

九月廿四日

九月廿三日日本藩政府は住江甚兵衛魚住源次兵衛等に對し藩議の公武合躰に在ることを嚴達し且つ勤王說過激に及び長藩の信を天下に失へることを諭示し各自の請書を提出せしむ

〔機密間日記、文久四年日記〕

覺

澤村衛士
田中典儀

公武之御間一旦御隔意之形有之候付而は東西に御忠節を被爲盡御合體之儀可被遊御配慮旨御沙汰之趣茂有之候處勤王之說過激ニおよひ御主意ニ戻御手障ニ茂相成候得共世上一體之動搖ニ而此方ニ限候儀ニ茂無之候付其儘ニ被圍猶厚思召を以共方共組住江甚兵衛父子を始出京を茂被仰付たる儀ニ候處諸藩之事情等前後申立之趣相違之儀多く去年八月十八日後天下之御政道外夷制馭之御處置都而幕府に被遊御委任諸事御合體被仰出候上者幕府に之御忠節者則 天朝に之御忠節ニ付臣民御主意を奉シ丈々々之忠節を盡不申候而は難叶且又兼而尊王攘夷を主張いたし候長州今般言語道斷之所行付而は是迄信用之族も究而悔悟可有之彼是一己々々之心底以往御主意敬服之覺悟ニ候哉右之趣甚兵衛並魚住源次兵衛に被及達路々同志之面々には兩人より差寄せ及通達御請之趣は各其筋に相違候様との儀も申達候様可被申聞候以上

九月廿三日

上^{ニ付}札
御親兵ニ被指登候面々之内他人面會外出等被指留置候候茂甚兵衛宅に罷越本文書付披見有之御請之趣は其筋に相違候様及達候間此段茂甚兵衛爲心得可被申聞置候事

〔文久四年
機密間日記〕

覺

監物殿

小坂大八

右者他人面會外出等被指留置候處今日住江甚兵衛に書付相渡同志之面々に者同人方致通達候様及達候間大八儀途中親類付添甚兵衛宅に罷越右書付致披見御請之趣相違候様御達之事

元治元年

二九九

九月廿三日

付札

本文之儀付而之月代を刺罷越候様可被有御達候

志水久馬助組小橋武雄儀他人面會外出等被指留置候處今日御用番より住江甚兵衛に御書付被相渡同志之面々に者同人
致通達候様被及達候間武雄儀途中親類付添甚兵衛宅に罷越右御書付被見有之御請之趣被相達候様可被有御達旨候以
上

同日

御奉行中

津田三十郎殿

尚々本文之儀付而之月代を刺罷越候様可被有御達候以上

御組木原楯太養子木原彦四郎儀右同斷

同日

御奉行中

神谷 矢柄殿

尚々右同斷

御組長沼喜右衛門二男長沼英之助儀右同斷

同日

御奉行中

元田 八右衛門殿

尚々右同斷

的場範之允組脇澤村儀右衛門養方之叔父澤村復四郎儀、御請之趣被相達候様可被相達旨候以上

同日

御奉行中

米村平之九殿

九月廿三日

付札

本文之儀付而之月代を刺罷越候様可被有御達候

志水久馬助組小橋武雄儀他人面會外出等被指留置候處今日御用番より住江甚兵衛に御書付被相渡同志之面々に者同人
致通達候様被及達候間武雄儀途中親類付添甚兵衛宅に罷越右御書付被見有之御請之趣被相達候様可被有御達旨候以
上

同日

御奉行中

津田三十郎殿

尚々本文之儀付而之月代を刺罷越候様可被有御達候以上

御組木原楯太養子木原彦四郎儀右同斷

同日

御奉行中

神谷 矢柄殿

尚々右同斷

御組長沼喜右衛門二男長沼英之助儀右同斷

同日

御奉行中

元田 八右衛門殿

尚々右同斷

的場範之允組脇澤村儀右衛門養方之叔父澤村復四郎儀、御請之趣被相達候様可被相達旨候以上

同日

御奉行中

米村平之九殿

尚々右同斷

一住江甚兵衛育之兄住江庄太郎儀茂他人面會等被指留置候得共同人之別段達ニ及中間敷と咄合候事

御組住江甚兵衛魚住源次兵衛列儀付而被相渡候御書付之趣右兩人同志之面々何某々々に及通達候段追而名付を以被
相達候様可被成御達旨候以上

九月廿七日

御奉行中

澤村 衛土殿

田中 典儀殿

〔魚住文書〕

元治元甲子カ九月廿三日

八月十九日長州暴動ニ付御諭呼出

魚住 源次兵衛殿

澤村 衛士
田中 典儀

申達儀有之候間今日衛士宅に可被罷出候以上

九月廿三日

別紙

申達儀有之候間明日朝之内衛士宅に可被罷出候以上

九月廿三日

九月某日住江甚兵衛等廿三日嚴達の旨に對し請書を提出す

元治元年

〔小橋記録〕

今度拜見被仰付候御書附の趣奉得其意候右に付東角申上候儀奉恐入候得共其儘黙仕居候ては前後不都合の次第に成行候稜も可有御坐敷と奉存候間不得止是迄の事件乍恐左に申上候然は外夷の儀に付ては多年被惱 宸襟候に付關東へは追々勅諭被爲在候得共 叡慮貫徹に難至哉一旦公武の御間御隔意の形に相成間には不穩唱も相聞四方の外夷皇國を窺候折柄萬一内亂を醸候様の儀有之候ては大切至極に付太守様深御苦惱被爲思召東西へ御忠節被盡御台體の儀可被遊御配慮旨御沙汰の趣も奉伺難有御主意と乍恐奉敬服候得は勿論私説を唱へ御主意を忘却仕候心底毛頭無御坐候實に御國家への微忠聊にても相盡度從來の志願に御坐候既に一昨年十一月良之助様御上京に付て御用の筋御座候て粟津忠太郎中西傳左衛門一同此許被差立候付ては前日良之助様より被召出此節の儀不容易儀に付右兩人申合京師表の事情探索且堂上方を初列藩へ都合等旁周旋致置候様との旨被仰渡候に付不肖の私重て御用筋相勤候儀實に奉恐入候得共妄意に御國家への寸忠敷と存込御受申上出京仕候上は殊更御主意を奉し堂上方并列藩へ罷越候節々右兩人と申談一同周旋仕候事に御坐候然處同月良之助様御上京南禪寺御旅館へ被爲入候間私儀も即日御同所下宿へ引移其後事情探索等へ罷出候節は毎々思召を奉伺御側より壹人同伴仕探索の次第聞取の趣罷歸一々言上仕候且又昨年正月太守様被遊御上京南禪寺へ被爲入候付良之助様奉初御供中妙傳寺御旅館へ御移宿に相成候に付私儀も御同所下宿へ引移申候然處同年二月良之助様御下國に付ては御供仕罷下候筈の處太守様思召の旨被爲在候趣を以滯京仕候様俄に御内意御坐候付不肖の私被召仕候儀は難有仕合に奉存候得共段々不呑込の儀も有之相滯居候ては差て御用に相立候儀無御座却て御不都合に相成候様の儀出來候ては重疊奉恐入候譯を以固御斷申上候處太守様御都合にも相成旁滯京被仰付候儀を左様御斷申上候ては良之助様へも重疊御心痛被爲在候由に付此節の儀は枉て御受申上候様大木織部敷圖書等より巨細申聞且御家老衆初演舌書をも被渡下候に付其通御受申上候就ては向後萬事織部へ申談御主意を以被仰付候積に周旋可致との儀被仰

付候間御用向一々織部へ申談事に依り候ては同人を以尊慮を奉伺御主意を奉周旋仕候儀に御座候依て御前へ被召出恐多くも是迄段々周旋筋思召に叶萬端御都合に相成候との御主意にて御品をも御内々より被爲拜領不肖の私如斯過分の被仰付難有申却て奉恐入候然處同年四月太守様御歸國の儀は公武御合體攘夷御決定に付御自國海岸防禦御懸念の趣にて御願濟に相成御歸國被爲在候處私儀も御同日御國許へ被差下候且又公武より御沙汰の趣に付御守衛人數大勢被差立候に付ては猶又右御人數取締方萬端致世話候様被仰付候得共多人數の儀に付何分行届兼候趣を以御斷申上度段御奉行迄再三内意申入置候處御家老衆初罷上り不申候ては甚不安心に被存候由にて是非御受申上御用筋相勤候様尤御用相濟候は、其段早々筋々へ相伺罷下候様との儀被仰付候御受申上右御人數より先立罷上被仰付置御用向夫々相摺御用向大抵相濟候に付其趣を以相伺罷下居申候處昨年十月御様子有之旅人面會他所取遣等堅被差留候旨御達に付唯々奉恐入相慎み罷在申候右の通に付一途に御主意を奉し候儀と相心得候得共御主意に戻り御手障にも相成候旨不束の段奉恐入候幕府への御忠節は 天朝への御忠節に付臣も此主意を奉し丈け、の忠節を盡し不申候ては難叶との趣於私儀從來其志願に罷在候に付是迄之儀も御國家への微忠と相心得居候事に付乍恐向後迎も御主意の趣重疊奉敬服候且諸藩之事情前後は時勢に隨ひ種々變態仕終に天下今日之形勢に立至候儀に候得は最初申立の趣始終一致には參り兼前後相違の儀も可有御坐不束の私何分其處迄は洞見難仕儀に御座候得は御取捨は上に被爲在候儀と兼て相心得見聞之儘を以正直に言上仕候處間違の儀多御坐候旨奉恐入候將又食攘大義は皇國の大典にして藩屏の職掌各國同様の儀候へは強て長州を信用いたし候譯も無御座尤長藩人に誑惑被致候儀も無御座曲直判然仕居候得は今更悔悟仕候處氣付不申且又魚住源次兵衛列とは兼て不通いたし居候付時勢の話合等仕候儀無御座候右は今度御書付拜見被仰付候に付御受の趣書取を以御達申上候以上

九月

住 江 甚 兵 衛

〔佐々文書〕

元 治 元 年

三〇三

(佐々淳次郎手記)

○魚住列之御請書之由ニ而脇方々手ニ入
今度拜見被仰付候御書付之趣篤斗勘考仕候處勤

王之儀心得違仕居實ニ過激ニおよひ候處カ

御主意ニ戻御手障ニ相成候のミふらす諸藩之事等前後申上候趣相違之儀多其上此節長州之所行ニ至候而之重疊意外之
成行ニ而誠以悔悟仕此節之

御主意彌以奉敬服候畢竟是迄氣取違仕居候處カ御手敷ニ罷成候次第幾重ニも奉恐入候依之私身分如何程ニ相心得可申
哉奉伺候以上

(右魚住とは魚住源次兵衛の事なり)

〔全書〕

口上之覺

一今度御用番衆より御達に相成候御書附謹而拜見仕奉得其意候素より愚昧之私辭之曾卑等辨別仕不申候に付其段御斷申
上置候

一公武御間一旦御隔意之形有之候付而は東西へ御忠節を被爲盡御合體之儀可被遊御配慮旨御沙汰之趣は其節奉敬承候尤
攘夷之儀を根として御合體之御周旋被爲在候御事と奉伺候へは乍恐私儀御國家之御爲筋と一途に存込献言仕候も取縮
矢張御趣意中之事と相考居申候事に御座候又 假慮御遵奉之儀に付而は追々之御書附等も拜見仕且又良之助様初度御
出京御歸國之節住江甚兵衛へ御渡に相成候其節在京の御家老衆初より演舌書取之趣も有之旁に付御主意に戻り御手障
にも相成候事は乍恐是迄一向存付不申候然處今般御達に相成候御書附之通り御主意に戻り御手障りにも相成候旨奉恐
入候

一諸藩之事情等前後申立候趣相違之段多との御儀私言と相違之儀多御座候ハ、重疊奉恐入候

一去年八月十八日以來天下之政道外夷制馭之御處置都而幕府へ被遊御委任諸事御合體被仰出候上は幕府への御忠節は則
天朝への御忠節に付臣民御主意を奉し丈々々之忠節を盡不申候而は難叶との御儀重疊奉敬服候

一兼て尊王攘夷を主張致候長州今般言語同斷の所行に付而は是迄信用之族も究而悔悟可有之との御儀に御座候處攘夷之
假慮遵奉之儀は強チ長州一藩に限り候事にも無御座候藩屏之任當然の事にて乍恐此方様を奉初各藩御同様の事と奉
存候然處長州之儀は去年蒙 勅勘候山之處猶又此節於 釐殿下暴舉致候儀に至候而は言語同斷の所行に而善惡分明不
及論儀に御座候に付聊も信用仕居不申候間悔悟仕候儀更に無御座候尤御書附之御主意重疊奉敬服以往理も不相替丈々
々々之忠節相盡申候覺悟に御座候乍恐此段御請申上候以上

十月

佐々淳次郎

〔小橋記録〕

御請

今度住江甚兵衛魚住源次兵衛に御達相成候御書付源次兵衛宅に於て拜見仕奉得其意候右之内勤王之説過激に及御主意
に戻り御手障相成候趣に候處私儀内外之事情等も夫々承知不仕候得共一昨年來不容易御時節と存付候間同志年長者之
尾に附隨仕乍不肖御國恩之萬一をも奉報度と一途に存込東西奔走も仕候次第にて聊御主意に相戻り候心得に無御座候
處圖らす右様の次第に立至り候儀は何共可申上様も無御座候只々奉恐入候又諸藩事情等申立前後相違之儀有之候由私
儀は直々言上は不仕候得共年長者同志に代りて申立候譯に有之私儀も勿論同意の事に御座候間果して相違仕居候ハ、
是亦深奉恐入候又御政道其外幕府に御委任被遊候上は幕命御遵奉は則 天朝に御忠節之譯に付御家來之者は其御主意
を奉畏各々丈々々之忠節を可盡旨重疊奉敬承候然るに尊王攘夷を主張致候長州今般言語同斷に付ては是迄信用之族
も悔悟可有之云々との儀は私儀愚昧にて篤と御主意之程不奉了解次第にも可有之職元尊王攘夷之儀は苟も皇國之臣

元 治 元 年

三〇五

民たる者誰も不奉遵守候ては難相成は申迄も無之故に長州近年之言行は一意尊攘之大義に基き候様致考實深く信用仕居候乍併本年七月京師之變動は自ら別事と被存且是には一切關係も不仕候間今更悔悟仕候様は無之儀と奉存候此段御請申上候以上

九月

小 橋 恒 藏

九月廿四日日本藩江戸留守居澤村脩藏をして征長軍の指揮、外國船の退帆及び將軍進發の期限等に關する伺書を幕府に提出せしむ

〔機密間日記〕

〔長防御追討一件、内密公武に御建白一件、長防爲御征伐御進發一途にも出づ〕

御用番代水野和泉守様に差出候書付并御付札寫

今度長防御追討被仰出候付而者御差圖之上攻懸可申旨ニ御座候處山海を隔御惣督之御指揮ニ而之機會ニ當可申様無之就而者軍御目付様に茂攻伐之寬急策略戰法等之御委任被爲在候御儀ニ可有御座哉左候ハ、小倉初一組合之面々申談軍御目付様に相伺攻懸申ニ而可有御座哉何様諸家一定不仕候而之難相成一組々々之御惣督ニ可有御座哉奉伺候

一御自國ニ而御追討之折柄外夷之取合有之候而之重疊不安意之次第ニ御座候間既長州戰爭中長崎御奉行様に一刻茂退帆之御取扱有御座度段申立候趣茂御座候處今以二三艘之相滞居候由如何之御都合ニ可有御座哉奉伺候

一御進發御頃合御治定之程越中守奉伺度國許々態々早打之使者差立一昨廿二日參着仕候右之御模様奉伺候而猶早打ニ罷歸候様申付候最早御頃合御治定被爲在候哉奉伺候

右稜々奉伺候宜被成御差圖可被下候奉願候以上

細川越中守家來

九月廿四日

澤 村 脩 藏

上ニ付札（此指令は十月六日交付せらる）

初ケ條之趣之都而惣督之指揮を經可取計尤軍目付に戰法等別段御委任無之候得共軍機之緩急不得止場合等之諸手口々并一組合之面々申合軍目付に申談攻懸可申ニケ條外國船之儀之引拂候等談判相濟候間可得其意候三ケ條御進發御比合之儀之追而相達ニ而可有之候

九月廿四日在京小笠原一學は參勤交替復舊につき京都方面の狀況、諸侯の感情、征長に關する幕議の不定、尾張總督の優柔及び我藩の建白書提出等につき在府長岡衛門に通報す

〔自筆狀控〕

文久三年元治元年

以別紙申達候參勤交代并嫡子妻子江戸住居御舊復被仰出候儀ニ付巨細被仰越趣致承知其外若狹守殿を以松前伊豆守様御手前内々御問合御内答之書付并森井惣四郎間取書被差越夫々受取申候右參勤御弛ニ付而之御紙表之通常春別段御賞茂被爲在候程之御事ニ候處勿論伺濟之上御取起と申譯共相聞不申既此一條御觸達之御書付去ル十一日小倉藩人方探索生之内に知せ來候付翌朝道家角左衛門儀共書付持參永井主水正様に罷出相伺候處初而御承知之由ニ而大ニ御仰天有之直ニ右書付御所望ニ相成候由上田久兵衛儀も不取敢關白様に參殿言上之趣等書取寫則入御披見申候右書取之通ニ御座候ハハ京都之御不都合ハ御取直も出來可申哉ニ候得共差寄諸侯伯之御氣受ニ差障り長防御出陣も何程ニ可有御座哉乍恐將軍様御出馬御延引を初言路閉塞等何事も慨歎之至ニ而長州之吉川監物々藝州侯迄歎願之通ニ候ハハ諸藩之兵攻入候ハ、忽内亂を生只御一舉ニ覆滅可致慮軍御目附之多賀親負様御列も去ル十六日爰許御着ニ付上田久兵衛儀十四日之夜より大津驛迄御出迎御追討之儀奉伺候得共一躰之御様子御承知も無之惣督様御着之上ふらでハ御指圖不被爲出來由之處去ル廿一日尾州老侯御着ニ相成候得共未々惣督之命さへ表分御請不被爲濟由ニ而御軍議等有之候御模様ニも相聞不申只管將軍様御出馬を御待敷之御様子ニ而諸藩も同様御着之上ニ無之候而ハ諸事決兼候由之處御國許より之長

元 治 元 年

谷川仁右衛門儀將軍様藝州邊迄御出馬被爲在度との儀ニ付官武に御建白之御書付持參去ル十二日關白様御初へ罷出至極之御都合ニ而同十七日御地へ致出立最早疾く着府ニ而可有之候得共爰許と違言路閉塞之折柄迎も御採用と申御運ヒニ之至申間敷奉察上候乍恐御因循于今初らざる儀とハ乍申何事もケ様ニ時機を被失候而之天下瓦解不遠儀と恐縮いたし居候内傍ニ之近々夷船攝海に乘入候との風説も有之如何相治り可申哉一事として眉を撃不申儀ハ無之候其御地に御便間遠ニ付雇ニ而も差立可申と心組いたし居候内御國許より之御飛脚一昨夕着今日爰許差通候付前條御報取束如斯御座候以上

九月廿四日

小笠原一學

長岡衛門殿

尙々壬生御屋敷御作事荒壁之儘ニ之候得共大概不苦程ニ出來いたし候間明日より御備手之面々順々引移當月中ニハいつとも引移候筈ニ御座候以上

九月廿五日在坂老中格松前崇廣我藩留守居を召喚して征長の決意を示し將軍の上書及び勅許の寫本を交付す

〔尊攘錄諸家建白並御届書等〕

元治元年

松前伊豆守様より九月廿五日於大坂表御留守居御呼出御用人を以御渡ニ相成候御封書寫

上書

被仰上之書付並勅答之寫

防長處置之儀ニ付而者兼而奏聞仕置候通條理順序ヲ逐不審之件々篤と糾問之上夫々處置可仕奉存毛利淡路吉川監物大坂表に早々罷登候様申達候處登阪延引仕候ニ付自然兩人差支候者外末家並大膳家老共之内申合當月二十七日迄ニ無相違出阪候様重而申達候得共今以登阪之模様茂無之此上彌違背ニ及候者最早寛宥之取計茂難仕候ニ付無餘儀旌旗ヲ進罪

狀相糺可申奉存候尤兵機緩急其外篤と熟考之上遺算無之様處置可仕奉存候此段 奏聞仕候

九月

家

茂

言上之趣被 聞食乃賜御暇候猶長州一舉相濟候者御用之儀右之候間早速上京之事兼而被 仰出候

九月

九月廿五日我藩兵の南禪寺其他に分宿せる者を壬生陣屋に移らしむ

〔御國江戸往來狀控〕

元治元年ヨリ慶應二年迄
以別紙申達候壬生御陣屋荒方出來ニ付先月廿五日より同晦日迄南禪寺其外旅宿々々引拂壬生御陣屋に引移申候此段爲可申達如是御座候以上

元治元年十月四日

小笠原一學

御家老宛
御中老宛

九月廿五日本藩安田源之丞廣島に於て偵察せし征長事件に關する聞取書を提出す

〔尊攘錄探索書〕

藝州表聞取書

元治元年九月

一岩國之事情此節長防御追討被 仰出候ニ付吉川監物山口に罷越今日ニ至候而ハ父子共ニ深愼ニ而罪を被謝社稷を接續せらるゝニ而無之而ハ難成是非悔悟被成候様諫争ハし置岩國に引取居候處山口ハ使者被差立此狀願書を藝州ニ差出周旋頼吳候様申來候ニ付右狀願書之文言ハ監物不承知ニ而有之候へ共不得止藝州に持參城外草津と申所ニ而取次相頼

元治元年

三〇九

申候右敷願書取次之事茂於藝州私としてハ難成 公邊に相伺候上取次可申との事ニ而伺ニ相成候處取次差出候様との事ニ付取次爲申事ニ而敷願周旋ハ堅相斷申候との事ニ御座候

一 監物存念藝州に嘶申候ニ之宗家と死生之共ニ不致候て難成候へ共官軍ニ對し弓ハ引不申去とて官軍と共ニ山口ニ兵馬を向候儀ハ猶更難致仍而官軍境上ニ臨候節麻上下ニ而罷出一番ニ誅ニ伏し可申覺悟ニ而罷在候との趣意ニ有之候惣躰岩國におひてハ至而穩便ニ而城下市中茂くヨリ戸迄を明ケ店棚も半分鎖し無餘儀商ひハ致候へ共平常之通ニ之無之帶刀以上ハ長髮ニ而罷在度事

一 徳山と已前より山口とハ不同意ニ候へとも宗家之威ニ押きて不得止異儀無之病中と相唱引籠ニ相成申候然處今度京師暴發後山口表末藩並岩國集會之節之出方ニ相成申候將又彼之福原列之三謀臣徳山ニ願之儀被申付候ニ付而ハ三謀臣ニ一味いたし居候徳山之徵徒貳人申談岩國同意之正義之用人貳人を殺害ハし壹人之即死ニ及候右貳人之激徒之其後岩國ニ而被捕候彼三謀臣徳山ニ願之儀岩國ハ茂登人ハ請可申覺悟ニ有之候處岩國ニハ一大事之周旋を被頼候ニ付三人共ニ徳山ニ預ケ相成申候トの事ニ御座候右牢屋も近來新規出來爲有之由之事

一 山口より之敷願書取次 公邊に申出候處御請取被置候段被 仰出候ニ付其趣岩國に爲答且監物茂山口に罷越居候様子ニ而彼方之模様探索も可仕旁境目役人深町三郎左衛門之兼而岩國應接懸りニ而度々同所にて罷越候者ニ而此節も同人を差立ニ相成去ル十八日廣島出立同廿三日引取申候同人咄之趣左之通

當月六日監物山口に罷越三謀臣之縮りハ是迄の通りニ候得共其餘激烈之徒是非如何様とモ手を不被爲附候而ハ難叶且海岸筋に被差出置候奇兵隊も引取せ縮り方有之候様左候而是迄彼之方ニ而正義之意趣ニ而當時迄萩に押込有之候家老毛利伊勢毛利能登兩人今度山口に被召出候様屹度建言ニ及候處其以前萩に罷在候彼之方ニ而正義と相唱候徒より茂伊勢能登兩人を被召出此則是非正義ニ御返り相成申度段大勢訴出候處激徒よりは攘夷之説を唱申候故ニこそ人氣茂振ひ武備茂整候事ニ付前説を主張不致候而ハ難成段申出既ニ内亂ニ及可之勢之處監物杯大ニ心配ハし終ニ長門守様も異

議無之前文之伊勢能登を山口に呼出ニ相成監物杯諸事計合激烈之説を取籠メ愈以非を謝候方ニ落合候間監物ハ右之兩人ニ託し當月十八日ニ一先岩國へ引取可申段岩國に使者差立置候中長門守様監物旅館へ被參候而何分今暫く滯留ハし諸事心配致吳候様引留メニ相成候付出立延引ニ及候岩國ニ而ハ其儀之存不申監物歸り延引仕候を氣遣用人人數を引連レ速ニ罷越候途中福川之驛ニ而右監物歸り延引之譯を申遣候使ニ行合右之譯承知ハし候而右用人は引返申候山口之模様ハ父子初家中長髮ニ而町家も一躰穩便ニ而店杯も漸く今日通用丈ケ明ケ居申候由ニ候事

一 山口ニ而家老志水清太郎と申者岩國同意ニ而追々岩國ニも罷越監物ニ咄合有之候由右志水ハ昨年出京いたし居候處因循家ニ而役ニ立不申とて徴徒より追戻し候との事ニ御座候家老宍戸備前茂岩國同意との事ニ御座候

一 前條深町三郎左衛門是迄岩國往返ハ多く船路通行いたし候處此節之往來筋之模様も一見爲可仕陸より罷越候處境目ニ關門有之役人數人相詰居其先キ小瀬峠と申所ニ嚴重なる關門も有之候得共其所ニ之警衛之者も居不申右境目之關門ニ數人相詰居候も實意ハ他國に對し候事ニ而之無之徳山邊徴徒之者自然徘徊ハし候哉も難計候間番衛も附置候段申向候との事ニ御座候右小瀬峠之新關ハ宗家より頻りに催促ハし山口之役人罷越居候間取營せ候ニ付責を塞キ申爲取立候得共岩國よりハ番衛之人數等之是迄差出爲中儀ハ無之との事ニ御座候

一 當時長州人長崎ニ罷越居英佛夷とハ格別之親睦ニ而右夷人よりも長州之所業ニおひてハ實ニ感心之事ニ而 皇國之正義と相稱し赤馬關之戰爭も實ニ我等敗走爲申と何一ツ長州を不譽事無之尤英よりハ長藩一大事之節ハ我丈ケハ如何様とそ助勢いたし可申との意趣ニ而向後自國難持届儀ニ成行候ハ、英國へ渡來いたし候様左候へハ引取世話いたし可申段内々打合せ居申候由將又於長崎銃炮等買入を己ニ蒸氣船をも求得當時於三田尻ハ異國製造之船都合七艘相繋居海軍之手配彼是心を用何も英國當り之世話ニ而有之候是ハ馬關表和陸一條より之事と相見申候事

右之藝藩より長崎へ罷越諸夷館にも追々親々參候者ニ而去ル廿四日夜歸藩仕候咄し申候と同藩石津左馬より承及申候得共他説と參考仕候得之實否不審ニ有之候事

一三條殿初七卿之内壹卿之脱走ニ相成其後錦小路殿は死去ニ相成當時五卿ニ而三條殿御登人は別館ニ被居長藩人并ニ諸方之脱藩人守衛仕居申候其餘四卿者同館ニ而守護ニ三條殿同様ニ而有之候彼之居所之山口より半道餘湯田町と申所ニ而右兩館も別段出来と申譯ニ而之無之豪家茂明渡し取立ニ相成居候事

右之同藩諸生田口太郎と申候者先月馬關戰爭之砌水府浪人ニ紛々山口に忍込候而夜中三條殿旅館に罷出拜謁仕候と同人直話を承及申候事

一近比山口表觸有之候ニ之官軍攻入りニ相成候ハ、於長防一切手向致し申間敷往還を開キ山口に差通し再拜稽首仕候而罪ニ伏し可申若シ万々一官軍無禮之儀有之候ハ、其段訊問ニ相及時宜ニ依候而之直ニ必死之戰爭ニ及可申旨相心得候様との事文而不詳主意如此之由

一中國筋諸侯伯陣場等之事藝州に頼來候ニ付御手當ニ相成候向左之通

御本陣

備後福山

一正清院

外ニ八ヶ寺

人數貳千人 阿部主計頭様

同

備中松山

一妙頂寺

外ニ十一ヶ寺

右同 板倉周防守様

同

播州龍野

一佛護寺

外ニ六ヶ寺

同千八百人 脇坂淡路守様

同

作州勝山

一廣寂寺

外ニ三ヶ寺

同八百人 三浦備後守様

同

備中庭瀬

一光福寺

外ニ三ヶ寺

同七百人 板倉彌津守様

同

播州山崎

一明信院

外ニ四ヶ寺

同 本多肥後守様

備前之信州松代兩家ハ無沙汰ニ而有之候併備カハ驛傳イニ人足四百人馬百疋出し吳候様申來り居候迄ニ而矢張御追討ハ緩ニ相成候方之心得ニ有之候由之事

一因州ハ御組合も違候故職取遣も無之尤御家中ハ多長州を取持候様子ニ御座候君侯ハ御不同意ニ而石州濱田御實弟様之方へ直書を被遣此節之儀之無二念 天朝幕府之命ニ被隨候様被仰越候段濱田之御使者藝州ニ參り候而内々咄したる由之事

一因雲之間之以前方不和ニ而是迄參勤等之節も因州路順ニ候へ共藝之御領内備後之様ニ通行有之度段御相談ニ相成居候程之事ニ而此節之御組合も違候得共雲州方御使者到來ハムし諸事御一致ニ御相談被成度段被仰越候との事
一濱田之儀之最初御追討之命下り候節之藝州に御使者被差越候ごととして御追討無之様有御座度段御相談ニ候處藝之御返答ニ之其儀私ニ御取計申筋ニ而無之何茂 天朝幕府之命ニ奉隨候カ外無之と申向ニ相成申候其後尙御使者參り先達而之使者ハ御取捨ニ致吳候様申來り近來之何之異議も無之模様之由右御取捨之儀は前條因州侯カ御直書御遣しニ相成たるカ之事ニ相見申候

一龜井壹政守様
一津和野侯ハ防州境ニ而兼而長州御懸意ニ候處京師暴發後先月朔日山口津和野侯を御請待ニ相成申候ニ付任其意出馬有之候處山口カ之相談ニ之京師之一條ニ付而ハ父子共ニ重疊恐入候次第就而ハ朝敵之名を蒙り誠ニ面目も無之儀ニ相成申候間何卒是迄之御厚情を以御取計被成下候様偏ニ相頼候との趣ニ有之候處津和野侯カハ其儀ハ如何様とそ周旋可仕事ニ候得共私登人ニ而ハ何分不吞込ニ而有之候故藝州當りと申談候上取計可申段御返答ニ相成申候處不怪立腹ニ相

見是式之事も御取計無之而之以來御相談等難仕と申向ニ相成候間津和野侯同五日破談ニ而引取ニ相成申候其跡ニ而津和野往還ニ之臺場を攝へ道路相絶候事

右山口の請待之節之京師表取合之怪我人數多ニ而山口之醫師ニ而之何分療治仕盡しかたく依之津和野之外療醫も罷越加勢いふし居候處破談ニ相成候而之醫師も同様引取申候事

一八月中旬尾州前大納言様惣督被蒙仰候段相聞候ニ付早速藝州より御使者被差立御差圖を奉伺ニ相成候處惣督之御委任之重大之事故御不吞込且御不例之由ニ而御辭之御内意被仰達置候ニ付御差圖ハ先何とも難被爲出來との事右尾州とハ御親藩之事ニ付内々御附役之面々に御内情相伺申候處御大國とハ乍申御勝手向御不如意且一躰因循ニ而大臣ハ日々茶湯杯を事とし其下ハ遊漁等之樂専らニ而今日干戈を取候事杯ハ毛頭心ニ無之故御自身ニ之惣督御差入り無之候へ共右之次第ニ而御辭職之思食ニ被爲至候事然處將軍家御親征之儀被仰出候付而之前大納言様乍御不例茂御出京ニ而御模様ニ被應候而之惣督御受之思食ニ而本月十四日御發途之管候段藝州に申來候得共其後之御模様ハ未タ不承及候との事

甲子九月廿五日

安田源之丞

九月廿六日本藩番頭牧多門助組の一隊に來月六日を以て藩地出發上京すべき旨を達す

〔小倉一件〕

覺 監 物 殿

牧 多 門 助

右者出京被仰付置候付來月六日組之面々此許被差立鶴崎着之上同所被遊御差立候尤添狀者組脇に可相渡候條此段御達之事

九月二十六日

〔上ニ付札〕

本文多門助組中出立日限之儀者直ニ組脇に及達候事

〔全書〕

共方共儀出京被 仰付置候付來月六日此許被差立候條可被得其意候尤添狀可相渡候間惣右衛門儀前日書之内御花畑に可申罷出候且又左之通

弓 削 尉 右 衛 門

外三十七人(内一人病氣にて出立見合)

右同斷被 仰付置候付同日此許被差立候條此段可被達候以上

奉 行 所

九月廿六日

池邊 惣右衛門 殿
山 縣 嘉 平 太 殿

九月廿六日播州山崎藩主本多肥後守の使者大坂の我藩邸に來り征長の援兵を命ぜられたる旨を報す

〔大坂返達御用狀扣〕

九月廿九日 十月六日夜着 十一月朔日返達済

佐久間より

一本多肥後守様より去ル廿六日御使者榎元友彌を以今度長州御征伐ニ付而藝州より之援兵被仰付候御案内御頼旁被仰進候御口上書別紙差上申候

元 治 元 年

三一五

細川越中守様

秋冷御座候得共彌御堅勝被成御座珍重御儀奉存候然之今度長州御征伐被 仰出候ニ付而者御出陣被蒙仰候段承知仕嘸
御心配之御儀と奉察候儀儀茂陸露藝州より岩國夫より山口に攻寄候爲援兵出陣被仰付難有奉存候攻口之方角遠ニ之御
座候得共陣中萬端宜被仰合被下度右御案内御頼旁以使者申上候

委細被仰進趣被遊御承知被入御念儀被思召候御互之御事何も被仰合此方様よりも御頼御挨拶旁於大坂御使者可被進
候

九月廿六日軍目付多賀鞆負本藩京都留守居を召喚し明後日を以て下坂すべき旨を告ぐ

〔京都返達御用狀扣〕

軍御目付多賀鞆負様より今廿六日書之内御旅宿に參上仕候様御申越候付罷出候處御軍令其外之心得筋於江戸伺之書付
差出置候處登坂之上阿部豊後殿より御差圖可有之早々出立いたし候様との儀ニ而其儘罷登不圖出京いたし候付爰許ニ
而豊後殿に相伺候處追討諸藩之家來々々申談決議之筋申上候様ニとの事ニ候へとも惣督度不相決御軍令も御渡無之何
を以諸藩に可申談哉と重疊當惑いたし尙又伺之書付差出置候處江戸表を御差圖之趣有之大坂ニ而稻葉美濃殿より被仰
渡筋有之候間早々下坂仕候様被仰付明後廿八日早朝爰許出立淀舟ニ而罷下管ニ付彼地ニ而も万端宜御頼申候との事ニ
御座候先日同道拜面仕置候住江慎三郎馬場久太郎兩人御用辨之ニ下坂仕せ候彼地藏屋敷に差置可被下候且同所留守
居之者茂相詰居申候ニ付万端無御遠慮被仰聞被下様申上置候事

九月廿六日

上 田 久 兵 衛

九月廿六日水藩末家松平頼徳幕府監察戸田五介の陣に投じ次て庶族松平萬次郎の家に禁錮せら
る

〔尊攘録探索書〕

文通寫

（前略）

一 九月廿六日水戸殿御分を松平大炊頭と申浪人大將別紙之通人數召連鹿島海道夏目村と申處に關軍陣所に願之趣有之由
ニ而罷越候ニ付御目付戸田五助殿を田沼玄蕃頭殿に御伺之上同廿七日水城下本町壹丁目會所と申處に入翌日大炊頭外
七人を青洲之乗物に入其外之ものハ荒繩ニ而まはり御預 又之揚屋入牢屋敷にも送り申候其外右會所ニ而切服九人有
之候右大炊頭願之筋ニ依而御作事奉行岡部駿河守殿別手組三人を御召連九月廿八日江戸表に早馬ニ而御伺ニ御越被成
候右之否次第ニ而此後合戦之様子も相分り申候當時之處ニ而之四方八方ニ陣を取建關陣并諸大名にて湊を取巻罷在候
乍去日々大炮ハ諸方ニ而打掛申候得共敵方ニ而之味方十とつニ壹貳發之割ニ發不申何る籠城致候様子も相見に申候尤
彌合戦ニ相成候得之一兩日之内ニも攻取申心得ニ一同罷在中候
一 浪人日々四五人位ツ、まえられ申候間當時ニ而之湊ニも千人程計罷居候様子ニ御座候
一 九月廿五日朝々大合戦有之をたの村平磯前濱邊一圓大火ニ而鳥居丹羽殿之人數之内八九人怪我壹人ハ即死有之候浪之
方ニ而之多人數怪我有之首十計取申候關軍ニも怪我人壹兩人有之候其後大合戦ハ當時無之日々壹陣ニ而大炮四五百發
程ツ、打懸申候

子 十月 朔 日 (別紙あれとも略す)

〔風聞書〕

十月十二日

水戸出張之御徒松井甲太郎より松平大炊切腹之事情并同十日同所戰爭之文通

元 治 元 年

宍戸侯者八月比天狗勢ニ加味被致段々横行致し九月上旬常州河岸附磯濱岩井町那珂湊邊に立籠居候得共官兵之大軍ニ恐を候哉周防守人數之内過日貳人被生捕居候者に降書を爲持御目附に被差出吳候様申付遣候得者早速御目附戸田五助出陣ニ候得ハ同人に差出候處承知有之即刻周防守人數ニ而侯并其家來を警衛致し江戸表に可被差出積リニ而五助差添水戸街道西郷寺宿に向罷上り候處水戸殿家來より陳代玄蕃頭殿に侯并其人數を引取度段申出候ニ付玄蕃頭殿御聞届濟相成九月廿七日小十人別手御徒并水戸殿家來御目附代牧野銅太郎附添弘道館より急連西郷寺宿をさして出張致し銅太郎五助に引合直ニ水戸表に爲引戻候依て右之者前後を警固し同表下町町會所に送り候右會所御警衛之ため小十人別手御徒并水戸殿家來周防守人數詰居候

一同廿八日晝八ツ時比御徒目附宮寺藤十郎御小人目附兩人立會ニ罷越水戸殿家來云々申渡候時ニ會所内外鐵炮并拔身之鎗ニ而相固め最も嚴敷有様也

一 扱申渡相濟玄關に駕籠を寄せ候を乗せ候處其家來之者共敷臺迄送り出候得者侯其ものともへ二三度迄續々被申候者應忽之事をそるふ應忽之事をそると不忠だぞと被申是主從之生別を其者共物をも不言平伏し皆涙ニ及ひ候夫より侯者水戸之評定所に被送候送り出し候者共者涙ふるら敷臺より上り元之一ト間ニ就き候と無間も物音騒候ニ付固メ居候者別手御徒并周防守人數何事候哉と存刀拔扣居一ト間を出候得者切捨候覺悟ニ候處忽チ靜り候此義ハ送り出し候者之内六人切腹致し候騒きニ御坐候扱申渡相濟切腹者夫々片付候

一 其余大久保甚五左衛門始め侯ニ附添來候者或ハ駕籠ニ乗せ上を縛り或ハ縛步行ニ而是亦評定所に被送候此駕籠之上を縛り候者之甚五左衛門也壹人者老人なれハ敷臺迄人之肩ニ倚りて出候處度々後を顧み悻と一所ニ願度なと申故有免ニて駕籠之上を縛り候よし皆其ものとも敷臺に下り候と腰物を被取且懷中之品迄も不殘被取候候此會所迄者平日之通二本道具長刀挾箱杯ニて立派ニ御坐候得共此場ニ相成如此之体衰成事眼も當らぬ事ニ候二本道具長刀其外道具家來之大小懷中物本と皆荒繩ニ而括上げ同評定所に送り候先此時計者出張初而之覺悟を致し候其外ニ者右之如く奮發致し

候事無御坐候

水戸殿家來

- 大久保 甚五 左衛門
 - 同 甚 十 郎
 - 鳥 居 潮 平
 - 丹 羽 惠 助
 - 片 倉 爲 之 允
 - 大炊家來
 - 山 中 新 右 衛 門
 - 平 井 久 馬
 - 菊 池 庄 助
 - 木 村 小 次 郎
- 其外人數多ニ付爰ニ略ス
六十一人

(下略)
十一月十二日 水戸仕出

關 忠 藏 様

九月廿八日幕府は軍艦奉行矢田堀景藏に野州浪徒追討として軍艦黒龍丸の派遣を命ぜし旨を各藩に達す

元 治 元 年

〔御同席觸寫並大目付様御廻狀寫〕

松前伊豆守殿御渡候御覺書一通寫相違候間被得其意云々

九月廿八日

大目付

上杉彈正大弼殿

松平大和守殿

右留守居

覺

野州邊浮浪之徒船ニ而海上乗逃候もの茂有之哉ニ付黒龍丸御船被指遣脱走之徒打留方之儀ハ勿論賊徒追討被仰付候間其方ニ茂罷越海陸とも賊之巢穴を茂相探不洩誅滅候様可被致候渡海之船々差留方等之儀者都而木下謹吾被指遣候節之通相心得右之趣御軍艦組之者共ニ茂可被申渡候事

右之通御軍艦奉行矢田堀景藏に相違候間万石以上以下右之趣爲心得相違可然向に者早々可被相違候事

九月晦日本藩長谷川仁右衛門閣老松平宗秀に謁し具に藩主建白の使命を陳述す

元治元年

〔機密間日記〕

以手紙啓上仕候長谷川仁右衛門儀先月廿二日爰許着御建白之御封書閣老に差上御逢を茂奉願候得之一旦之御逢茂六ヶ敷御模様ニ御座候處先月晦日松平伯耆守様被成御逢候間被仰付越候趣等具ニ言上一々御尤ニ御聞取被成候との事ニ候へ共只々程能御挨拶迄ニ而御取合無之趣ニ相見扱々慨歎之至ニ御座候尤會桑を初薩州久留米等之諸藩にも追々出會右之向々茂専ら盡力且紀州御末家松平左兵衛督様にも仁右衛門罷出此御方之至極御同意ニ而御周旋其後九州之諸藩大略一致之様子等被仰下候通ニ付右之處を以今一盡力申談猶伯耆守様ニ茂罷出百方手を盡少々之御腰前打替申たる哉

見込度御座候得共いまた期限被仰出申持ニ之至不申必多物長逗留先之其詮も無之候付明日爰許出立之筈ニ御座候委細之直と言上有之且去ル七日差立申候御飛脚ニ茂一ト通得貴慮申候通ニ御座候得共仁右衛門儀早着と相考申候間大略爲可得貴慮如是御座候以上

十月十日

長岡衛門

御家老中宛
御中老宛

尙々仁右衛門御國出立之節御含之稜々之内爰許ニ而伺相濟居候稜々取省猶稜書を以御伺ニ相成御付札を以御差圖之趣共別紙寫之通ニ付則進達仕候以上（別紙とは九月廿四日の條に掲げたる澤村脩藏の名を以て征長に關する幕府への伺書の事なり）

九月某日征長總督尾張慶勝幕府に上書して征長に關する全權を委任せられんことを請ふ

〔文久四年日記〕

尾州老侯御書付

會津藩柴秀次々極密ニ而上田久兵衛借受候尾州老公御書付寫

征長惣督之儀ハ誠ニ大任ニ有之何分不才抱病加之事情ニも不精候間輕易御請申上 御國家を誤候而者其罪莫太再三御直裁之儀奉願候處取類被 仰下候付而者最早彼是ハ決し而不申上下愚を忘レ御請申上專爲國家心力を盡し聊 御恩ニ奉報度就夫申上兼候へ共右之重大至極之任ニ付十分之御權柄不被下候而者號令難行屆儀と奉存候依而左之條々御許容被下候様此度御否次第速ニ取懸り候様可仕心得候事
一 征長ニ付而者全權御授之事
長州に屬候最初方之手續并今日迄之情態等委細ニ爲御知可被下候

元治元年

三三一

一 攻撃之迅速進退其外方略等之儀者事ニ臨無餘義事も可有之候間惣而以便宜取計申候心得候事

一 追討御用蒙り候諸大名差當り難澁之筋々氣邊觸餘而者御鋒先ニ關り可申と深心配仕候付妻子江戸居住之儀當分御猶豫之事

但弊藩之儀ハ右ニ不拘居下り可申候事

右様全權御授被下候ハ、自然外見之姿 幕威相分候様相見御嫌疑を招可申敷ト誠ニ恐懼心痛至極之譯ニ付最初ハ幾重ニも 御直裁御隨從盡力之儀 御威徳御中興之爲万々懇願申上來候次第ニ付此意底深ク御恕察御憐考之程伏而奉希候事

九月

九月某日鍋島閑叟征長の不可を公卿の間に説き行はれずんば天顔を拜して直諫せんが爲に上京すべき由を國中に示達す

〔安津免久佐〕

元治元甲子九月

松平閑叟様御意御國觸

此節長藩及暴動朝敵之姿ハ有之候得共誅伐之儀ニ至候而ハ決而不可然外患中彼術中ニ落入候而已ならず公武一和攘夷之大義ニ難至就而ハ公卿之間ニ周旋不叶者拜 天顏乍恐御諫言被申上御國是一定御上京被遊候事

十月朔日閑老諏訪忠誠本藩江戸留守居を召喚し松平兵部に命ずるに松平慶徳に屬し征長の軍に従ふべきを以てせし旨を達す

〔長防爲御征伐御進發一途、長防御追討一件、江戸返達御用狀扣〕

〔十月朔日諏訪閑老より留守居呼出渡之〕

松 平 兵 部

毛利大膳父子始御征伐被遊候付追討之儀同姓相模守被仰付候處其方儀相模守と者別格之因ニも有之候間同人ハ附屬追討被仰付度旨願之趣達御聽候處願之通相模守人數ニ相加り可致追討旨被仰出之 右之通相達候間爲心得相達候事

十月朔日幕府松平頼徳の官位を禡ひ之に自刃を命ず

〔長州御征伐記〕

申渡の覺

松 平 大 炊

官位被召放之

右於松平萬次郎宅大目付黒川近江守御目付羽田十左衛門罷越近江守申渡之

申渡の覺

松 平 大 炊

野州邊屯集之浪徒暴行および水戸殿御領分動搖致し候付爲鎮靜水戸殿名代として被差遣候處却而賊徒並水戸殿脱藩之士ニ加り公義御人數に及敵對不届之所業ニ付切腹被仰付之

〔全 書〕

子十月五日夜松平大炊切腹被仰付候手續書

大目付黒川近江守御目付羽田十左衛門兩人松平萬次郎方に相越同人罷出挨拶有之而松平大炊に相達之儀有之候段申達

元 治 元 年

同人儀麻上下服紗小袖ニ而罷出兩監察カ下座ニ着座其節近江守儀 御監物之趣申渡難有仕合奉存候旨大炊御請申上夫より別席ニ相成

一別席之儀兩監察ハ檢使として上座ニ御徒目付等召連着座白緣疊貳疊敷尙堂疊を前之方に敷其形品圖如く白蒲團を敷大炊より中央ニ着座萬次郎家來ニ而介錯人壹人扣疊人大炊を狹居其節白木三方に短刀を載持出大炊より三尺程隔候而差置同人儀手を延し右三方に手を掛ケ候折柄介錯人直ニ拔身首を刎首檢使之前に持出し兩監察會釋有之候得之死骸ハ取片付度旨申立勝手次第之旨申達候得之首胴共一所ニ右白蒲團ニ而包大炊着服ハ鼠色無地之麻上下白羽二重小袖也

右見届相濟兩監察とも引拂之事

〔尊攘錄皇武令〕

元治元子
十月朔日伯耆様御宅ニ而被仰渡候由

申渡之覺

松 平 主 税
松 平 主 税
小 出 信 濃 守 様ニ
松 平 讚 岐 守 様ニ

官位被召放
大炊様之御奥様
御家來不殘

右之通御兩家ニ御預ニ相成候由
十月二日

野州邊屯集之浮浪之徒暴行ニおよひ水戸殿御領分動搖致し候付爲鎮撫水戸殿名代として松平大炊儀被差遣候趣大炊儀公儀御人數に對し不届及所行候付官位被召放御咎被 仰付候依之其方儀戸澤中務大輔に御預被仰付之

一松平讚岐守様に左之通御達ニ相成候由

野州邊屯集浮浪之徒暴行ニ及ひ水戸殿御領分致動搖候付爲鎮靜水戸殿名代として被差遣候處 公儀御役人に對し不届之所業候付官位被 召放御咎被 仰付旨於水戸表相達候付當地屋敷罷在候大炊家來共者不殘讚岐守家來に御預被成候間早々引取償ミ爲置候様可仕候尤婦女子之分之夫々之親類共に引渡候様可仕候委細之儀之御目付に可被承合候

松 平 播 磨 守
松 平 大 學 頭

同文言

御咎被 仰候付屋敷不殘上り候間右屋敷其方に御預被 仰付候委細之儀之御作事奉行御目附に可被談候
右之通相達候間得其意向々申談差支無之様可被取計候事

十月二日
右之通ニ付御家族御家來等探索仕候處左之通

松平大炊様之子供衆 兩 人
御隠居主税様之子供衆 三 人
御家來 六拾壹 人

元 治 元 年

内男	三	拾	壹	人
女	貳	拾	七	人
子供	三			人

右讃州様に御預ケ

一上下御屋敷之松平大學頭様に御預ケ火之元廻り方ハ松平播摩守様之由

十月朔日森开惣四郎將軍進發遷延の理由を報す

〔元治元年 尊攘録探索書〕

十月朔日森井惣四郎聞取

一公方様長州御征討今ニ御進發之期限も相立不申譯之昇平無事打續候故 公邊隊伍和廢兵卒五十人之隊ト申候而も卅人計リニ減少致且兵器も同様充實不仕故當時最中右御用意ニテ御座候由承申候然處御進發御遅緩之儀之前條之先小事ニ而於 公邊尤大事件有之候由久留米藩士方承申候右藩士下村貞次郎 公儀人何某ニ懇意ニ而御座候處某ハ當時横濱に出張仕居候由同人方貞次郎承候ニハ今度外夷長州を討歸帆之後横濱ニ而外夷方 公邊ニ申出候ニ之長州討伐之入費償金長州方二百万ドル 公邊方ハ因循之罪ニ而百万ドル都合三百万ドル御渡被成候様申出已ニ 公邊ニ而御承知相成候由夷人方之趣意之長防兩國此方打從候得ハ價金請取候迄ハ決して御征伐相成間敷と彼等申募居候由其譯ハ御征伐之後ハ二百万ドル出ル處なき故ト申事長州方夷人ニ之談判者兩國之内ニテ一港を開運上金等ニ而年賦を以可相渡との約束之由右之通混亂いたし 公邊ニ而三百万ドル外夷へ御渡ニ相成候力も無之夷人方請取申迄ハ決而容し不申勢之由御座候ト話仕候由近來之夷人談判之儀 公邊方ハ堅ク漏を不申右一條も外夷方承り候事之由ニ御坐候

一右同人之話之由ニ之夷人長州より歸帆之後之横濱地面一万坪計御借渡ニ相成其中ニ者商人住居之地餘計ニ有之家居士

藏迄も明ケ渡候様御達御座候故商人大ニ困窮仕候由只今最中作事之由ニテ最早加奈川より間近く相見へ候所迄彼等商館相立候筈之由右等之談判之竹本甲州之由ニテ夷人より之人才之人と大ニ稱譽いたし居候得共横濱商人共之類ニ惡ミ居候由近來横濱ニ之御觸ニ之何事も夷人之氣ニ觸不申様との事ニテ夷人益跋扈仕候由

一御進發御延引之儀之前條之譯ニ而御坐候處假令夷人之故障相止ミ候而も 天朝方開國御容し不被遊候而之御進發無之由ニも承申候

十月朔日鍋島閑叟上京の途次熊本を過ぎる

〔元治元年五月二日以後慶應元年十二月迄 御記 録〕

十月朔日薄霜

一松平閑叟様御前候 御上京として先月廿九日佐賀表御發足今曉七半時之御供揃ニ而山鹿御立熊本御泊 此方様に御對面として御花畑に御出夕八半時 表御門際より御下乘御取次兩人御白洲に罷出居平伏夫より一人ハ御先立佐野御間御上段前ニ御案内御茶御多葉粉盆御給仕役方出御小姓頭罷出御口上承之畢而 太守様右之御間迄 御出ハ御平服閑叟様御對顔相濟而御先立御同道陽春御間に御通御餐應有之夜五半時過御退去裏御玄關より御下り直ニ御駕ニ被召表御門より御歸ニ相成候尤 太守様ハ落間迄御送被遊候

澄之助様ニ茂御出御對面 良之助様ニハ御不 刑部殿監物殿も召出有之候由 快ニ而御出無之

〔小笠原美濃日録〕

十月朔日晴

松平閑叟侯來、午后從前門入花殿、公常住披雲閣、而對話中召米田氏及予、閑叟侯當侯以與公同學、征長之命依頼予等、云々、側話及長之犯罪之事件、與夷和議之事、且曰、此回之上京、爲伺天氣也、外無意、云々、及初更之半、

元治元年

歸客館、米田氏及予、送之於弓室外落局口前、而公送而至落局之北、澄公子同局之西座而送、○米田氏出元田八所草建白之案、

〔機密間日記〕

十月二日

一松平閑叟様澤屋御止宿諸事無滞相濟今卯中刻御出立ニ相成候段達有之候事

十月朔日薩藩の使者黒田嘉右衛門折田要藏熊本に來る

〔文久三年八月以來越前様外九藩へ御使者被進候一件〕

十月三日

一御客屋方御奉行中より左之通

被仰越通承知仕別紙

松平修理大夫様より之御使者黒田嘉右衛門折田要藏と申仁參着今日於御客屋拙者共内

披見致返進候

致應對答候此段爲御存申達候以上

御右筆頭中

猶々御使者口上書寫差遣入御披見申候以上

薩州より之御使者昨夕紺屋壹丁目紅屋武兵衛所ニ參着宿亭を以毎之通承合候處別紙三通之通ニ御座候依之於御客屋御應對御料理を茂可被下置と奉存候左候得之諸出役等之儀之追々之通宜敷及御達可被下候以上

十月二日

御客屋支配役中

御客屋方

根 取 衆 中

猶々御客屋出方之節ハ野服之儘出方之由御座候以上

松平修理大夫内

黒田嘉右衛門

折田要藏

右使者

右一通

軍事奉行

知行高貳百石

黒田嘉右衛門

折田要藏

下ニ付札

上下八人

御直書御音信物赤馬等無御坐候

御手許極御内用筋之御使者ニ候間御重役方又之 御側御近キ御重役之間ニ御面會申上度候事

十月二日日本藩政府は友枝善右衛門等の筒百挺代錢上納の請願を許可す

〔炮器寸志一件〕

乍恐奉願口上之覺

當節彌以切迫之時勢ニ相成申候ニ付而追々御達之趣奉承知候間近頃恐多奉存候得共ケベエル筒先百挺乍聊寸志差上申度奉存候然ル處急ニ現品手ニ入兼候上不安内ニ而筒之善悪相辨不申候間御國御製造之御筒百挺丈代錢を以上納仕度奉願候右如願被召上被下候ハ、其加至極難有仕合ニ奉存候此段可然様被成御達被下候様奉願候以上

元 治 元 年

三二九

元治元年九月

三三〇

友枝 善右衛門印
友枝 丑之助印

吉田 鳩太郎殿

三好 半助殿

今度市兵御取起付而之餘計ニゲベル筒入用ニ御座候處此砌御貸渡ニ相成候御筒ハ殘少ニ御座候由之處本紙兩人方如此相連申候右之差寄御用ニ相成候間可被召上哉ニ候處右製造之儀相對頼ニ而ハ土臺不案内之上屆兼候綾茂有之筒之善惡亦不相辨候付百挺丈之代錢差上申上度段本紙之通ニ御座候間御城内方談合仕候處於同局茂何之差障茂無之製造之儀茂直に出來方及違候儀支不申趣ニ付代錢等之積申談候處ゲベル壹丁四百五拾目筒亂一百拾匁都合五百六拾目ニ而出來之規則ニ御座候由百挺代凡五拾六貫目ニ相成申候此度炮器寸志之内ニ被立下右之百挺之先町方之御備ニ被仰付置候ハ、差寄積古用御貸渡逸稜之御用辨ニ相成可申候間右代錢被召上旨及違候而ハ如何程ニ可有御座哉
但本文之趣ニ付而ハ内望等茂無御座候間外々被賞茂御座候ハ、猶其節別途取まらへ可奉伺奉存候

町方

吉田

三好

各儀ケベエル筒百挺丈之代錢を以寸志被差上度由願之趣相尋候處奇特之至ニ付願之通被 召上旨候依之壹挺代五百八
(朱書込)
此五拾六貫目上納相濟候付此奥ニ有之候拾貫目と打混都合六拾五貫目善右衛門ハ組付御中小姓列丑之助ハ御留守居御書方之席に進席ニ元治元年十二月申立濟

拾目宛ニメ都合五拾六貫目櫃方御會所に差出同所受取書を以町方に可被差出候以上
元治元年也
十月二日

三好 半助

吉田 鳩太郎

友枝 善右衛門殿

友枝 丑之助殿

町方

此節之炮器寸志ニ民力強寸志差出置候を取加御賞美可被仰付哉

機密間付紙

此節之寸志ニ取結難叶事(此項砲器製造費として寸志上納の謂願多かりしと雖も今一々之を載せず)

十月三日幕府柳河藩主立花鑑寛に下せし征長進軍に關する令達を本藩に交附す

〔長防御追討一件〕

十月七日長岡村上より 十一月五日着

一同(十月)三日御用番松平伯耆守様より御呼出ニ付御留守居代安東彌太郎參上仕候處立花飛騨守様御事右大膳父子御追討ニ付而之御攻口割替被 仰付候付而之御書付一通御用人を以被成御渡候付差上申候御答之儀者可被 仰付哉と奉存候
恐々謹言

ツマニ
細川 越中守に

立花 飛騨守

毛利大膳父子始爲追討海路萩夫より山口に攻寄候答ニ候處攻口之割替被仰出下之關より府中清末夫より山口に攻寄候松平美濃守松平肥前守同様ニ之手ニ被仰付候間可被申合候

十月三日日本藩牛島五郎小野敬藏古山左内緒方十右衛門に新購入の汽船乗組を命じ且つ軍艦所創設の上は同所に出仕すべき事を達す

元治元年

〔機密間日記〕

覺

學校方

御奉行に

牛島五一郎

右者今度御買上之蒸氣船乗方被 仰付右ニ付而之御用筋暫之間一切引請被仰付御軍艦所御取建之上者日々同所に罷出御役々無伏藏申談候様尤航海衛引廻之儀之於江戸被仰付置候通相心得候様可被達候以上

十月三日

島田徳左衛門組小野敬藏儀右同斷

同日

奉行所

山尾平之允殿

中村新助殿

尙々敬藏儀御奉行假觸被仰付候條此段可被達候以上

田中八郎兵衛組古山文内弟古山左内儀今度御買上之蒸氣船乗組被仰付御軍艦所御取建之上之日々同所に罷出諸事航海衛引廻之面々申談候様可被達候以上

同日

奉行所

加々美健之助殿

田屋久右衛門殿

牧多門助組諸方左助弟緒方十左衛門右同斷

同日

同

池邊棕右衛門殿

山縣嘉平太殿

達込扣略ス

十月三日本藩番頭牧多門助來十一日鶴崎を發し上京すべき旨を藩政府に申告す是日多門助在京中職務執行の心得書を下附せらる

〔小倉一件〕

拙者儀出京被 仰付置組之面々來ル六日御許被差立候付同日鶴崎着可致候間翌十一日一同此許致乗船候此段御達申候以上

十月三日

牧多門助

御奉行衆中

右紙面當番所方達込來候事

〔機密間日記〕

覺

牧多門助に

一於京都御公務筋之儀者萬事 朝廷幕府之御下知ニ被爲隨候儀之申迄茂無之候處萬一官武御行違御混雜ニ被及候様之儀有之候共ひ々しく 皇國之御爲筋を押し御處置有之事候條右之心得を以可被相勤事

一御守衛向者兼而御持場被定置候付其場所厳しく持堅有之儀者勿論之筋候處土臺京都御守衛之御公務ニ候得之自然異變

元治元年

三三三

之節時機ニ應候而者彼我之請前ニ不泥御手之及候丈之致盡力御守衛之御本意相貫御國辱ニ不至様一統覺悟有之候様御物頭以下は茂兼而可被示合候事

一軍事ニ係候儀從政府茂申談可有之候間心付候儀之其方は茂可被申立候事
以上

十月三日

右書付監物殿御封印を用十月三日多門助嫡子牧新吾に直ニ被相渡候事

以別紙申達候今度牧多門助儀鶴崎表は直ニ致出京候付而者御國議を初一躰之御事情茂委承知無之候付心得ニ可相成筋者親取罷登申度山監物迄委細内意之趣ニ付同人に相渡候書付別紙寫一通爲御存差遣候軍事ニ係候儀者時宜ニ因御物頭組脇まで茂御談合有之度且又斥候之儀者御役前ニ因他所應接等茂仕度由伺有之其通及差圖置候間是又爲御合申達置候以上

十月四日

小笠原一學殿 (別紙寫ハ前條之覺書ニ付扣略)

〔御國江戸往來狀控〕

出京被仰付置候付十月六日御國出立同廿日着添狀一通有之候事

連 名

牧

多門助

組並子弟共（子弟ハ魚住武門以下十五人）

※小倉一

十月三日我藩吏薩藩の使者黒田嘉右衛門等に客館に應接す

〔御在國日記〕

十月三日

一御客屋方御奉行左之通

松平修理大夫様より之御使者黒田嘉右衛門折田要藏と申仁參着今日於御客屋拙者共致應對管候此段爲御承知申達候以上

十月三日

御用人衆中

尙嘉右衛門要藏儀軍事奉行ニ而知行高貳百石宛上下八人之由候以上

本文御側御取を以申上候事

十月初旬在府本藩重役は征長につき將軍進發及び總督拜命の急決あらんことを幕府に進言す

〔御飛脚前探索筋言上并御家老達等之扣帳〕

松平伯耆守様は長谷川仁右衛門を差出候書付寫

今度長防御征伐被仰出候付而者急連ニ御進發被爲在度との儀者越中守國許より態々早打之使者を以て差上候建白書之通御座候就而者御進發之御期限奉伺早々國許に罷歸候ハ、越中守儀茂不取敢出張仕候覺悟ニ罷在候間御模様之程只管奉待居可申因而一刻茂駈下申聞度奉存候間御期限御治定被爲在候ハ、奉伺度左茂無御坐此儘罷歸候而者復命之詮茂無御坐甚以心痛仕候且又尾張前大納言様御總督之御請茂いまた不被爲在哉之由唱候者茂有之此砌人心尤疑惑之一端ニ可有御坐と乍恐奉案勞候勿論深々御廟議被爲在候而之御儀とハ奉存候得共前條兩議御急決不被在候而者人心之向背ニ茂關係可仕事と奉恐考候間一刻も御果斷之程奉仰冀候右之次第一同申合候趣不奉願憚申出候不惡御聞通被成下候様奉伏願候以上

元 治 元 年

三三五

十月

細川越中守家老代
 長 岡 衛 門
 同國許より之使者番頭
 長 谷 川 仁 右 衛 門
 同留守居
 澤 村 修 藏

十月四日將軍家茂親書を發して征長軍の指揮を尾張慶勝に委任す

〔小倉一件〕

長防追討之義共許に致委任候條副將以下諸藩之面々指揮被相加軍事之義大小共機宜見計便宜之處置有之速ニ遂成功候様可致もの也

元治元年十月四日

家

尾張前大納言殿

傳奏衆より御達

尾 張 前 大 納 言

大樹前軍總督發向之上諸軍士氣引立彌盡力可有之 御沙汰候事

十月

前大納言様御演達振

不肖之此方過分之大任ヲ蒙り實ニ心配をいたし此上之諸藩之力を頼より外無之候此度之義之公武之命素より之事謹而

粉骨を被致よ此方において年來之御報恩爰ニ盡す間諸藩に此段約し置

十月六日尾張慶勝書を我藩主慶順に贈り征長總督拜命の旨を告ぐ

〔長防御追討一件〕

〔七日尾藩土野崎藤吉使者として京都の本藩邸に來り本書を致す〕

一筆令啓達候彌御無異珍重候將又我等儀毛利大膳父子御征伐ニ付打手之總督相心得諸事可致指揮旨被仰出候然共大任之儀其上近來多病罷成候付申立置候趣有之候處再應厚蒙台命今度御請申上候依之申入候猶期而談之時候恐々謹言

尾張前大納言

十月六日

肥 後 中 將 殿

慶

勝

御宿所

十月六日征長總督尾張慶勝諸藩の重役を召集し軍議を開くべきを以て來廿日迄に大坂に會すべき旨を達す

〔小倉一件〕

以別紙申達候一昨夜半尾州老侯御宿所々長州御追討惣督被蒙 仰候儀付而昨六日四ツ時重役罷出候様可致旨御留守居に申來候間不容易御事柄に可有御座と奉存道家角左衛門並上田久兵衛同道罷出候處成瀬隼人正面會別紙書附貳通相渡申候間則進達仕候御答等之儀之爰許ニ而篤斗分兼候得共申談豫メ別紙之通相認メ尤治定之儀之御國許に往返之上相達可申旨今早朝御留守居差越及演達せ置申候間御様子此許に被仰下候歟又之 御出馬向キニおゐて御達有御座度奉存候老侯御下坂日晷無御座此節之御模様と而者御役々手足不申候得共當時御間欠ニ者不相成様取計可申と申談置申候左様

元 治 元 年

三三七

御承知被下宜御衆議可被下候右ニ付而稜書一通進達仕且草野平藏儀事體言上旁上々早打ニ而今日差立委細者同人に申含置申候間御聞取可被下候此段爲可申達如斯御座候以上

十月七日

小笠原一學

御家老
御中老充

尙々老侯ニ者前文之通御動ニ相成候得共 幕府御進發之儀者今以相分不申甚懸念仕候以上

稜書

一別紙諸藩家老來ル廿日迄ニ大坂表に罷出候様との儀者御軍議ニ被差加候御様子ニ付御登人急ニ御出坂被下候得之此上
甚無御座候得共日端無之事ニ付先ツ私并道家角左衛門小川次郎助下坂可仕ト申談候事ニ御座候

一御軍議ニ被差加候事ニ付自然者下坂迄ニ而ハ相濟不申廣島邊迄被召連候様ニも御座候得之根本之御當地打明候事ニ付
是非御登人ハ御登坂被下御付添被下候歟私直ニ御付添申候歟其節之御模様ニ應シ可申尤上村彦次郎被差立候御江戶表

御周旋等之儀ニ付御一門衆ニ而茂出府有御座度との趣申含置候間最早其被 仰付相濟居候ハ、先出坂被致候様有御座
度御當地之儀御席中様歟私ニ而茂相詰居不申候而者當時之事躰暫茂難相濟奉存候間急ニ御評決可被成下候

一私共下坂跡之儀者佐久間角助儀來ル十日比上京可仕段申來居候付同人并上田久兵衛殘置 公武之御都合等取計せ可申
尤久兵衛を同道下坂仕候得之逸稜辨利ニ相成可申候得共次郎助殘置候而者未々爰許之都合如何可有御座哉ト久兵衛を

殘置候事ニ御座候

一青地源右衛門儀一昨五日出府ニ付差寄右之通小川次郎助下坂仕せ候筈ニ候得共昨今之助動ニ而御用辨何程ニ可有之哉

ニ付中山左次右衛門儀至急ニ出坂被 仰付度尤同人ハ先月十九日之日付ニ而老母病氣今三四日之處見切出來兼候段申
來居候由ニ付最早黑白相片付爲申ト考察仕候間萬一喪中ニ居申候ハ、急速ニ忌 御免ニ而被差立候様若同人急ニ難被

差立候ハ、外ニ登人新役被 仰付不取敢被差登候様有御座度奉存候

一右次郎助下坂中者永屋猪兵衛を出京被 仰付爰許之在御家人指揮ハムシ候様可被 仰付ト申談候事ニ御座候尤次郎助

儀尾州越前等を始 公武之御役々様方に久兵衛同道御引合せ申上成丈御入魂ニ相成居候様久兵衛に申含置候

一惣督副將之御方に御附人之儀彌以至急ニ被差越候様奉存候

一昨日尾州様方御渡之稜々爰許ニ而大概之見込付候分ニ御役々打寄別紙之通取調今早朝上田久兵衛持參差上申候

右之通ニ御座候以上

十月七日

〔元治元年長征記録〕

(京都返達御用狀控、長防御追討一件文久四年日記、小倉一件等ニモ出ツ)

十月、於京都成瀬軍人正方被相渡候書付貳通之内壹

前大納言殿儀毛利大膳父子御征伐ニ付打手之惣督被相心得諸事可被致指揮旨被仰出候付近々爰許發途大坂表に被相越

軍議可被致候間諸藩家老來ル廿日迄ニ右表に被出候様可被致候勿論近國之諸侯者都合次第自身被罷出候様被致度且

右期日迄ニ國許方難相越向者在京重役之内國事ニ關り候者可被差出事

十月

右同貳

一旗旌小印等之圖而夫々被差出候様致度事

一軍兵之惣數陪卒迄之人數者承知致度事

一御重役并隊々之長姓名承知致度事

一出張之道路并御國許方防長迄之里數承知致度事

元治元年

- 一 御軍令之關東方着次第可相達事
- 一 前大納言殿着陣之場所藝州廣島之御事
- 一 諸軍敵境着到之地

附

着到之日限

攻口仕寄之日限

右者於大坂表軍議之上可被達候事

右一二書付ニ應し豫見込之趣御答ニおよび置候寫

一 御ケ條

旗旌小印等之圖面別紙之通御坐候事

上ニ付札

此圖面之文化度 公邊に御届ニ相成候寫御書方有之候を差出候

但御大馬轡御昇御小馬轡御船印帆印之圖ニ而御坐

候事

二 御ケ條

働人數凡一万内外ニ茂可有御坐候事

三 御ケ條

小倉援兵

一手

備頭 沼田勘解由
番頭 志水久馬助

寺尾九郎左衛門
田中八郎兵衛

惣人數二千五百余

右之通八月十六日より出張仕居候

一手

家老 有吉 將監
番頭 二 人

一手

備頭 溝口 藏人
番頭 二 人

一手

家老 長岡 帶刀

一手

末家 細川 豊前守
木陣 舍弟 長岡 良之助

四 御ケ條

熊本方小倉迄四十壹里半餘小倉方長州下關迄海上三

十月六日森井惣四郎は將軍進發の時期及び長州償金問題に關し竹本甲斐守が會藩士林三郎に語りし談話の要領を報告す

〔尊攘録探索書〕

元治元年 十月六日聞取(抄略)

森 井 惣 四 郎

一 今六日會津藩林三郎竹本甲斐守様に罷出御進發御模樣を伺候處御答ニ之明七日行軍御上覽被遊候答ニ而只今通ニ候ハ、大概當廿日比ニ而可有之と見込居申候是非共比迄ニ之御進發可有御座と此方ニも盡力仕居候との事ニ御座候處猶林方伺候ニ之肥後侯方之御事 此方様 態々三百里外之遠國重役被差立御進發御建白御座候間右重役明七日ニ出立之由ニ承候處未タ御進發御比合之何とも聞老方被仰聞も無之由折角遠路被差立候而御日限も不奉伺取罷歸候而之其身復命之力も無之且肥後侯ニも定而思召惡しく必一國人氣之障とも可相成奉察候間自然廿日比御進發と申儀ニ御座候ハ、明日迄ニ御内沙汰被仰出候儀之被爲出來間敷。と伺候處拙者ニも一日なりとも御速ニ御座候様盡力仕居申候得共明日迄ニ御内沙汰御座候様ニ之迎も參兼申候。あし肥後侯御使者空く罷歸候も甚々残念ニ御座候間前文之通廿日比と申事拙者方肥後侯重役舍之爲、内々話仕候と其方傳へ可被申と御答御座候由右林方態々相知らせ申候

一右同人ヲ猶竹本甲州ニ伺候ニ之此度外夷長州ニ向候ニ付而之長州ガ貳百万ドル公邊ガ百万ドル之價金を願出候由ニ而右之通御承知御座候由承申候何程ニ御座候哉ト伺候處甲州之御答ニ之價金之事申出候得共其高之不申出スルシ三百万ドル日本ガ請取可申旨本國ニ申遣候ト之彼ガ知らせ候との御答之由

一同人猶伺候ニ之毛利出雲も下關ガ夷艦ニ乗組横濱ニ參居候由ニて公邊ガ相渡候様夷人ニ御懸合ニ相成候處此方ニ身を托候得之直ニ公邊ニ之差出不申ト夷人ガ答候由承候處實事ニ而御座候哉ト伺候處甲州之御答ニ之出雲横濱ニ參居候之全く實事ニて公邊ガ夷人ニ御懸合御座候處夷人偽りて隠置て出し不申候ニ付探索を出し置候處近來之伊豆之大島に夷人ガ出雲を連越候由ニて猶大島御代官に公邊ガ探索致候様被仰越候との御答之由未タ何タル趣意も相分不申由ニ御座候

十月六日澤村脩藏は先月酒井飛驒守横濱に於て外人と長州事件の償金及び下關の開港に關し談判せし由を報す

〔御飛脚前探索筋言上並御家老達等之扣帳〕

當節横濱之模様爲探索御用御頼外國奉行組頭宮田文吉様ニ御城使里内官右衛門罷越相伺候處先月中酒井飛驒守様横濱に御出張ニ相成長州一條ニ付而之價金ハ彌 政府ガ御渡ニ可相成旨之書付御渡ニ相成下之關開港之儀ハ阿部豊後守様京都ガ御歸府之上ならてハ御決答ニ難相成旨被仰渡候由尤下之關開港ニ相成候ハ、價金ハ受取不申段外國ガ申出居候由

一價金御渡之員數相伺候處駭ト不相分候得共余程之大金ト計被仰聞候付此程風説ニ之 政府ガ百万ドル長州ガ貳百万ドル御渡ニ可相成哉之唱及承候段申上候由之處右様之儀ハ無之全 政府ガ御渡之管之由被仰聞員數ハ御秘事之趣ニ而不被仰聞候付強而相伺不申引取候由

一先月中英軍艦に長州人八人爲乗組横濱に致着艦候付右之者 政府に可相渡旨神奈川奉行を以御談判ニ相成候得共相渡不申右者生捕之者之由申立候得共事實不明之由尤右ハ神奈川奉行御取扱ニ付文吉様御手許にハ駭ト不相分候得共序ニ付被成御噂候趣且惣躰之處ハ豊後守様御歸府無之内ハ相分兼候趣御内話御座候段申出候以上

十月六日 澤 村 脩 藏

十月六日日本藩江戸留守居は將軍上洛野州追討及び長州事件の償金等に關する諸經費を探り報す

〔諸雜御留守居録上〕

一左之書付二通十月七日被指出 御城向ニ而此節風説之趣

一御進發之節御道中一日之御入目
七万貳千兩宛ニ之二十四日之御日積之由ニ付都合百七拾貳万八千兩

右之外兵糧米之御見直ハ未付兼居候由

一野州に官軍御差立後一日一万兩宛之御入目七月廿六日田沼侯御出張後當月七日まで凡七十日分都合七拾万兩

一長州一件ニ付而之價金三百万トル

内 百万トル 公邊ガ
貳百万トル 長州ガ

元 治 元 年

年賦之由
右一トル三分宛ニ之
三百万トル之代金
貳百貳拾五万兩
三稜
合四百六拾七万八千兩

右之通相唱申候得共事實駭ト相分兼申候其上長州御征伐之上下ノ關開港ニ相成候へハ不及價金旨も戰爭後各國ガ申立居候由旁相分兼候得共右之風説及承候付申上候以上

十月六日 御留守居方

十月七日將軍家茂吹上の庭に於て閱兵を行ふ

〔御飛脚前探索筋言上并御家老達等之扣帳、京都返達御用狀扣〕

昨七日美日ニ而四時吹上御庭に被爲 成行軍被遊 上覽諸事無御滯相濟申候右御模様爲見聞附屬役々差出候處朝五時分追々ニ諸方御居宅方勢揃ニ而御出も有之又ハ半藏御門外ニ而御同勢落合も有之四半時分ニハ都而操込相濟申候右ハ出入共半藏御門ニ而御役々一ト切々々ニ御行列旗印御持鎗騎馬ニ而歩卒御役々ニ應し被召連候尤騎馬ハ頭立候面々計ニ而帶刀之外旗持御附之外雜兵無之陣羽織小袴筒袖紋附之上着ニ而甲冑着物ハ無御座誠奇麗成ル事ニ而余計之御人數万端御都合能 上覽相濟退散薄暮ハ六半時過迄ニ相濟申候短日之上所々乘廻し歩兵操打大砲火入操廻し一ト通之外御好被 仰出御手間取ニ相成候由御座候
一右被爲濟候上最前之御模様ニ而ハ 御進發御日取も可被仰哉ニ付四日之 御城出ニ而向々相探候處今日迄ハ被 仰出候御模様無御座其外相替儀無御座候以上

十月八日

澤村脩藏

十月七日幕府征長從軍の諸侯に令し領内圍米糶の拂出を許可す

〔文久四年八月慶應二年迄御同席觸寫并大日付様御廻狀寫〕

松平伯耆守殿御渡候御書付寫登通相達候間被得其意云々

十月七日

大目付

細川越中守殿

(外六名)

右留守居

大目付に

今般毛利大膳父子始御征伐被 仰出候ニ付而者追討被 仰付候面々並御進發ニ付万石以上御供之面々寛政天保兩度被 仰出候領分圍米糶當時圍有高之分此度糶米爲手當遣拂候儀不苦候尤詰戻年限等之儀ハ追而 御沙汰可有之候間可被得其意候

十月

右之通長防追討之面々並 御進發御供相勤候万石以上之面々に可被相達候

十月七日本藩上林三三郎に新購入の汽船乗組を命じ且つ熊本船場三丁目永田兼次郎宅懸屋敷に新設の仮軍艦所に出仕すべき事を達す

〔文久四年機密間日記〕

其方共支配上林源左衛門二男上林三三郎儀今度御買上之蒸氣船乗組被 仰付日々假御軍艦所に罷出諸事航海術引廻之面々申談候様可被達候以上

十月七日

奉行所

御裏方

御用人衆中

覺

源左衛門二男

上林三三郎

右者今度御買上之蒸氣船乗組被仰付候様且船場三丁目永田兼次郎宅懸屋敷ニおゐて假御軍艦所被極候付日々同所ニ罷

元治元年

三四五

出航海術引廻之面々に諸事申談候様御達有御座度奉存候已上

十月

小野敬藏

太田黒權作

十月八日日本藩備頭沼田勘解由に臨時征長軍總奉行心得を命ず

〔小倉一件〕

其方儀有吉將監出張迄之間惣奉行之場茂相勤候様被仰出候間可被奉得其意候以上

十月八日

奉行所

沼田勘解由殿

征長之儀未期限茂相分不申將監出張之場ニ至兼候處左候而之諸事之都合茂惡敷様子ニ付同人出張迄之間沼田勘解由儀惣奉行之場茂相勤候様被仰出候付其段及達候條左様相心得達筋等之儀可被取計候以上

同日

右 同

小倉出張之御奉行也
片山多門殿

十月八日日本藩白石清兵衛瀬戸熊助河田俊右衛門等に砲器製造懸を命ず

〔機密間日記〕

覺

御奉行に

白石清兵衛
瀬戸熊助

右者今度砲器類新規製造ニ付右御用懸被仰付候條至急ニ出來之儀申談候様

河田俊右衛門

右同斷御用懸被仰付候

藤本忠次郎

右之御武器類御修理御仕繼且玉藥御備御用懸被仰付候

右之通可被達候以上

十月八日

十月九日幕府は總督尾張慶勝の指揮に従ひ征長の兵を進むべき旨を我藩外卅五藩に令達す

〔機密間日記〕

元治元年

以密書啓上仕候長谷川仁右衛門儀明十一日被差立候管ニ付今日相渡候管ニ而別紙相認置候處昨夜御用番松平伯耆守様方御呼出御封書御渡早々御國許に差上候様との旨ニ而右御封書之趣之何たる御模様茂相分不申候間今朝尙御留守居を以極密伺取せ候處機密之御事柄ニ而不分明之御答ニ御座候然處今度御建白御差上ニ付定而右之御事ニ可有御座候御模様次第ニ之此許ニ而差寄心得ニ相成儀茂可有御座哉何分此儘ニ而之不安意ニ有之且此方様御列三十六藩に同様之御封書御渡ニ相成他藩ニ而之開封之向茂有之候由ニ付旁午恐竊ニ開封拜見仕候處別紙寫之通ニ而關ヶ原之古轡ニ被爲做候御事ニ相見此上之差寄盡力之見込茂無御座候間仁右衛門儀右之御封書持參之御使者被仰付今日早打ニ而被差立段及達申候右之通ニ候得之尾州老公御指圖次第速被遊御出馬ニ而可有御座御武門之御面目之申迄茂無之儀ニ奉存候得共乍恐一方ノ奉氣遣候事ニ而只々心中迷騰仕候迄ニ御座候右ニ付之諸般之御手賦等御混雜之程深く拜察仕御本書直ニ御下茂可被爲在候得共御心得之たま爲寫進達仕候以上